

古墳時代～中世を主とした複合遺跡
矢原遺跡群
(馬場街道遺跡)

—県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告—

1987・3

長野県豊科建設事務所
穗高町教育委員会

古墳時代～中世を主とした複合遺跡
矢 原 遺 跡 群
(馬場街道遺跡)

—県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う
緊急発掘調査報告(第1・2次調査) —

序

矢原遺跡群（馬場街道遺跡）は、穂高町矢原地籍にあり、本調査の県道柏矢町田沢停線の拡張部分とは、矢原遺跡と称されている中を東西に横切る関係位置にある。

この度、中央道長野線の建設工事に関連して道幅拡張予定地として指定されることになり、直ちに県文化課・同豊科建設事務所と現地踏査をし、緊急発掘調査の上、記録保存を図ることになった。

1、2次の調査には、団長に山田瑞穂先生を、調査員に、県考古学会員の先生方を、調査補助員には地元の埋蔵文化財に関心をおもちいただく方々に協力していただくことができた。

発掘の成果は本報告書に収録されているが、場所が河川址で土層が複雑化し確認する上で困難が多かったようである。

しかしながら近隣の皆様と、穂高商業・豊科・大町・深志高校の生徒の皆さんとの並々ならぬお骨折りのおかげで、所期の目的をかなえることができました。改めて感謝を申しあげて序のご挨拶といたします。

昭和62年3月

穂高町教育委員会

教育長 内川清士

例　　言

1. 本書は開発事業高速道関連事業県道拡幅工事に伴う、矢原遺跡群（馬場街道遺跡）の緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は矢原遺跡群（馬場街道遺跡）発掘調査団（団長　山田瑞穂氏）に委託し、2次にわたり調査を行った。

1次発掘期間　昭和59年10月13日～昭和60年1月12日

2次　〃　昭和60年7月20日～昭和60年8月17日

本書では1次・2次調査を合せて報告する。

3. 本書作成にあたり、作業分担は次のとおりである。

遺構……整理・トレース：市川・寺島

土器……復原：市川・寺島・野口

実測：島田・市川・寺島

トレース：寺島・市川・島田

石器……実測・トレース：市川

写真……撮影：寺島・野口

4. 本書で用いる方位は磁北である。

5. 本書の執筆は各調査員が分担して行い、文責は文末に記した。

6. 本調査の遺物・諸記録は、穗高町教育委員会社会教育課に保管している。

目 次

序文	
例言	
目次	
第I章 調査経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
1次調査に至るまでの経過	1
2次調査に至るまでの経過	1
第2節 調査体制	2
1次調査体制	2
2次調査体制	2
第3節 日誌	3
1次調査日誌	3
2次調査日誌	6
第II章 立地と環境	8
第1節 自然環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3節 基本層序	11
第III章 調査概要	15
第1節 発掘調査概要	15
第2節 各区概要	15
第1項 A区概要	15
第2項 B区概要	16
第3項 C区概要	16
第4項 D区概要	16
第5項 E区概要	17
第6項 F区概要	17
第IV章 遺構と遺物	18
I群 12号土壤	18
13・14号土壤	18
II群 11号土壤	19
III群 1号住居址	19

2号住居址	20
土器集中	20
炭化物集中	20
IV群 6号住居址	20
7号住居址	21
8号住居址	22
9号住居址	23
11号住居址	23
5号住居址	24
12号住居址	24
10号住居址	25
4号住居址	25
2号土壤	25
8・9・10号土壤	26
1号据立柱建物址	26
E区北河川址	26
V群 3号住居址	27
小堅穴	27
製鉄関係遺構	27
6号土壤	28
E区南河川址	28
不明 1号土壤	29
3号土壤	29
4号土壤	29
5号土壤	29
7号土壤	29
C区河川址	29
B区東河川址	30
B区西河川址	30
C区小河川址	30
第V章 結語	31
付編1 矢原遺跡群出土の炭化物について	32
付編2 矢原遺跡E区出土鉄滓について	33

図 目 次

第1図 高町南部遺跡分布図	10	第28図 4号住居址図・カマド図	66
第2図 基本土層図	12	第29図 4号住居址遺物出土位置図	67
第3図 調査範囲図	13	第30図 1号掘立柱建物址	68
第4図 A・B区遺構全体図	41	第31図 3号住居址図	69
第5図 C・D区遺構全体図	43	第32図 3号住居址遺物出土位置図	70
第6図 E・F区遺構全体図	45	第33図 製鉄関係遺構図	71
第7図 1号住居址図	47	第34図 E区IV E2層遺物出土位置図	72
第8図 1号住居址遺物出土位置図	48	第35図 1~5・7号土壤図	73
第9図 2号住居址図	49	第36図 小窓穴・6号土壤図	74
第10図 2号住居址遺物出土位置図	50	第37図 8~14号土壤図	75
第11図 6号住居址図	51	第38図 1・2号住居址出土遺物図	76
第12図 6号住居址Pit土層図	52	第39図 A区包含層・土器集中・炭化物集中 B区河川址遺物図	77
第13図 6号住居址カマド図	52	第40図 6号住居址出土遺物図	78
第14図 6号住居址遺物出土位置図	53	第41図 6・7号住居址出土遺物図	79
第15図 7号住居址図	54	第42図 8号住居址出土遺物図	80
第16図 7号住居址カマド・コモ石出土状態図	55	第43図 9・11号住居址出土遺物図	81
第17図 8号住居址図	56	第44図 5号住居址出土遺物図	82
第18図 8号住居址pit土層図	57	第45図 5号住居址出土遺物図	83
第19図 8号住居址カマド図	57	第46図 4号住居址出土遺物図	84
第20図 8号住居址遺物出土位置図	58	第47図 10号住居址、2号土壤、出土遺物図	85
第21図 9号住居址図	59	第48図 E区河川内遺物図	86
第22図 11号住居址図	60	第49図 E区河川内遺物図	87
第23図 11号住居址遺物出土位置図	61	第50図 3号住居址出土遺物図	88
第24図 5号住居址図	62	第51図 製鉄関係遺構・E区包含層出土遺物図	89
第25図 5号住居址遺物出土位置図	63	第52図 製鉄関係遺構出土遺物図	90
第26図 12号住居址図	64	第53図 遺構外遺物図	91
第27図 10号住居址図	65		

表 目 次

表1 遺跡地名表	9	表3 鉄器類	40
表2 遺物観察表	34	表4 石器類	40

第Ⅰ章 調査経過

第1節 調査に至るまでの経過

1次調査に至るまでの経過

昭和59年9月27日、埋蔵文化財保護協議を実施。出席者県文化課太田喜幸指導主事、同伝田和良指導主事、豊科建設事務所野本課長、同大久保主任、町文化財保護委員より須沢委員、青木委員、町教育委員会より藤原教育次長、山田社会教育係長、現地踏査後、町民会館会議室において協議する。

昭和59年

10月13日 埋蔵文化財包蔵地馬場街道遺跡の発掘調査について（通知）

埋蔵文化財包蔵地馬場街道遺跡の発掘調査委託契約を結ぶ。

その概要は、現場における発掘調査は、11月30日までに完了するものとする。発掘調査計画書には、発掘調査の目的及び概要で、開発事業高速道関連事業県道拡幅工事に先立ち1,000m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。調査の作業日数としては、発掘作業27日、整理作業27日、合計54日。発掘調査委託費は、全額で6,500,000円である。同日調査団結成。

12月28日 現場作業の残りと未調査箇所（未買収箇所）について、豊科建設事務所と協議する。

現場作業の残り分については、1月12日迄とし、未調査箇所については、2期工事分とする。

昭和60年

2月15日 発掘調査費の変更について。

2次調査に至るまでの経過

昭和60年7月4日、埋蔵文化財保護協議を実施。出席者豊科建設事務所野本課長、同大久保主任、町文化財保護委員より寺島委員、町教育委員会より丸山課長、山田主事、豊科建設事務所において協議する。

昭和60年

7月4日 埋蔵文化財包蔵地馬場街道遺跡第2次発掘調査について（通知）

7月20日 埋蔵文化財包蔵地馬場街道遺跡第2次発掘調査委託契約を結ぶ。

その概要は、現場における発掘調査は、8月31日までに完了するものとする。発掘調査計画書には、発掘調査の目的及び概要で、開発事業高速道関連事業県道拡幅工事に先立ち397.86m²を発掘調査して記録保存をはかる。調査の作業日数としては、発掘

作業25日、整理作業46日、合計71日。発掘調査委託費は、2,300,000円である。同日調査団結成。

9月27日 発掘調査費の変更について。

第2節 調査体制

1次調査体制

団長 山田瑞穂（日本考古学協会員）

調査主任 島田哲男（長野県考古学会員）

調査員 市川隆之（長野県考古学会員）

平林潤郎（ “ ” ）

降旗俊行（ “ ” ）

百瀬新治（日本考古学協会員）

山越正義（長野県考古学会員）

寺島俊郎（ “ ” ）

百瀬長秀（日本考古学協会員）

森 義直（大町高校教諭）

三村 雄（長野県考古学会員）

調査補助員 小島賢夫、市橋市郎、牛流弘次、竹岡喜恵人、横田作重、前田清彦、山岸洋一

調査顧問 小穴芳実

事務局 内川清士（教育長）

藤原 裕（教育次長）

山田 上（社会教育係長）

内山玲子、山田行雄、林 真基、望月増男、曾根原悦二（事務局職員）

参加者 小岩みつ子、小岩尚子、蓮井菊江、矢口アヤ、矢口秀雄、小岩二郎、望月みさ子、奈良年子、松沢和子、市東美恵子、河名春子、高橋三枝子、滝沢節子、井口富士子、中村千歳、小林幸子、浅川貴美子、浅川清人、種山隆枝、老野美喜子、青木節子、花形よし子、河名和喜次、竹岡ひろ子、竹岡まち子、竹内とし子、寺口良英、埋内秀美、井関恵美子、上嶋博子、近江真弓、上原花子、油井六一、小岩しげ子、新田仙、立川末美、山田みほ、寺林節子、小松克巳、中村芳治、小林辰馬、岡村いそよ、白居千栄門、望月博子、高橋貞子、国村ゆかり、山田清美
穂高商業高校生徒、大町高校生徒、豊科高校生徒、深志高校生徒

2次調査体制

団長 山田瑞穂（日本考古学協会員）

調査員 寺島俊郎（長野県考古学会員）

島田哲男（　〃　）

山越正義（　〃　）

降旗俊行（　〃　）

三村 肇（　〃　）

横田作重（　〃　）

森 義直（大町高校教諭）

事務局 内川清士（教育長）

丸山繁芳（教育次長）

山田 上（社会教育係長）

内山玲子（事務局員）

宇留賀剛（　〃　）

山田行雄（　〃　）

林 真基（　〃　）

曾根原悦二（　〃　）

参加者 中村芳治

矢口秀雄

河名和喜次

河名八郎

堀内秀美

野口岩男

第3節 日誌

1次調査日誌

10月13日 (土) 曙 確認調査グリッド設定。1~12グリッド掘り下げる。

10月14日 (日) 曙 1・3・10グリッド深掘り。12~24グリッド掘り下げる。

10月15日 (月) 晴 21~25、27、28グリッド掘り下げる。

10月16日 (火) 晴 27~31グリッド掘り下げる。

10月17日 (水) 雨 作業中止

10月18日 (木) 晴 休み

10月19日 (金) 曙後雨 D₂区重機により表土除去。

10月20日 (土) 曙後雨 D₂区重機により表土除去。

10月21日 (日) 晴 D₂区検出作業

- 10月22日 (月) 晴 D₂区検出作業（少しづつ掘り下げる）。
- 10月23日 (火) 晴 A・B区重機により表土除去。
- 10月24日 (水) 晴 A・B区重機により表土除去。
- 10月25日 (木) 晴 A区重機により表土除去。
- 10月26日 (金) 晴 C区重機により表土除去。
- 10月27日 (土) 晴 A区掘り下げ。
- 10月28日 (日) 曇 E区重機により表土除去、A区検出作業。
- 10月29日 (月) 曇 A区検出作業。
- 10月30日 (火) 晴後曇 D区遺構検出（少しづつ掘り下げる）。
- 10月31日 (水) 晴 C区河川址検出。
- 11月 1日 (木) 晴後曇 1・2号住居址掘り下げ、A区北東部拡張。
- 11月 2日 (金) 雨後晴 雨天のため、D₂・E区重機による表土除去。
- 11月 3日 (土) 晴
- 11月 4日 (日) 晴 作業中止。
- 11月 5日 (月) 晴 C区検出作業。
- 11月 6日 (火) 晴 D₂区検出作業。
- 11月 7日 (水) 晴 B区河川址整削、1・2号住居址掘り下げ。
- 11月 8日 (木) 晴 2号住居址写真撮影、D₁区検出作業。
- 11月 9日 (金) 晴 2号住居址平面図作成、E区検出作業。
- 11月10日 (土) 晴 1号住居址炭化材清掃、E区検出作業。
- 11月11日 (日) 雨 雨天中止。
- 11月12日 (月) 曙 E区検出作業、東側より炭化物集中部を検出。
- 11月13日 (火) 曙後晴 E区検出作業、1号住居址遺物出土状態写真作成。
- 11月14日 (水) 曙後晴 A・B区全体図作成のため作業員休み。
- 11月15日 (木) 雨 雨天、土器洗浄。
- 11月16日 (金) 晴 1号住居址遺物出土状態図作成。
- 11月17日 (土) 晴 E区製鉄関係址検出、C区清掃。
- 11月18日 (日) 晴後曇 製鉄関係址トレソチを入れる。1号住居址掘り下げ。
- 11月19日 (月) 晴後曇 3号住居址検出、1号住居址掘り下げ。
- 11月20日 (火) 雨後曇 雨天のため作業中止。
- 11月21日 (水) 曙後晴 1号住居址・2号住居址土層図・C区全体図作成のため作業員休み。
- 11月22日 (木) 晴 E区検出作業、2号住居址写真撮影。
- 11月23日 (金) 晴 小窓穴掘り下げ、E区杭打ち。
- 11月24日 (土) 曙後雨 小窓穴写真撮影・平面図作成、C区整削・全体写真撮影。

- 11月25日 (日) 曇 4・5・6号住居址掘り下げ、製鉄関係址掘り下げ、3号住居址写真撮影。
- 11月26日 (月) 晴 A区全体写真撮影、1号住居址写真撮影。
- 11月27日 (火) 曇 E区南河川址掘り下げ。
- 11月28日 (水) 晴 園取り作業のため作業員休み。
- 11月29日 (木) 晴 1号掘立柱建物址土層図作成。
- 11月30日 (金) 晴 1号掘立柱建物址写真撮影。
- 12月 1日 (土) 曇後晴 1号掘立柱建物址平面図作成、1号住居址貼り床土層図作成。
- 12月 2日 (日) 晴 3号住居址土層図作成、B区河川址トレンチを入れる。
- 12月 3日 (月) 晴 3号住居址精査、小豎穴写真撮影
- 12月 4日 (火) 晴 製鉄関係址写真撮影、E区河川址検出。
- 12月 5日 (水) 晴 D₂区検出作業、E区2号小豎穴完掘写真撮影。
- 12月 6日 (木) 曇 E区製鉄関係址平面図作成。
- 12月 7日 (金) 曇後晴 E区全体写真撮影。
- 12月 8日 (土) 晴 4・5・6号住居址掘り下げ、6号住居址集石写真撮影。
- 12月 9日 (日) 晴 E区東端にトレンチを入れる。
- 12月10日 (月) 晴 7号住居址掘り下げ。
- 12月11日 (火) 曇後雨 午前10時雨のため作業中止。
- 12月12日 (水) 曇後雨 7号住居址掘り下げ。
- 12月13日 (木) 晴 7号住居址土層図・遺物出土状態図作成。
- 12月14日 (金) 曇 6号住居址集石平面図作成。
- 12月15日 (土) 曙 6号住居址土層図作成、7号住居址遺物取り上げ、E区北河川址掘り下げ。
- 12月16日 (日) 曙 4号住居址平面図作成。
- 12月17日 (月) 晴 4号住居址写真撮影。
- 12月18日 (火) 曙後晴 6号住居址遺物出土状態図作成、午前10時より雨、土器洗浄。
- 12月19日 (水) 晴 6号住居址遺物とりあげ。5号住居址掘り下げ。
- 12月20日 (木) 晴 6号住居址pit掘り。5号住居址掘り下げ。
- 12月21日 (金) 晴 4号住居址カマド写真撮影、6号住居址遺物出土状態図作成、5号住居址掘り下げ。
- 12月22日 (土) 曙 8号住居址掘り下げ、4号土壇掘り下げ。
- 12月23日 (日) 曙 4号住居址土層図作成、5号住居址遺物出土状態図及び写真撮影。
- 12月24日 (月) 曙 5号住居址平面図作成、4号住居址土層注記、3号土壇写真撮影。
- 12月25日 (火) 曙 6号住居址カマド写真撮影・平面図。
- 12月26日 (水) 晴 5号住居址ピット半剖・土層図作成。
- 12月27日 (木) 晴 E区全体写真撮影、8号住居址土層図作成。

- 12月28日 (金) 雪後曇 5号住居址写真撮影、5号土壤土層・平面図作成・写真撮影。
- 12月29日 (土) 雪後曇 5号住居址平面図作成、8号住居址遺物出土状態写真撮影。
- 12月30日 (日) 曙 9号住居址掘り下げ・平面図・土層図作成、D区全体写真撮影、7号住居址平面図作成。
- 12月31日 (月) 曙 休み。
- 1月1日 (火) 休み。
- 1月2日 (水) 休み。
- 1月3日 (木) 休み。
- 1月4日 (金) 雪後曇 9号住居址写真撮影。
- 1月5日 (土) 晴 5号住居址カマド土層図作成、7・8号住居址ピット土層図作成。
- 1月6日 (日) 晴後曇 4号住居址カマド図作成、7号住居址平面図作成。
- 1月7日 (月) 晴 7号住居址写真撮影、8号住居址カマド半剖。
- 1月8日 (火) 晴 7号住居址カマド図・貼り床土層図作成、8号住居址写真撮影。
- 1月9日 (水) 晴 8号住居址カマド図作成。
- 1月10日 (木) 曙後晴 E区全体図作成、4・5・8号住居址貼り床土層図作成、E区北河川址土層図作成。
- 1月11日 (金) 曙後晴 A・B・C・D区土層柱状図作成。
- 1月12日 (土) 曙 E区土層柱状図作成。

2次調査日誌

- 7月23日 (火) 晴 器材準備、搬入。試掘を行う。
- 7月24日 (水) 晴 試掘坑北壁土層柱状図作成。グリット杭打ち。
- 7月25日 (木) 晴 教育長あいさつ。発掘開始。F-2区検出作業。
- 7月26日 (金) 晴 F-2区検出。ピット3個検出。
- 7月27日 (土) 晴 F-1区重機により擾乱層(上層)を排除。F-1区検出作業。10号住居址検出。

- 7月28日 (日) 晴 F-1区検出。11号住居址検出。F-2区河川址掘り下げ。
- 7月29日 (月) 晴 F-1区東側に南北のサブトレを入れる。河川址実測。
- 7月30日 (火) 晴 1~3号ピット半割。10・11号住居址掘り始める。河川址下層より12号住居址検出。
- 7月31日 (水) 晴 12号住居址を掘り始める。(10・11号住居址ストップ) 1・2号ピットセクション実測。
- 8月1日 (木) 晴 12号住居址・2号ピットセクション実測。
- 8月2日 (金) 晴 1~3号ピット掘りあがり。
- 8月3日 (土) 休み。
- 8月4日 (日) 休み。
- 8月5日 (月) 休み。
- 8月6日 (火) 晴 10・11号住居址掘り下げ。10号住居址南北セクション実測。
- 8月7日 (水) 晴 11号住居址セクション実測。
- 8月8日 (木) 晴 12号住居址完掘写真撮影。F-2区全体写真撮影(西側から)。
- 8月9日 (金) 晴 F-2区全体測量。
- 8月10日 (土) 晴 F-2区全体写真撮影(東側から)。F-2区下層の遺構確認のためグリット設定、掘り下げ。
- 8月11日 (日) 晴 10号住居址、カマドセクション、プラン実測。
- 8月12日 (月) 晴 土器洗い、土器注記、図面整理。
- 8月13日 (火) 晴 10号住居址セクション実測。11号住居址、プラン実測。カマドプラン実測。
- 8月14日 (水) 晴 F-1区全体写真(東側)。10・11号住居址完掘写真撮影。F-1区全体測量。
F-1区下層遺構確認のためグリット設定、掘り下げ。
- 8月15日 (木) 晴 グリット掘り検出の1・2・3号下層ピットセクション、プラン実測。
- 8月16日 (金) 晴 3号下層ピット、プラン。1号下層土壤セクション、プラン実測。
- 8月17日 (土) 晴 F-1・F-2区中央北壁土層柱状図作成。
- 8月18日 (日) 晴 整理作業。
- 8月19日 (月) 休み。
- 8月20日 (火) 晴 整理作業。
- 8月21日 (水) 晴 整理作業。
- 8月22日 (木) 休み。
- 8月23日 (金) 晴 整理作業。
- 8月24日 (土) 晴 整理作業。

第II章 立地と環境

第1節 自然環境

本遺跡は、いわゆるフォッサマグナの西縁部の糸魚川～静岡構造線によってつくられた飛驒山脈の断層崖を、ほぼ西から東へ松本盆地に流下する鳥川によってつくられた広大な扇状地の最扇端付近にある。この鳥川扇状地は、扇頂付近で複雑な3つの異なる扇頂を持っており、最上部は大助小屋の近く、海拔900m付近にある。扇端は側方（南から北へ）から梓川水系による直撃を受けて複雑に入り組んでおり、下掘付近から細萱宮西までは侵食されて段丘崖となっており、それから先はやや不明瞭ながら等々力の巾下付近まで伸びている。

従って、その線より低地の本遺跡付近は、梓川水系による側侵や堆積の洗礼を受けている。鳥川扇状地の段丘面は一部不明な点もあるが、一応、離山面、岩原面、現河床面に分けられ、現河床面以外は、いわゆるロームを被っている。

本遺跡と直接関係のある現河床面の扇頂は、鳥川橋付近（海拔640m）にあり、流路は南から北へ時代と共に首を振り現在に至っている。現扇状地面を流れる河川は、隆起して段丘でも生じない限り流路は首を振り一定せず田畠、人家を直撃することはままあり、歴史的にも、また本遺跡からも証明される。

発掘地点はこの扇状地の末端で東西約500m、西は海拔539mで東は海拔531mと西に高く東に低くなっている。

（森 義直）

第2節 歴史的環境

矢原地籍は穂高町の南東端に位置する。

「矢原」は、平安時代の倭名類聚鈔（931～937）によれば、安曇郡（現南北安曇郡）には、「高家^{太木}・八原^{良八}・前科・村上^{兼義}」の4郷があったことが知られている。八原郷は今の矢原であり、平安時代後期に成立した矢原御厨（皇太神宮領・庄）であろうと推測されている。矢原に関する古記録には、兼伴郷記（1119）・兵範記の太政官符（1157）・吾妻鏡（1186）・後醍醐天皇から伊勢大神宮祭主藤原隆実に下した給旨（1322～1326）・神鳳鈔（1193）等があり、神鳳鈔には、「内千九十九一町矢原御厨」と記され、その広大さを示している。

この矢原の地は、古代安曇郡の郡庁所在地に推定されている。県道（発掘地）の南方には来光寺・寺尾・中在家（地）・念佛堂等の地名が点在し、又、この遺跡を挟んで北に神明宮矢原神社南に来光寺の地字が存在する。

矢原地籍からは、以前より土器の出土が知られており、地籍の中心に所在する矢原神明宮の周辺からは、数多くの縄文式土器、打製石斧、弥生式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器等が発見されている。神明宮南の宮地遺跡・南西の五輪塚遺跡では第2次世界大戦前の昭和15年12月から16年1月にかけて発掘が行われている。

宮地遺跡からは、2基の竪穴式住居址と土師器・須恵器が出土しており、五輪塚遺跡からは平安後期の住居址・土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄鎌・繩文式土器・打製石斧・黒曜石が出土しており、その遺物は僅かであるが、矢原神明宮に保管されている。又、神明宮の南面する道路の拡張工事で今回の発掘区の南40m位の場所から平安時代の住居址が確認されている。これらの遺跡及び包蔵地は20ヶ所近くにもものぼり、非常に接近している。離山遺跡の報告ではこれらを矢原遺跡と総称している。1次調査中、柏矢町駅の北300m位の大糸線西側の住宅地の水道工事中、平安時代の土師器が多数出土し、住居址内を掘り込んだものと思われる。この地点も矢原遺跡群の範囲に入るものと思われる。

北の白金地籍より新屋にかけて土師器・須恵器が発見されており、等々力地籍より本郷地籍にかけて縄文～歴史時代の遺跡が出土している。以上は、鳥川扇状地の扇端部付近で、耕土の厚い地帯に分布しており、鳥川からの自然流の流れに沿って分布していると思われる。

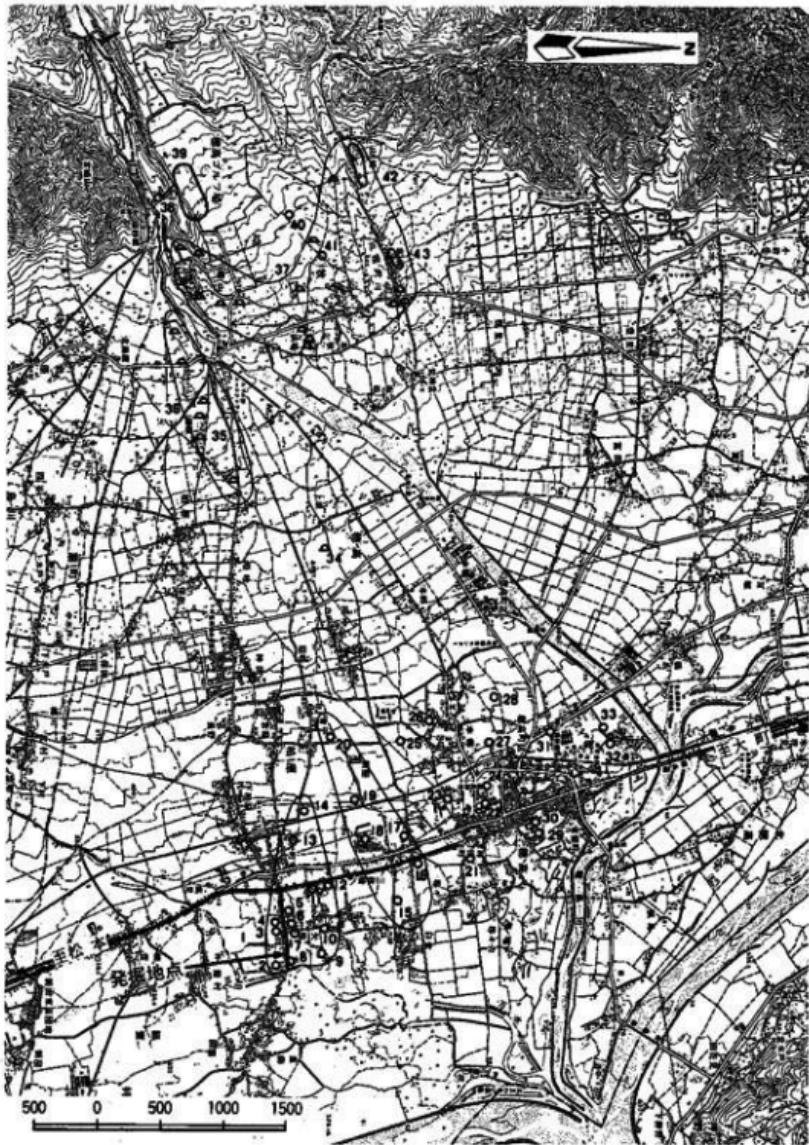
西方の山麓付近には、牧・塙原・上原地区には古墳群が分布し、「猪鹿の牧」の存在も知られている。又、離山北側には縄文時代中期から晩期にかけての離山遺跡が存在している。

(寺島 俊郎)

遺跡地名表

表1

番号	西文	生古	地	項	種	史	發	地	名
1	○	○	○	○	矢原	道	跡		
2			○		おふて	道	跡		
3			○	○	(住居址確認地)				
4			○	○	(包	藏	地)		
5			○		五輪塚	道	跡		
6			○		吉	地	道	跡	
7			○		四反田	道	跡		
8	○		○		馬場	街道	道	跡	
9	○				正	鳥	道	跡	
10	○				梅	池	道	跡	
11			○		三枚	橋	道	跡	
12			○		矢原	地	現	地	
13			○		(包	藏	地)		
14	○		○		(包	藏	地)		
15		?	?	○	(包	藏	地)		
16		○			藤	原	道	跡	
17		?	?	○	(包	藏	地)		
18		○			道	原	道	跡	
19		○			長者	池	道	跡	
20			○		大	芦	沢	道	跡
21			○		北	才	の	神	道
22					○				相高神社大門道跡
23					○				相高高校北道跡
24	○				○				宮崎道跡
25	○				○				南原道跡
26					○				東園寺道跡
27					○				神の木道跡
28					○				一本松道跡
29					○	○			巾下道跡
30	○	○	○						市上道跡
31					○				辻道跡
32					○				貝海道下道跡
33					○				貝海道上道跡
34					○				上原古墳
35					○				塙原下古墳群
36					○				塙原道跡
37					○				牧E古墳群
38					○				第1発見所(包藏地)
39	○	○	○						離山道跡
40	○								十三星敷道跡
41	○								(包藏地)
42	○								牧山道跡
43	○								草木道跡



第1図 穂高町南部遺跡分布図

第3節 基本層序

地層の垂直分布：数mより下は梓川水系の堆積物である硬砂岩、粘板岩、チャート、花崗岩、それに安山岩などからなる厚い砂礫層であることは、上水道のボーリングやその他からわかつており、その上を烏川による扇状地堆積物が所により厚さを異にするが、既に3~4mの厚さで載っている。礫の岩質は、硬砂岩が主で粘板岩、花崗岩、チャートがこれに次ぎ、極少量接触変成岩もみられる。

土層柱状図は別図の通りであるが、この中で特に注意すべきは黒紫色のバンドであり、有機物を多量に含み粘性の強いローム質のものである。このバンドはこの付近では重要な鍵層と考えられ、白金から等々力方面にまで分布しているとみられる。

発掘地点東端（A地区）では-66cm~79cmの深さで黒紫色であるが、西500mの国道近く（E地区の北西30m付近）では-63cm~76cmと-128cm~144cmの2層に分離し、色は栗色を帯びる。これらの有機物の多い粘性の堆積物は、一時期、地下水位が高く、湿地またはこれに順ずる状態であったことを示しているが、決して安定していたのではなく、バンド中途に洪水堆積物や河川堆積物を挟み、しばしば分離している。この黒紫色バンドをつくった湿地の消滅は、発掘地点のすぐ東を南から北に流れる万水川の侵食が進み、扇端の海拔530mとその下のワサビ畑の海拔525m面との間に、はっきりとした段差を生じた結果水位が下がり消滅したと推定される。

この扇端付近の堆積物は大別して3通りあり、

- ①緩流によりよくふるい分けられた、ローム質を含む細粒の堆積物で粘土質、シルト質等である。
- ②烏川の支流が緩傾斜のため蛇行して堆積したふるい分けの良い砂、礫。

礫質は堆積時期により異なるが、既に硬砂岩50%、粘板岩20%、花崗岩15~20%、チャート10%、その他となつておらず、時期によっては硬砂岩が90%に達することもある。

- ③洪水により押し出されてきたふるい分けの極めて悪い、人塊状に分布する礫土質。

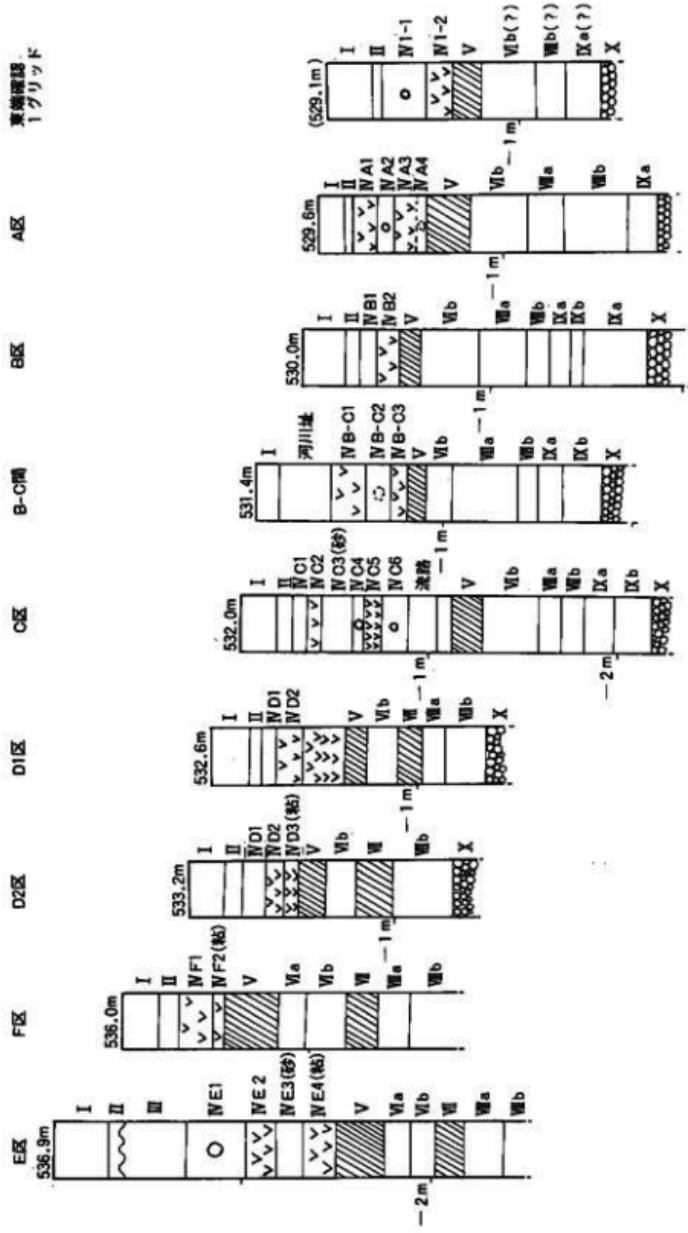
これ等①~③が幾重にも互層となって堆積している。

遺構・遺物の垂直分布は、黒紫色バンドが1層の所はその直上の土層から、また、バンドが分離している場合は下のバンド直上の土層から上に限られている。

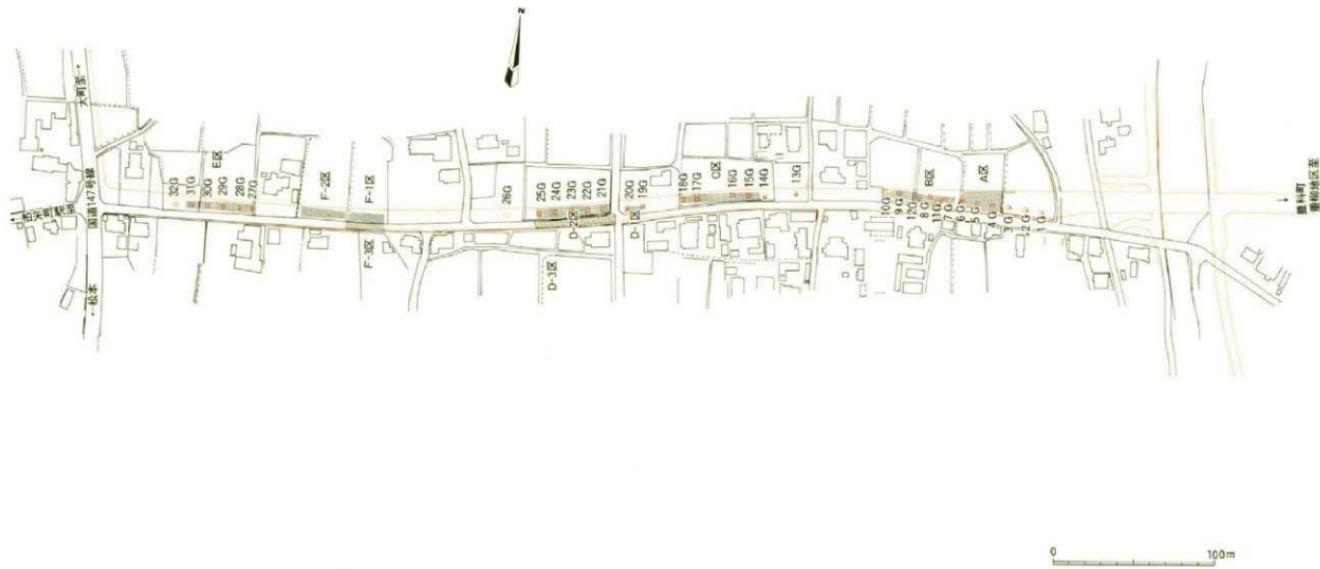
尚、この黒紫色バンドの時期は、断定できないが、弥生直前に始まり、平安頃まで間欠的に続いたものと推定される。

註) 遺跡付近を覆う上部堆積物は梓川水系と同じ古生層とそれに貫入した花崗岩であり、似ているが、礫の形状、堆積方向(流路の方向)、安山岩の有無等により烏川水系の堆積物と断定してた。しかし、一部2次的に梓川水系の堆積物の混入も当然あり得る。

(森 義直)



第2回 基本土層因



第3図 調査範囲



第三章 調査概要

第1節 発掘調査概要

発掘調査は県道柏矢町～田沢停線の拡幅工事に伴うものでありその対象地は県道北側の拡幅分全長約800mに及ぶ。又、地形上では扇状地の傾斜方向を斜めに横ぎるものであり、西端と東端で標高差約6mを測る。一次調査開始時、この対象地内には未買収地・生活道路・水路が含まれていた。そこで一次調査の結果を受けて調査の必要が認められ、調査可能部分は二次調査とした。

一次調査に入るにあたり、まず、土層と遺構分布の把握を主眼としてグリッド掘りを行うことにした。このグリッド掘りは細長い調査地の様子を短期間に把握する為にとった方法であり、調査可能地に東より約10m間隔で2×2の規模のものを31箇所設定した。掘り下げでは、遺構の検出されぬ一部のグリッドを疊層まで抜いた。

グリッド掘りの結果、調査対象地東端近くの4グリッド(以下Gと略す)、矢原神社参道脇の22G、対象地西端近くの27Gで遺構が確認された。さらに、この結果と現地形を考え合せ、4G以西を掘り広げ精査する必要があると判断した。

一次調査では、この面的調査を行うに際し、水路・道等で分断された面的調査地を東よりA・B・C・D-1・D-2・E区と呼称し、各区毎に重機による表土はぎを行ってから面的調査を行っていった。以上の面的調査を行った実質面積は約1000m²余りである。

二次調査に於いて、面的調査を行った実質面積は約397m²である。調査地は1次調査段階で未買収であった場所でE区の東約30mの部分にあたる。一次の結果E区内で検出された遺構が東へ広がる可能性をもっていたため、土層確認後、重機により確認面まで下げる調査を行った。この調査地は1次の總統と考え、F区としたが、中央には水田耕作用の堰からの引き込み水路が南北に通つており、その東側をF-1区、西側をF-2と呼称した。

一・二次調査の結果、A・D-2・E・F区より住居址12軒、土塙14基・小竪穴1基、製鉄関係遺構1、据立柱建物1棟が検出された。

調査では、調査地が細長い内に河川址が數本流れ土層を複雑にしておりで、遺構検出が難しかった。

第2節 各区概要

第1項 A区概要(第4図)

グリッド掘りによる確認調査では、本区内4GのV層上面で遺構が検出された。この結果を受

けてV層上面まで重機による廃土を行うことにした。しかし、作業中、本区中央付近のIV A層中で炭化物集中が認められたので、本区東半分は重機による廃土をIV A層中に止めた。

そして、この東半分部分は人力により検出面のV層上面まで下げた。この結果、IV A層中で炭化物集中・土器集中、V層上面で1・2号住居址が検出された。

さらに本区のV層以下に遺構があるのか確認する為、本区北壁際にトレンチ・中央にグリッドを設定し、礫層まで掘り抜いたが遺構、遺物は検出されなかった。

第2項 B区概要（第4図）

本区での確認調査では11Gで河川址、9Gで土師破片、10G地表下2mで土器小片を検出した。この確認調査で、本区内に遺構の存在は確認されなかった。しかし、東隣りのA区では遺構が検出されているので、一応重機によりA区遺構検出面と同じV層まで重機による廃土を行って検出作業をした。この検出作業では河川址2本が検出されただけであった。

その後、10G地表下2mで土器小片が出土していたので、その脇を掘り広げ、V層以下に遺構があるのか確認を試みた。しかし、遺構は検出されなかった。

第3項 C区概要

本区の確認調査では遺構に当らなかった。しかし、確認の意味で重機による削平を行い、検出作業をしてみることにした。本区での重機廃土はB区同様の層まで行うことにしたが、B区検出面であるV層と類似する層はV層とVII層の2枚確認されていた。本区はB区とやや距離があり、その中間地点の土層確認が遅れた為、V層と対応する層がわからなかった。そこで、上のV層に合せて検出作業を行うことにし、それより下はトレンチを設定して確認することにした。その結果、河川址のみが検出され、さらにV層以下にも遺構は検出されなかった。

第4項 D区概要

本区は矢原神社前にあたり、参道によって2つに分かれている。そのうち、東側をD-1、西側をD-2区と呼称した。この両区の確認調査では、D-1区に遺構は確認されず、D-2区で遺構の存在の可能性が確認された。D-2区の確認調査で検出されたのは、後に2号土壙としたものである。しかし、この時点では遺構のプラン、検出面など、遺構埋土と地山土層が似ている為によくわからず、2号土壙の遺物のみが遺構存在の可能性を示していた。そこで現耕土を重機で廃土して、検出作業を繰り返して面的検討を行うことにした。

先に述べたように遺構埋土と地山土層が類似している為、この検出作業に手をどったが、結果として住居址5軒、土壙6基が判明した。

その後、遺構の検出されぬD-1区とD-2区の東部・西部に深掘りのトレンチを設定した。その結果、D-2区を境に最下部の礫層は急激に傾斜してゆくことが認められ、D-2区東端

の現矢原神社参道が地形の変換点であると判断された。又、D-2区西端は戦後の客土用土の搬出で、遺構構築された土層が全く残存していないことがわかった。この客土用土の搬出の際に、多数の土器が出土したことが知られており、D-2区西部にも本来遺構があったと推定される。

第5項 E区概要

本区の確認調査では、27GのIV E2層で製鉄関係遺構の存在が確認され、これより上層では遺構の存在が確認されなかった。そこでIV E1層上面まで重機で掘り下げ遺構検出にかかった。この検出作業ではファイゴ破片・鉄滓等の製鉄関係遺物の集中が認められながらも遺構本体はわからず、遺物をとりあげながら検出作業を繰り返していった。一方、この遺物集中が著しいE区東部を除き、大部分はIV E3・4層まで下げた。この時、E区南河川址を合せて掘り下げた。この作業で獨立柱建物址、見のがしである3号住居址、6号土壙、北河川址、小堅穴を検出した。製鉄関係遺構の精査終了後、全体をIV E4層面まで下げ7号住居址を検出した。

IV E4層以下の遺物、遺構確認の為、本区東端にトレンチを入れた。このトレンチではVI a～VI b層間で弥生式土器片が出土した。しかし、調査上の安全などの制約で下層の調査は行なわなかつた。

第6項 F区概要

当調査区は2次によるもので、1次調査のE区の東側に位置する。又、この地区より北方50mには昭和10年代に故一志茂樹博士によって調査された五輪畠遺跡が所在している。当調査区は、2枚の水田で、西の水田の西半分は多量の客土として搬出されており、当時、西部分からは土器が出土したようである。又、調査以前、調査範囲内の水田耕土のみということで搬出が行なわれたが、この際、それ以上の客土が行なわれ、包含層の一部が取り除かれていた。

調査は、第1次の結果から検出が困難であったため、重機による表土はぎを行ない。堆積土層中、2面の暗褐色土層があり、その上面で遺構検出を行なった。検出遺構は、堅穴式住居3軒、土壙3基であった。又、下層の遺構確認のため、 2×2 mのグリットを10ヶ所設定した。その結果、住居址は検出されず、4基のPit状の土壙が検出された。

第IV章 遺構と遺物

今回の調査区は東西に長く、矢原遺跡群に入れたトレント様になっている。そのなかで調査された遺構は検出面と分布、遺構内遺物の検討より5群に大別されると考えられた。しかし、この大別には問題が多く、今後の調査によっては変更の余地を残している。ここでは、今回の調査で把握された事のみを扱うものとして、以下に年代の古いと思われるものから順に示す。

I群 F区暗黄（灰）褐色土層（VIIa層）上面検出の土壙。

II群 F区第2暗褐色土層（VII層）上面検出の土壙。

III群 A区の暗褐色土層（V層）上面～灰褐色土層（IV層）中で検出された古墳時代中期初頭の遺構群。

IV群 D-2区以西の灰褐色土層（IV層）中で検出された古墳時代から奈良・平安時代の遺構群。

V群 E区の灰褐色土層（IV E3層）上面で検出された鎌倉時代以降の遺構群である。

これらの群は調査で把握された遺構を検出面と分布で大別したものと遺構内遺物の検討を加えて羅列したものである。今回の調査では居住の場を中心とする遺構を中心と扱い、生産域を含めた広い土地利用として把握してはいない。又、上記大別にあたり、検出面を基準としている事や各調査区間での土層の比定にやや断定しきれぬものがあったり、分布ではI・II・V群が明確にできなかった等の問題がある。

以上、今回の調査での遺構群の大別とその問題点を簡単に述べたが、次に各遺構について以上の大別に従って順に記す。そして最後に時期不明の遺構・河川址について述べる。（遺構内遺物の所属時期の年代観は従来のものに従った。）

I群 12号土壙 （第37図）

下層遺構確認のグリッド掘りの際に、第2黒紫色土下層の暗（灰）褐色土層（粘土）（VIIa層）上面で掘り込まれている遺構が検出された。長さ約1.2m、幅64cm、深さ28cmで、ややくねった形状をしている。（覆土は、第2黒紫色土が入っていた。）グリッド掘りの際、他のグリッドの第2黒紫色土層下方中から縄文式土器片が出土していることより、当遺構は縄文時代と思われる。

（寺島 俊郎）

13・14号土壙 （第37図）

F区下層遺構確認のグリッド掘りの際検出されたもので、掘り込み面は12号土壙と同じである。規模は、13号土壙で長径52cm、短径40cm、深さ22cmを測り、14号土壙は検出が下場近くであったため大きさは不明であるが、同じ面からの掘り込みと考えると直径30cm位、深さ20cm位と思わ

れる。覆土は第2黒紫色土層の土が入っていた。13・14号土壤の時期は12号土壤と同じと思われる。

(寺島 俊郎)

II群 11号土壤 (第37図)

平安期の発掘終了後、下層の遺構確認のためグリッド掘りを行なった際に検出され、第2黒紫色土層上面(VII層)で掘り込まれているピット状の遺構で、規模は、径25cm、深さ35cm前後である。第1次調査の際、E区東端のトレンチの第2黒紫色土上の土層より弥生式土器が出土しており、当土壤は弥生時代頃と思われる。

(寺島 俊郎)

III群 1号住居址 (第7図、図版3)

本址は調査A区南東端V層上で検出されたが、A区の2号住居址にも、炭化物集中、土器集中があり、これらがIV層中に見られることから同様にA-V層中から掘り込まれていたものと考えられる。プランは東西4.3m、南北4.1mの規模で隅丸方形を呈する。長軸方形はN-629'-Wを指す。

埋土は、3分層され自然堆積を示す。また埋土中には炭化材、炭化物が多量に見られ、炭化材は中央に向けて遺存していた。このことから本址は火災にあった焼失住居と判断される。

壁はほぼ垂直にV-VIb層まで掘り込まれている。壁高は25~30cmを測る。床面は、VIb層まで掘り込み、凹凸のある掘り方を貼床しており、平坦で茶褐色を呈し、さほど堅くない。貼床の最大厚は12cmを測る。床面にはP₁~P₁₆までの計16ヶピットが検出された。16ヶ中、P₁₄は北壁の張り出しピットである。柱穴は、P₁~P₆の8ヶで、2ヶづつが対となり方形を配している、外側と内側が主柱穴と補助柱穴の関係なのか、それぞれが主柱穴であり内側から外側への住居建て直し及び拡張であるのかは不明である。外側に方形に並ぶP₁~P₄は径34~40cm、深さ7~10cm、内側に方形に並ぶP₅~P₈は径9cm、深さ20~30cmを測り、外側のピットは内側のピットより規模は大きいが、深さは浅いものである。P₁₀~P₁₃・P₁₅は位置から見て貯蔵穴的なピットであろう。P₁₄・P₁₆は、何のためのものはっきりとしないが、本址には炉が検出されず、柱穴間に位置することから推測して、焼土は認められなかったが炉に関係する施設であったとも考えられる。ピットの他としては北西隅、張り出しピット部分を除き幅6~18cm、深さ2~8cmの周溝が検出された。

炉は検出されなかった。

遺物は、数少なく、土師器壺・甕のみで、他に鐵鎌と思われる鐵器が出土した。遺物の量が少なかったことは、火災の際に物を持ち出したか、または住居を廃絶後故意に火を放ったものと考えられる。

本址は、遺物から見て、大町市借馬遺跡第III期(5世紀前半)と対比できることから古墳時代中期初頭と考えられる。

(島田 哲男)

2号住居址（第9図、図版4）

本址は調査A区北側東端、A-VI層上で検出された。1号住居址同様、本址もA-V層中から掘り込まれていたものと考えられる。本調査で調査できたのは、全体の3分の1で北側3分の2は調査区外に延びている。全体プランは不明であるが、東西5.7mを測り、1号住居址と同様な隅丸方形を呈すと推定される。

埋土は2分層され自然堆積を示す。

壁はほぼ垂直にA-VI-VIII層まで掘り込まれている。壁高は20cmを測る。床面はA-VII-VIII層まで掘り込み、凹凸のある掘り方を貼床し平坦となっているが、全体に軟弱である。貼床の最大厚は10cmを測る。床面からはP₁～P₆まで6ヶのピットが検出された。P₂～P₆の4ヶは柱穴で、全体を予想して見ると1号住居址と同様の配置であったと考えられる。P₁は、約半分検出できたのみであるが、内部から土器・磁石などが出土しており、大きさ、深さから貯蔵穴と考えられる。P₆は不定形な三角形で浅く性格は不明である。

遺物は、土器では、土師器小形壺、壺、甕が出土した。他に磁石、刀子か鉄鏃と思われる鉄器が出土している。

本址は、遺物から見て、大町市信馬遺跡第III期（5世紀前半）と対比できることから古墳時代中期初頭と考えられる

（島田 哲男）

土器集中（第4図）

本址は、A区中央東端、1号、2号住居址の中間地点のA-V層内で検出された。土器は1個体となるもので、1×2mの範囲に散在した。この土器集中は人為的であるか明確にはし得なかつた。

土器の時器は、1・2号住居址と同様の古墳時代中期初頭と考えられる。（島田 哲男）

炭化物集中（第4図）

本址は、A区中央やや北寄り、A-V層内で検出された。炭化物は細かいものが、3×2mの範囲に集中し、その中央に、土器小片がまとまって出土したが、土器は接合できなかった。

本址の時期は、層位、土器から見て古墳時代中期初頭と考えられる。

（島田 哲男）

IV群 6号住居址（第11図、図版4）

本址は調査D-2区、D-IV層中で検出された住居址である。D-2区中央やや西よりに位置し、本址の北・南壁は調査区外へ延びている。本址の切り合い関係は西壁を4号土壇に切られる。

本址の平面プラン・規模に関しては調査部分が限られているので仔細を欠くか、調査部分で東西長約6.4mを測り、おそらく南北長も同様の規模で、平面プランは方形か隅丸方形を呈すと思われる。主軸方向はおよそ真東を指向する。

D-2区の旧地形は緩やかに東へ傾斜していたと思われるが、開田の際の削平で本址も上部が削られている。その為、本址埋土の堆積状況は明らかでなく、遺存部分で確認されたのはやや砂

質の暗褐色土の単層である。

壁はほぼ垂直にIV D3層からV層まで掘り込まれる。床はこのIV D3層とV層の土が混在する土で住居掘り方を貼り床したものである。そして、二次的に中央部を中心として白色粘土質土を使って貼り床している。いづれもカマド前～中央が堅い。ビットは計10ヶ検出した。形状・位置よりP₄は貯藏穴、その他は柱穴と考えられる。柱穴と考えられるビットの内、P₂・P₃・P₇・P₉は方形に配置され、主柱穴と考えられる。その他は不規則な配置で具体的性格をつかむにいたらなかった。

カマドは東壁中央部に位置し、その構造は造り出しかマドである。カマドの遺存状況は地山から削り出された袖基部と袖石と考えられる石が残る。尚、本カマド上部で掌大の礫が多数、集中して検出された。この集石は住居廃絶直後のものと思われるが、その性格は不明である。又、カマド内より骨片が少量出土した。

本址の出土遺物は土器類を主体とし、完形・略完形のものがカマド付近に集中して出土した。

これらは、カマド脇に逆位で出土した長胴甕の様に住居廃絶時にそのままにされたと考えられるものも多い、又、手捏土器が本址中央部南よりで4点、西壁際で逆位のものが1点出土している。この他、形状、大きさの類似する掌大の石が床直上～埋土中に散在して十数点出土したがカマド部集石との関係もあり、積極的にいわゆる網物用石鉢とも考えられず、本報告ではとりあげなかつた。

(市川 隆之)

7号住居址 (第15図、図版4)

本址はE区東端において検出された住居址である。南西部分は南河川に、北壁全部は床直上付近まで北河川址によって削り取られている。

規模は、東西5.3m、南北4.8m(推定)で隅丸方形を呈している。主軸方向はN-78°-Eを指向する。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、最深55cmである。床面は全体に平坦である。茶褐色を呈し、北側は、北河川址の影響と思われるが、鉄の集積がみられ、黄褐色を呈していた。硬化部は、中央を中心に、壁ぎわにみられるビットの内側部分及びカマドの正面に顕著にみられた。

カマドは、東壁中央の北寄りに設けられ、保存状態は良好であったが、天井は残っていないかった。規模は、全長160cm、間口幅54cm、煙道中央幅36cm、煙道口幅27cmと、全体に寸胴で、燃焼部も4cmと浅くフラットで、煙道はゆるやかに傾斜して最奥で垂直に近い状態で立ち上がる。燃焼部及び煙道の床はほとんど焼けてはおらず、壁面は赤褐色を呈していた。袖は、土のみで作られており、芯の部分を暗褐色土で造り、その周囲に粘性の強い暗黄褐色土で造られている。焚き口には、厚さの類似し長さの異なる3個の焼けた石がみられ、焚き口に向って開いている燃焼部の大きさからして、燃焼部の天井に使用された石と思われる。又、煙道部には、15個の比較的大きさの似かよった石が床に近い部分から少し浮いた状態で出土し、火を受けた形跡はみられなかつた。

ビットは、7個検出され、柱穴と思われるものは、コーナに位置するP₁、P₃と思われるが柱痕

は確認できなかった。 P_7 は、 P_3 に付属するものと考えられる。 P_8 は、カマドの右脇に位置することから貯蔵穴と思われる。その他3個は性格不明である。 P_1 、 P_4 は P_1 、 P_3 と同じ深さの掘り方をもつ。壁際には、周溝がめぐり、北東隅の西壁から東壁の P_6 の脇までみられた。

遺物は、土師器は甕1、無頸甕1、纺錘車1、こも石32個のみで、この他には土師器の小片が数片でたのみである。甕、無頸甕は南東部から出土し、甕は口を下にした状態で立ったまま出土し無頸甕は横になってつぶれた状態で出土した。こも石は、南西隅の西壁より、積まれたままの状態で出土した。石の大きさは、長さ7.4~12.0cm、幅4.7~7.6cm、重さ185~380gで平均すると長さ10.0cm、幅5.8cm、重さ283gであり、全体に細長い印象をあたえるものが多い。石質は7種類に分かれ、硬砂岩-17、頁岩-4、砂岩-3、ホルンフェルス-3、安山岩-1、礫岩-1、輝緑凝灰岩-1、テグマタイト-1であり、硬砂岩はその内53%を占める。（寺島俊郎）

本住居址は古墳時代末と考えられる。

8号住居址（第17図、図版5）

本址は調査D-2区東部に位置し、現矢原神社参道西脇から地山が大きく東へ傾斜する際に構築されている。本址の南東部は調査区外へ延びており、調査区内の切り合い関係は西壁を5号住居址、中央部を5号土壙に切られる。

本址の検出はIV D層中で行ったが当初プランがなかなかつかめなかった。そこで2号土壙東側に入れたグリットと5号住居址との関係で入った試掘トレンチの観察を元に、検出面を下げる作業の繰り返しとサブトレンチを入れることによって本址のプランを確認した。平面プランは調査部分より、やや隅の丸い方形を呈すと思われ、その規模は計測可能な東西で約4.9mを測る。主軸方向はN-71°-Wを指向する。

埋土は3層に分層され、主体は1層のやや暗味を帯びる灰褐色土と2層のやや細砂質の灰褐色土であり、レンズ状に堆積する。3層は炭化物、焼土粒を多く含む土で、本址北東部壁際で部分的に確認されたのみである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、IV D3層からV層中にまで達する。壁高は遺存状態の良好な西壁で約49cmを測る。床はD-V層を掘り込んだ後、貼り床したものであり、カマド前～中央部南よりが堅緻である。しかし、この貼り床は住居掘り方の低い部分を埋める程度で、全体的に薄く、所々下のV層中の礫が床面に露出している。

ピットは5個検出した。その内、柱穴と考えられるものは P_1 ～ P_4 であり、 P_5 は性格不明である。 P_1 、 P_3 、 P_4 は方形に配され、主柱穴と考えられる。 P_2 は P_3 に隣接し、形状、規模も P_3 に類似することから P_3 の補助的なものというより、掘り直しのものと考えたい。この他、カマド北側に浅い窓みが検出されたが、位置・形状より貯蔵穴に類似する性格のものと思われる。

カマドは西壁中央に位置し、その構造は造出しかマドである。左袖の前に袖石の痕跡と思われる小さな窓みが認められた。煙道は火床から緩やかにたちあがってゆくものと思われるが、5号住に破壊されている。

遺物は土師器・須恵器・鉄器がある。土器はカマド脇に多く集中し甕類は埋土中にもかなりみ

られた。カマド脇より出土した土器の内、北側の袖脇出土の壺は体部内側に放射状、底部にテセン状の暗文が施されている。この壺は畿内系のものと思われ、時期は飛鳥IVに比定されると考えられる。又、本址埋土中には須恵器長頸壺頸部が出土しているが、時期的に本址のものより新しく、他の遺構を見のがしている可能性もある。

(市川 隆之)

9号住居址 (第21図、図版5)

本址はD-2区中央東よりに位置し、西南隅部のみ調査区にかかった住居址である。当初、炭化物と土器片の検出より住居址の存在が予想されたが、プランを明確につかめず、IV D層を少しづつ削平し、又、試掘トレンチを入れて確認した。

切り合い関係は、本址南西隅を4号住居址に切られている。プラン、規模は仔細不明であるが、調査部分より、一辺4m以上の隅丸方形プランを呈すと推定された。

埋土は2層に分層され、上に灰褐色土、下にやや砂質の灰褐色土が入る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、南壁の確認できた所で約20cmを測る。床面は軟弱であるが、V層まで掘り込んで、V層の土のブロックを多く含む土で貼り床したものである。ピットは1個、柱穴と思われるものが調査区壁セクション上にかかって検出された。カマド本体は調査区外にあると思われる。

遺物は土師器甕破片、鉄滓、鐵器刀子が出土しており、本址の時期は古墳時代末の時期が考えられる。

(市川 隆之)

11号住居址 (第22図、図版5)

本址はF-I区の南西隅に、その一部を調査区外かかって検出された。

規模は、東西約3.3mで隅丸方形を呈していると思われる。壁は、ほぼ垂直に近い状態で掘り込まれており、壁高は最深46cmをはかる。床面は、壁付近では軟らかで、壁から30~60cm内側は茶褐色を呈して硬化している。全体に平坦である。一部砂利層を掘り込んでいるため、その部分には黄褐色の粘性の強い土が貼られている。カマドの前面には、灰・炭・焼土が1m位の範囲をもって広がり、踏みつけられて硬くしまっている。

カマドは、東壁のほぼ中央に構築され、石組カマドである。南側半分は攪乱によって完全に破壊されている。カマド石は袖のみならず、燃焼部の煙道に至る部分まで石が組まれている。袖に残されている土は、地山の土に非常によく似ていることから、住居址を掘り込んだ際に耕土を利用しているものと思われる。床面は10cm位掘り込まれている。

カマドの左脇には、直径40~70cmの浅いピットが2基検出され、住居址の覆土が入っており、炭・土師器片が出土した。南西の隅には、幅30cm・高さ15cmの方形で平坦な上面をもった石が床直上に出土した。工作台として使用されたものではないかと思われる。

遺物は、土師器、須恵器が中心で、器種は、土師器の壺・甕、内面の黒色の壺、須恵器の壺、四耳壺であった。土師甕には、この地方ではあまり使用されていない外面にへら削りを施した武藏型の甕が使用されている。四耳壺は、突帯及び耳の部分がわずかに出土したのみである。

時代は、平安時代後半と思われる。

5号住居址（第24図、図版6）

本住居址は、調査D-2区のはば中央東寄りに位置し、第4号住居址、第2号住居址に切られ、第8号住居址を切って構築されている。

規模は南北3.3m、東西3.16mである。検出の際、8号住居址との切り合いがはっきりせず、東壁を掘りとばしてしまった。推測すると東西も3.3m位になると思われる。主軸を、N-86°-Eに示す隅丸方形を呈している。壁は、ほぼ垂直に近い状態で掘り込まれており、壁高は、約30cm前後である。

床面は、茶褐色を呈し、全体に平坦で、柱穴の内側が硬化しており、壁に近くなるにしたがってその傾向は弱くなる。

カマドは、東壁中央のやや南寄りに設けられているが、ほぼ全焼で、燃焼部の火床のみが残っているにすぎなかった。カマドに使用されたと思われる石は、中央に散在していた。

柱穴は4本であり、柱痕は確認できなかった。貯蔵穴と思われるものには、カマドの北側と西側に1ヶづつ設けられている。

遺物は住居址全体から出土しており、今回の調査の中でも多い方である。種類は、土師器、須恵器、鉄器である。その器種としては、土師器の壺、碗、甕、内面黒色の碗、須恵器の壺、鉢で、その多くは、中央から、カマド石と共に散在していた。土師器の甕の中には、10号住居址と同じ様に武藏型の甕が使用されている。須恵器の壺においても、生焼けのものが多く、共存形態は、10号住居址とよく類似している。鉄器は刀子である。

以上から、本住居址は、平安時代後半と思われる。

（寺島俊郎）

12号住居址（第26図、6図版）

本址は、F-2区東側に位置し、東・北壁を調査区外にかかって検出され、第10号土壤を切って構築されている。住居址の規模・形態は、隅丸方形を呈すると推測されるのみである。壁はほぼ垂直に近い状態で掘り込まれており、壁高は、20cm前後である。床面は、壁から20cm位まで軟質で、隅においては80cm位まで同じである。中央に至っては、茶褐色を呈し、硬くしまっている。床下は、暗褐色の砂質ぎみな土を2~14cm入れて貼り床され、その内上方1~2cmが硬化している。

カマドは、調査範囲内では検出されず、調査区外にあるものと思われる。柱穴は検出されなかつた。

調査区の東壁側に、幅50×40cm、高さ20cmの大きな石が、床面直上から出土し、平坦な面が上を向き、工作台に使用されたものではないかと思われる。

遺物は、極くわずかで、小片のみであったため図示できなかった。種類は、灰釉陶器、土師器である。器種は、灰釉陶器では瓶類、土師器は壺であった。

時代は、平安時代後期と思われる。

（寺島俊郎）

10号住居址（第27図、図版6）

本址は、F-1区のはば中央南側から検出され、そのほとんどは調査区域外にかかっていた。規模は、東西約3.8mで隅丸方形を呈していると思われる。壁は、ほぼ垂直に近い状態で掘り込まれており、壁高は、55cm前後であり、深い。

カマドは北西隅にみられ、破壊されていたが、石組粘土と思われる石の抜き取り痕と焼け石がみられた。燃焼部は火床のみで、北西隔壁には、煙道部の一部が残り、火を受けて壁の部分が赤褐色を呈していた。又、カマドの右側部分の北側が、カマド構築の段階で外へ30cm位拡張されている。

床面は、壁付近では軟らかくカマド付近では硬くしまっており、表面は赤茶褐色を呈し、黄褐色の粘性の強い土が3~6cm位貼られている。柱穴は検出されなかった。

遺物は、土器のみで、あまり多くなく、土師器、須恵器であった。器種は、土師器の壺、甕、須恵器の壺である。特に土師器の壺は、胎土がやや緻密で、形は矮小化してきている。

時代は、平安時代末期と思われる。（寺島俊郎）

4号住居址（第28図、図版7）

本址は調査D-2区中央北側、IV D層中で、5号住居址・9号住居址を掘り込み検出された。北側約3分の1は調査区域外にあり、全形プランは検出されなかつたが、東西が4.6mであるので南北も同様の長さの規模をもつ隅丸方形を呈するものと思われる。

埋土は、2分層され自然堆積を示す。

壁はほぼ垂直にIV D~V層まで掘り込まれている。壁高は平均25cmを測る。床面は、V層上まで掘り込み、凹凸のある掘り方を貼床しており平坦となっている。貼床の最大厚は10cmである。床面上からは柱穴等の施設は検出されなかつた。

カマドは、西壁のはば中央に構築され、石組み粘土カマドである。カマド石は両袖石とも遺存するが天井石は見られなかつた。両袖石の下部及び立てられた石の基部には灰色粘土が遺存していた。規模は60×60cmである。カマド周辺にはカマド検出時にカマドを中心として1.8mに焼土及び炭が見られ、土壤と見まちがえるほどであった。

遺物は、土師器壺、甕、黑色土器壺、灰釉陶器壺、皿、短頸壺等が出土した。等にカマド右側からは、灰釉陶器短頸壺、皿、土師器甕、壺が集中して出土した。他に鉄滓が出土した。

本跡は灰釉陶器壺・皿が美濃窯式・丸石2号窯式の灰釉陶器と考えられることから平安時代後期と思われる。（島田哲男）

2号土壤（第35図）

本址はD-2区中央東側より、D-V層上で5、8号住居址を掘り込み検出された。確認調査グリット掘りの際南東部を削平してしまったが、長軸1.5m、短軸0.8mの長楕円形プランを呈する。

埋土は單一で、灰褐色である。

壁はほぼ垂直にIV D～V層まで掘り込まれ、深さ28cmを測り、底面はほぼ平坦である。

本跡の中央やや北側からは、須恵器長頸壺と灰釉陶器壺が小瓶にかぶる形で両側に並んで出土した。これら遺物は墓の副葬品と考えられ、長頸壺と壺・小瓶間に遺体があり、遺体の両側に土品が置かれたと考えられる。

本址は灰釉陶器が美濃窯式・大原2号窯式の灰釉陶器と考えられることから平安時代後期と考えられる。

(島田 哲男)

8・9・10号土壤 (第37図)

8・9・10号土壤はF区で検出された。その規模は8・9・10号土壤共に長径約65cm前後・短径約60cm前後を測り、深さは9・10号土壤が25cm前後、8号土壤が35cm位を測る。これらの土壤の形状はピット状を呈している。9・10号土壤は覆土・掘り方が共に類似しており、8号土壤は若干掘り方が異なるものの、他とあまり時間差がないものと思われる。

10号土壤は東壁が12号住居址に切られている。遺物は見られなかったが、平安時代後期と思われる。

(寺島 傑郎)

1号掘立柱建物址 (第30図、図版7)

本址は調査E区中央部に位置し、E区南河川址に切られる。本址の検出面は少なくともIV E4層にもとめられるが、上部に南河川址埋土及び、河川址の影響を受けた土層が載る為、本来の構築面は明らかではない。又、北河川址との切り合い関係もつかめなかった。

調査区内で判明した本址の規模は桁行4間約9.2m、梁行1間約1.9mである。梁行はまだ調査区外へ延びている可能性がある。主軸方向はN-84°-Wを指向する。柱間寸法は柱底及び、柱穴底部に柱跡の残るものより桁行では、P₉-P₁₀間約2.5m、柱底の残るP₁-P₂間の等分よりP₁-P₂、P₂-P₃間それぞれ推定約2.3mとなる。梁行ではP₁-P₁₀間約1.9mを測る。本址桁行ではP₉-P₁₀が長く、又、桁行柱間寸法に比して梁行柱間寸法は短い。

柱穴掘方の平面形はほぼ円形を呈し、その掘り込みはV層まで達する。柱穴の直径は北側桁行のものに比して南側のものがひとまわり小さい。南河川址に切られる為とも考えられるが、河川址本流から離れているP₂も小さいことにより、何らかの建物構造上の差であるとも考えられた。

尚、P₁₀西側とP₁南側に本址中穴埋土と類似する埋土のピットを検出したが、本址との関係を明確につかめなかった。

本址の時期は遺物が無いので仔細は不明だが、土層より7号住居址の時期以降、南河川址の時期以前とおさえられ、ほぼ奈良～平安期頃のものと考えられる。

(市川 隆之)

E区北河川址

本址はE区調査区北壁に沿って、やや蛇行して検出された河川址である。本址も南河川址同様に他地区の河川址との連続関係が把握できず、E区河川址の名をつけた。遺構との切り合い関係は本址が7号住居址を切っている。しかし、本址と掘立建物との関係はつかめなかった。

本河川址は南河川址に比して多量の礫を含まず、又、流路も大きく蛇行はしていないが、指頭

大の小石、砂を含む層を形成していること等より自然河川と判断した。護岸施設等は検出されなかった。本址は埋土より、水量も多くなかったように思われた。

遺物は多く、主として古墳末から平安期の遺物が出土した。本址の年代は遺物より平安中頃には埋っていたと考えられる

(市川 隆之)

V群 3号住居址 (第31図、図版7)

本址は調査E区西部、南壁にかかって検出された住居址であり、およそ南半分は調査区外へ延びている。本址の検出面はJV E3層面で、E区南側河川址を切って構築されている。本址の検出にあたっては当初、調査ミスによりIV E3層上面で見のがし、IV E3層掘り下げ中に本址の存在が判明したので改めて検出面を再確認する形となった。

本址の平面プラン・規模は調査部分で北東コーナーが大きくカーブする方形を呈し、東西長は約3.6mを測る。

埋土は大きく3つに分層され、炭化物を少し含む土層の上に炭化材・炭化物・焼土粒を多量に含む層があり、その上にIV E2層が入っている。埋土中の炭化材は全体的に遺存状態が悪く、材の形状・織維方向の判明しないものが多かった。一方材方向の判明したものでは東西方向のものがいくつか並行し、僅かに南北方向のものが点在する。

壁は緩やかに掘り込まれ、遺存状態の良好な部分で約20cmを測る。床面は河川址埋土中の礫が多数顔を出しているが、中央部分は堅い。ピットは2個検出され、北東コーナー壁際、西北隅に位置する。前者は床面より約10cm掘り込まれている。後者は床面より約20cm掘り込まれ、中に人頭大の石が入っていた。两者共、位置、形状より柱穴であると考えられるが、明確にはつかめなかつた。

遺物は磁石・鉄製品・土師器・山茶碗系の鉢等が出土している。土器は総て破片であり、相互に接合するものはなかった。

(市川隆之)

小竪穴 (第36図)

本址はE区西端に位置し、E-VII層で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸約2.3m、短軸約1.7mを測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、遺存状態の良好な西壁で約30cmを測る。床面はほぼ平であるが軟弱である。尚、埋土中では炭化物、焼土の集中が認められたが、部分的であった。

遺物は混入したと思われる土師小片が出土したのみである。

本址の性格は明確につかめなかつたが、形状、規模より小竪穴という中途半端な名称をつけることになった。本址の時期は検出面より中世と考えられ、3号住居址、6号土壙と何らかの関係がある可能性もあるが明確でない。

(市川 隆之)

製鉄関係遺構 (第33図、図版8)

E区東端に位置し、北河川址、7号住居址の上部に構築されている。本遺構は、3つの施設か

ら構成されている。堅穴状遺構・溝状遺構・すり鉢状の遺構からなる。

調査区東端中央より、東西2.9m、南北1.9m、深さ20cmの方形に近い橢円形を呈した堅穴状の遺構が検出された。覆土中からは炭・鉄滓・障壁片が多量に出土し、その周囲からも出土した。

堅穴状遺構の北西側からは、2条の平行した溝及び、西側の溝中と東側溝の東脇からは、円形状の浅いピットが伴ない、相方とも火を受け地山が赤化していた。それらの検出段階から、上面及び周囲に炭・焼土がかなりの量でみられた。西溝は長さ1.9mで発掘区外に延びており、幅20~30cm、深さ3~5cmと浅く、溝中のピットは、径45cm、深さ8cmと溝よりやや深く、わずかに焼けている。東溝は、そのまま東脇にあり、西側のピットを切っており、60cm位の2つの細長い橢円形状の掘り込みからなっている。長さ1.4m、幅22~40cm、深さ10cm位である。溝の北東端には、直径30cm、深さ4cmの浅いピットが接しており、底に炭、灰があり、地山は赤褐色に焼けている。相方の溝、ピットからは、炭、焼土、小数の鉄滓、障壁がつまっていた。

溝状遺構の西側からは、1.5m以上、深さ20cmのすり鉢状の遺構が検出され、炭、焼土の厚さ5cm位を成して広がっていた。遺物は、少數の鉄滓、土師質の杯が出土したのみである。

これらの遺構中には、22ヶのピットがみられ、直径20cm前後のものと、直径40cm位のものとに分かれ、前者は、溝状遺構を囲むように位置し、後者は、すり鉢状遺構付近にみられる。これら多くの多くは20~30cmの掘り方があり、柱穴らしい様相を示しているが、配列がはっきりしない。

以上の遺構の他に、同じ面をもって、発掘区中央付近まで、鉄滓が点在し、中央付近には、5~6mの幅をもって焼土、炭の散在する炭化物集中区がみられた。

前者の3遺構と炭化物集中区を同じ時期のものと考えた。

遺物は、両者から出土したものは、青、白磁の小片、山茶碗、刀子、釘、土師質土器、鉄滓(図-5)、障壁(図-6)である。釘には、完全な形をしているものは一点も見られず、又、形成の不明な未製品としか呼べないような鉄製品が出土している。

以上の遺物から鎌倉時代末期から室町時代初期の遺構と考えられる。

(寺島 俊郎)

6号土壤 (第36図)

本址はE区西端E-VII層で検出された土壤である。本址のすぐ隣りには堅穴が位置する。本址は調査ミスで南半分の上部を削平してしまった。残存部より本土墳の平面形は円形を呈し、その径は約1.5m前後を測ると考えられる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ北壁で約60cmを測る。底面はほぼ平であるが軟弱である。

遺物は本址に伴うと考えられるものは無く、3号住居より出土した灰釉瓶類と同個体と思われる破片が出土したのみである。本址の年代は検出面より中世と考えられる

(市川 隆之)

E区南河川址

本址はE区調査区南壁に沿って検出された河川址である。1号掘立建物址、7号住居址を切り3号住居址に切られる。本址が自然河川であると判断された根拠は、流路が傾斜方向と合致する事、流路が部分的に蛇行し、E区中央部までオーバーフローしている事、又、断面形が緩やかな

U字を呈す事、埋土中に挙大から指頭大の小石を多量に含む等より判断された。

本址は他地区で検出された河川址との連続関係が把握できなかった為、E区南河川址という名称をあたえたが、2及至3回流路を変えていると思われ、流路内で切り合い関係が認められた。

しかし、いづれも礫を多量に含み、かなり勢いがあったものと考えられた。本河川址内よりは須恵大甕、土師、灰釉陶器片が出土し、3号住居址との切り合い関係より、本河川址の流れたのは古代末から中世前半期と考えられた。

(市川 隆之)

不明1号土壤 (第35図)

本址はD-2区中央東より、北壁際で検出された土壤である。平面形は梢円形を呈し、長軸約1.5m、短軸約1mを測る。壁は約35cmを測る。遺物は流入と考えられる土師小片を得たのみである。

(市川 隆之)

3号土壤 (第35図)

本址はD-2区中央西部で検出された土壤である。平面形は東がやや張った梢円形を呈し、長軸約1.8m、短軸約0.9mである。本址上面は、耕地化する際かなり削平されていると考えられ、東壁で8cmを測るのみである。遺物は流入と考えられる土師小片を得たのみである。

(市川 隆之)

4号土壤 (第35図)

本址はD-2区西部に位置し、6号住居址を切っている。平面形はやや隅丸方形に近い円形を呈し、規模は南北約1.4m、東西約1.2mを測る。本址も3号土壤同様に上面を削平されていると考えられるが、ほぼ垂直に深く掘り込まれ、西壁で約40cmを測る。遺物は流入と考えられる土師小片を得たのみである。

(市川 隆之)

5号土壤 (第35図)

本址は中央部東よりに位置し、8号住居址を切っている。調査ミスにより、本址は8号住居址検出の際に見のがし、8号住セクションを切る時に判明した。残存部分より、本址の平面形は梢円形を呈すと考えられた。規模は長軸約1m、短軸約0.6mと推定される。壁はやや緩やかに掘り込まれ、東壁で31cmを測る。遺物は骨片が僅かに検出されたが、本址に伴うものは少量すぎて疑問が残る。

(市川 隆之)

7号土壤 (第35図)

本址はD-2区中央に位置する。平面形は円形を呈し、径は0.6m×0.7mを測る。本址上部には挙大の礫を中心として礫の集中が認められた。遺物は土師小片が出土したが、流入と考えられる。

(市川 隆之)

C区河川址

本址はC区西端の北壁にかかる検出された河川址である。調査ミスにより大方削平してしまったが、調査区壁で本址を観察したところ埋土は小礫や砂を含む層が認められ、水が流れたものと考えられた。又、その方向は西から東へ地形に沿ったものであり、以上の点から本址を自然

の河川址と考えた。しかし、本址はE区南河川址のようにオーバーフローしながら蛇行していたり埋土に砂礫を多量に含んでいたりせず、本址はやや静かな流れであったと考えられる。この事は本址埋土遺物より本址が平安以降と推定されることを考え合せれば、本址は矢原が開発されていた後のものと位置づけられる可能性があり、そうすると人為的な治水と関係があったとも考えられる。しかし、この事は判断するまでには至らなかった。

(市川 隆之)

B区東河川址

本址はB区西南端より緩やかにカーブしてB区中央を北北東へ横ぎる形で検出された。本址は落ち込みを明確につかめず、礫層として把握された。そして、本址を部分的に80cm程掘り下げたが、礫は続き、本址が本当に河川址であるかは明確でない。しかし、本址は自然の水の營力により形成された事は明確である。

遺物は出土していないが、本址の形成期は礫層の上部に一部V層が載っているのが認められた事により、A区1・2号住居の時期以前であるとしか推定されなかった。

B区西河川址

本址はB区西部を南西から北東へ横ぎる河川址で、V層上面で検出された。埋土中には2枚の礫層が認められ、自然河川址と判断された。名称は他地区的河川址との連続が不明で、B区内の西側河川とした。

遺物は2枚の礫層の間層より土師高杯破片が出土したのみである。従って本址の時期は明確ではなく、古墳時代以降としか判断されなかった。

(市川 隆之)

C区小河川址

本址は明確な掘り込みが認められないものの、厚さ約20cm前後の礫層が帯状に蛇行しているものである。C区では4本検出されたが、いづれも指頭大の礫を主とするものである。河川址とするにはやや問題があり、本流が一時的にオーバーフローした際のものとも考えられる。これらの年代は仔細不明である。

(市川 隆之)

第V章 結 語

矢原遺跡群は、穂高町の南東、鳥川扇状地の扇端部に立地する遺跡群である。矢原は、律令国家時代に八原郷が位置し、その後、平安時代後期頃から皇太神宮領の矢原御厨が存在した地といわれる。そしてこの地からは、古くから縄文時代～中世の遺物の出土が知られ、矢原神明宮にも多くの遺物が収蔵されている。現在までに本格的な調査はされていなかったものの、住居址等の遺構も発見されており、八原郷の中心地ではないかともいわれている地籍であった。

今回の調査は、矢原地籍において初めて本格的なメスを入れたもので、遺跡群の南部を横断する全長約800mの一大トレンチを掘るように県道に沿って調査された。

調査の結果、古墳時代中期初頭（4世紀末～5世紀前半）の住居址2軒、古墳時代後期（6世紀末～7世紀）の住居址3軒、奈良時代（8世紀）の住居址3軒、平安時代後半（10世紀～11世紀）の住居址5軒・土壙（墓壙）1基、平安時代と予想される建物址1棟、中世（13世紀末～14世紀）の住居址1軒・製鉄関係遺構などが検出され、長期間継続した集落跡であることを再確認することができた。

奈良・平安時代の遺構の存在は八原郷・矢原御厨との関係を予期できるものであろうし、神明宮所蔵遺物の半数が平安時代後期のものであり、また旧来発見されているほとんどの住居址も平安時代後期と見られることは、平安時代後半においてはこの地方において優数の集落であり、これは、矢原神明宮が関係する矢原御厨の発生とも関係すると考えられる。そして、中世の遺構についても、矢原御厨に関係したものであろう。また、奈良時代初期の8号住居址から出土した、藤原京・飛鳥IV期の壺に近似する壺の存在は、八原郷、もっと拡大して考えるならば安曇郡の中心に近い位置にあることが予想できる。

古墳時代の集落の存在は、おそらく、本遺跡西方、山麓地域の牧・塚原・上原には古墳群が存在しており、これらの古墳は「猪鹿の牧」という牧に関係した古墳群といわれているが、牧関係ばかりでなく、本遺構からもさほど離れていないことから、ここに存在した集落も関係しており、古墳造営集団のひとつであったと考えられる。古くから縄文時代中期の遺物発見も知られ、昭和61年E地区で隣接して発掘調査がなされ、古墳時代前期住居址2軒、平安時代後期住居址3軒が検出されている。周辺にはまだ相当の住居址等の遺構の存在が予想されることから、矢原遺跡群は、この地域でも最大級の遺跡であると考えられる。

最後になりましたが、これだけの成果が得られたことは参加・協力くださされた方々に感謝の意を表するものである。

付録1 矢原遺跡群出土の炭化物について

本遺跡の炭化物については、双眼実体顕微鏡により20倍～40倍を使って鑑定した。炭化物は灰化直前で炭化したものは、内部構造が残っておらず、樹種の決定はできなかった。A地区1号住居址出土の炭化物は内部構造の残存するものが多く樹種の決定はしやすかったが、E区3号住居址のものは粉状、または灰化しており、非常に困難であった。炭化物についてのテキストは無いので、長年原生種の木材を炭化させておいたものをテキストとして、資料の炭化物の木口面と柱面とを比較し同定した。参考文献としては、「原色木材図鑑」、「木材解剖図鑑」、そして既刊の報告書に記載しておいた炭化物等である。

1号住居址の資料 資料総数59

コナラ 35 クリ 4 クルミ 1

コナラかクリ 1 ナラかクリ 2 不明（灰化、粉化等） 17

（上記炭化材の中に一部加工材と思われるものが含まれている）

1号住居北壁際 ススキまたはヨシの炭化物

以上、A地区1号住居址は非常に多くの炭化物が出土したが、その殆んどはコナラ材であり、小量のクリ材と1片のクルミ材の炭化物が出土したのみであった。尚、北壁際からススキまたはヨシの炭化物が少量出土しているが、これは屋根材が壁に使われていたものとみられる。

3号住居址の炭化物について。

この炭化物は非常に微細なものが焼土や灰と共に厚く層状に堆積し、灰化寸前のものが多く、鑑定不能のものが多かった。わかったものののみをあげると

3号住居址資料総数14

コナラ 1 ヒノキ 1 スギ 2

カバノキ科（ミズメヌまたはハンノキ） 2 カバノキ科針葉樹 1 不明

以上判明したものだけでも雑多な樹種であるが、粉状になっているおびただしい灰状炭化物の主体を成す樹種は何であるのかは、全く不明である。おそらく、これは火災住居と違って付録2に述べるような鉄の溶融などに使い、灰化又は灰化直前まで使用したため、炭の組織が不明になつたものと推定される。

（森 義直）

付録2 矢原遺跡群E区出土鉄滓について

E地区の鉄滓については磁性をもつもの（鉄質）が約 $\frac{1}{2}$ 、磁性を持たないものが約 $\frac{1}{3}$ であった。磁性を持たないものを試物顕微鏡で調べてみると、

- ①ソーダ（灰）+長石+ケイ酸（石英）によりガラス化しているもの
- ②灰と長石は反応しているが石英粒は残在しているもの
- ③ガラス化する時のガスで発泡して融鉄などの上に浮上し、軽石状となり水に浮くものなど3種類に分けられる。

以上の点を総合すれば、規模は小さいが鉄の溶融を行なっていたと断定できる。ただ、問題は製鉄（タタラ）であったのか、既在の鉄鉱の鉄屑などをを使った再溶融炉であったのかは資料が少なく、どちらとも断定しがたい。

鉄滓付着の炭化種子について

鉄滓を調べているうち、鉄滓に付着して1粒の穀物の炭化種子が発見され、現生種の穀物の種子を炭化させ実体顕微鏡で比較したところヒエの種子と断定できた。 （森 義直）

遺物觀察表

固版番号	固番号	生層	取り上 げ番号	種別	縦形	口徑	底径	内色調	底	施土	施成方 向	成形の特徴	
												色	色
13-6	43-9	11	63	土師器	快	20.3	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	C	1.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	10	n	46	n	n	n	—	茶赤褐色	茶赤褐色	茶赤褐色	C	2.7mm以上の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	"
	11	n	47	n	n	n	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	C	3.0mm以上の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	"
12-1	44-1	5	21	土師器	坏	13.0	5.1	4.4	淡黄褐色	淡黄褐色	C	4.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	2	n	32	土師器	n	13.6	5.4	4.1	黄褐色	黄褐色	C	5.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	"
12-2	3	n	46.14	陶土器	n	13.4	5.8	4.2	黄褐色	黄褐色	C	6.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	4	n	46.14	陶土器	n	14.0	(6.0)	4.0	黄褐色	黄褐色	C	7.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	"
12-3	5	n	30	n	n	14.85	5.9	4.6	淡黄褐色	淡黄褐色	C	8.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
12-4	6	n	45	n	n	14.5	6.4	4.4	?	?	C	9.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
12-5	7	n	23	n	n	15.5	7.3	5.1	黄褐色	黄褐色	C	10.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
12-6	8	n	25.54	n	n	14.6	5.8	5.4	淡黄褐色	淡黄褐色	C	11.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
12-7	9	n	29	n	n	15.5	7.9	5.9	黑茶褐色	黑茶褐色	C	12.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
12-8	10	n	49	陶土器	坏	—	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	C	1.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	11	n	20	n	n	—	—	6.0	—	底部のみ 底部充てん	C	2.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	12	n	2	n	n	—	—	8.6	—	底部充てん	C	3.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
13-1	4	18	須恵器	高台坏	—	7.1	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	C	4.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	5	22	n	n	n	12.4	5.4	3.5	灰褐色	灰褐色	C	5.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
13-2	15	n	15.48	n	n	12.8	5.3	3.9	灰褐色	灰褐色	C	6.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	16	n	40	n	n	12.9	4.4	3.9	茶灰褐色	茶灰褐色	C	7.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	17	n	77.1	n	n	—	6.2	—	—	—	C	8.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	18	n	77.1	n	n	13.4	—	—	—	—	C	9.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	19	n	14	n	n	13.4	6.4	4.3	灰褐色	灰褐色	C	10.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	20	n	77.1	陶土器	体	—	13.1	—	黄褐色	黄褐色	C	11.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
13-3	45-1	5	35	土師器	腹	18.6	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	C	1.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	2	n	77.1	土師器	小形腹	10.2	—	—	—	—	C	2.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
13-3	3	n	10.31	n	n	—	—	—	—	—	C	3.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	4	n	27	n	n	—	—	—	—	—	C	4.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器
	5	n	77.1	n	n	—	—	—	—	—	C	5.0mm以下の部分を削り、削除部を糊で埋めます。	所調試験型便器

番号	回数	住居	取り上 げ工具	種類	器形	口径	底径	高さ	外色調	内色調	質	胎	土	焼成	ロクロ 方向	成形の特徴	備考
13-3	45-6	5	土師器	壺	—	5.2	—	18.4	暗赤褐色	—	1mm以下の部分を含む。	良好	—	—	—	内面凹凸ナメ仕上げ、 内面削除、全体に器體 体部は全体に器體 回転ナメ、ヘラナメ	
13-4	7	n	36	須恵器	n	n	—	14.0	赤褐色	赤褐色	良好	—	—	—	—	—	—
	8	n	26	鐵器	n	n	—	—	暗灰褐色	暗灰褐色	良好	—	—	—	—	—	—
	10	n	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14-1	46-1	4	2	土師器	壺	9.9	4.8	2.6	赤褐色	赤褐色	良好	—	—	—	—	—	—
14-2	2	n	8	黑色土師器	n	9.6	3.7	3.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	3	n	19	内風土師器	n	14.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	4	n	11	内風土師器	n	14.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15-3	6	n	1	須恵器	n	12.6	5.2	3.9	黄赤褐色	黄赤褐色	良好	—	—	—	—	—	—
	18	n	18	土師器	壺	14.4	8.4	6.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	7	n	4	内風土師器	n	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	8	n	10	n	n	—	6.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15-5	9	n	3	灰陶陶器	n	14.8	8.0	4.9	灰白色	灰白色	良好	—	—	—	—	—	—
15-4	10	n	14	n	—	11.3	5.5	2.3	白	白	良好	—	—	—	—	—	—
	11	n	77±	土師器	土ニチヘル器	—	—	4.2	暗赤褐色	暗赤褐色	良好	—	—	—	—	—	—
15-6	12	n	12	灰陶陶器	壺	16.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15-7	13	n	12	灰陶陶器	短颈壺	11.0	16.0	26.8	灰白色	灰白色	良好	—	—	—	—	—	—
47-1	10	6	内風土師器	壺	—	6.8	—	—	淡青褐色	淡青褐色	良好	—	—	—	—	—	—
15-2	2	n	16	土師器	小口壺	n	9.0	3.9	1.95	—	—	—	—	—	—	—	—
	3	n	7	8	n	n	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	4	n	1	n	环	9.9	4.3	4.5	淡青褐色	淡青褐色	良好	—	—	—	—	—	—
16-2	5	n	9.16.11	n	n	10.1	3.1	2.6	淡青褐色	—	—	—	—	—	—	—	—
16-1	6	2±	灰陶陶器	壺	n	n	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16-3	7	n	3	n	小瓶	4.0	5.4	9.9	n	n	—	—	—	—	—	—	—
16-3	8	n	1	須恵器	長頸壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

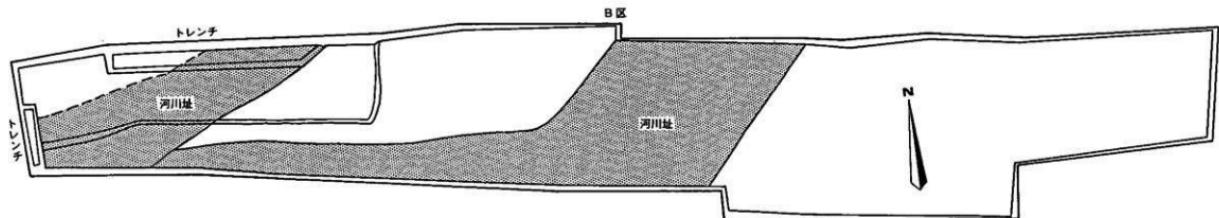
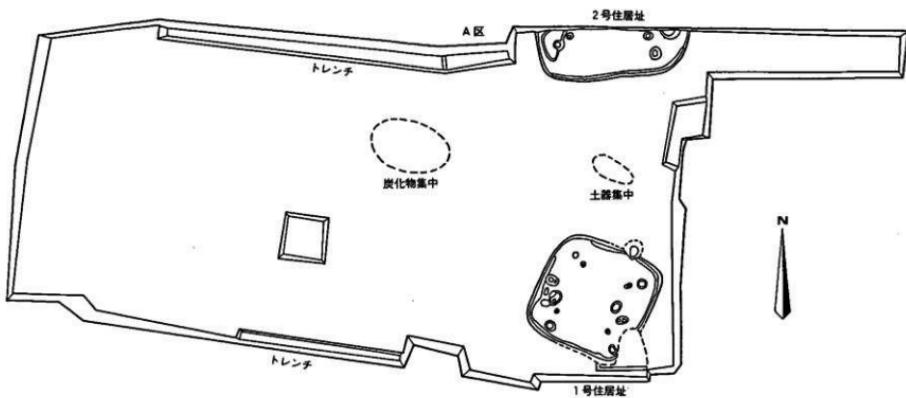
図面号	図面番号	造構	種別	形状	器形	口径	注溝径	高さ	内面	外面	表面	底存	底土	地底	口2D	口2D	成形	備考
48-1	E北河川辻	内壁土壌器	高	坪	—	—	赤褐色	黑色	赤竹褐色	赤褐色	褐色	—	1.5mm以下の良石、石英、砂利を含む。	良好	—	ナチュラル、外面へラミネート。	三方透し	
2	"	用意器	高	"	—	12.2	5.4	(3.3)	褐色	褐色	褐色	6	0.7~1mm以上の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ。		
3	"	土師器	坪	"	—	12.4	5.0	(4.0)	"	—" "	—" "	"	0.5~1mmの良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
4	"	内壁土壌器	高	"	—	14.0	—	—	黑色	黑色	黑色	"	0.5~1mmの良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
5	"	内壁土壌器	高	"	—	—	8.6	—	黄色	黄色	褐色	—	0.5~1mmの良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
6	"	土師器	坪	"	—	—	—	—	褐色	褐色	褐色	—	0.5~1mmの良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
7	"	須恵器	坪	二重	—	12.6	6.6	4.4	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。	墨跡(外底部)	
16-4		須恵器	坪	环	—	—	8.6	—	灰色	灰色	灰色	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。	墨跡(外底部)	
9	"	土師器	高	"	—	13.0	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。	墨跡(外底部)	
10	"	土師器	高	"	—	14.2	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ	墨跡(外底部)	
11	"	土師器	高	"	—	14.6	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、火焚。		
12	"	土師器	高	"	—	14.6	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、火焚。		
13	"	土師器	高	"	—	14.6	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
14	"	土師器	高	"	—	—	5.4	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
15	"	土師器	高	"	—	—	8.0	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ		
16	"	高吉	坪	—	—	8.4	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	良好		
17	"	高吉	坪	—	—	11.0	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	良好		
18	"	高吉	坪	—	—	8.8	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	良好		
19	"	高吉	坪	—	—	13.2	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	良好		
20	"	高吉	坪	—	—	3.2	2.5	0.9	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	良好		
21	"	高吉	坪	—	—	14.8	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	良好		
49-1	E北河川辻	須恵器	長頸壺	登	—	8.2	—	—	青紫褐色	青紫褐色	青紫褐色	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ		
2	"	須恵器	長頸壺	登	—	18.6	—	—	赤紫色	赤紫色	赤紫色	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
3	"	須恵器	長頸壺	登	—	7.4	—	—	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
4	"	須恵器	長頸壺	登	—	—	—	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ、回転未切り倒。		
5	"	須恵器	長頸壺	登	—	12.8	8.2	17.5	青灰	青灰	青灰	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ		
6	"	須恵器	長頸壺	登	—	21.4	—	—	赤紫色	赤紫色	赤紫色	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	ロクロナダ		
7	"	須恵器	長頸壺	登	—	22.6	—	—	赤紫色	赤紫色	赤紫色	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	良好		
8	"	須恵器	長頸壺	登	—	—	—	—	赤紫色	赤紫色	赤紫色	6	0.5~1mm以下の良石、石英、砂利を含む。	"	"	良好		

表3

団版番号	団番号	出土遺構	取り上げ番号	種別	寸法(残存)			備考
					長さ	巾	厚さ	
11 - 6	38 - 4	1号住居址	63	鍔	(5.9)	(1.2)	0.2	No4グリットより出土 矛矢式
	5	"	-	不明	(3.0)	1.2	0.3	
	12	2号住居址	9	不明	(4.4)	0.8	0.2	
15 - 4	42 - 11	8号住居址	53	鍔	15.6	1.6~3.2	0.2	刀部のみ 柄部に木質部が残存
	"	"	51	鍔	11.5	0.6	0.4	
15 - 4	"	"	52	刀子	5.2	1.3	0.3	
	45 - 10	5号住居址	60	刀子	(8.8)	1.0	0.3	
	"	9号住居址 南河川北	-	刀子	(9.1)	1.1	0.2	
50 - 4	50 - 4	3号住居址	-	刀子	(6.0)	0.7	0.6	
	5	"	-	刀子	(4.6)	0.7	0.5	
52 - 1	2	製鉄関係	-	刀子?	(3.4)	0.4	0.4	断面は正三角形 棒状 孔はみられない
	3	"	205	"	(2.8)	0.5	0.5	
	4	"	-	"	(3.5)	0.9	0.5	
	5	"	235	"	(3.0)	0.7	0.5	
	6	"	-	"	(3.6)	0.6	0.8	
	7	"	-	刀子	(2.7)	0.6	0.3	
	8	"	-	刀子	(3.6)	0.8	0.3	
	9	"	-	刀子	(2.2)	0.6	0.4	
	10	"	-	刀子	(2.4)	(0.5)	(0.5)	
	11	"	-	刀子	(2.0)	0.6	0.4	
	12	"	-	刀子	(7.5)	0.7	0.3	
	13	"	226	"	(5.6)	1.0	0.8	
	14	"	155	"	(8.0)	0.7	0.7	
	15	"	120	"	(6.4)	0.4	0.3	
	16	"	153	"	(5.1)	0.4	0.3	
	17	"	50	"	(2.8)	0.7	0.4	
	18	"	-	"	(1.9)	0.5	0.3	
	19	"	216	"	(5.2)	0.7	0.8	
	20	"	209	刀子	6.4	0.6	0.4	
	21	"	221	刀子	10.1	0.8	0.6	
	22	"	-	鍔	1.9	0.8	0.8	
	23	"	254	刀子?	(2.5)	2.3	0.6	
	24	"	-	刀子	(2.0)	1.9	0.3	
	25	"	-	刀子	(8.8)	1.8	0.6	
	26	"	-	刀子	15.0	1.0	(0.9)	No27グリットより出土 サヤと思われる木質部付着 銘文元宝 光宝通宝
	27	"	154	刀子	13.9	1.1	0.8	
	28	"	-	鍔	2.4	2.4	2.4	

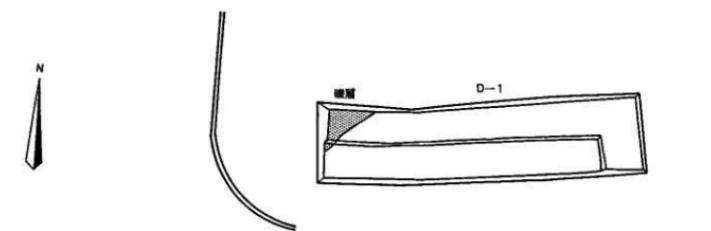
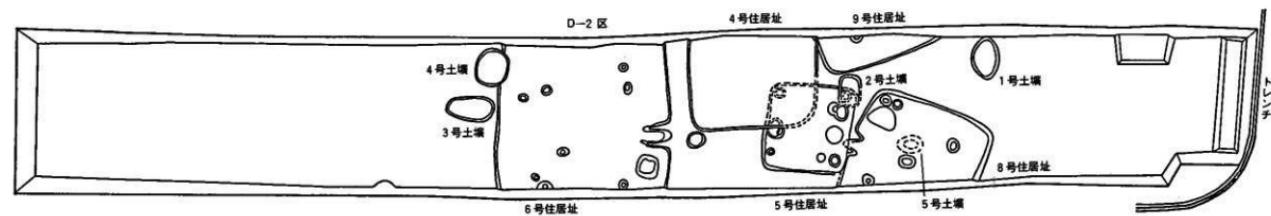
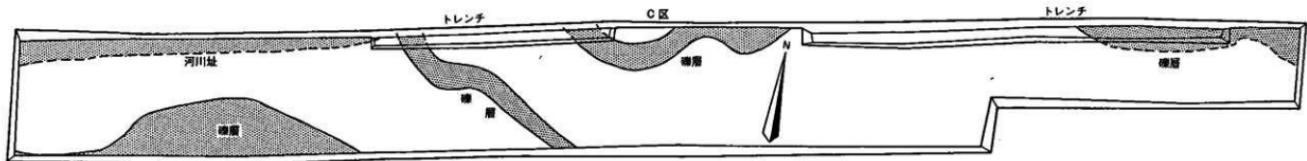
表4

団版番号	団番号	出土遺構	取り上げ番号	種別	寸法(残存)			石質	備考
					長さ	巾	厚さ		
16 - 6	38 - 13	2号住居址	26	たたき石	15.3	8.8	4.9	砂岩	南西ピット内 銘文あり
	14	"	37	砥石	23.4	17.3	7.3		
16 - 6	41 - 4	7号住居址	-	砥石	14.8	14.9	9.0	流紋岩	7号住居址貼床内
	5	"	5	磨盤車	-	4.0	1.4		
16 - 6	49 - 10	北西川址	-	砥石	12.0	5.9	1.8	頁岩	E区北西川址
	11	E区北西川址	-	打製石斧	(19.9)	12.4	3.7		
16 - 6	50 - 6	3号住居址	4	砥石	7.8	3.9	0.8	流紋岩	6号住居址外、東より出土、暗褐色土層
	7	"	3	"	17.1	5.9	4.5		
16 - 6	51 - 9	製鉄関係	220	砥石	13.5	6.5	7.7	砂岩	25グリット 塗褐色土層
	10	"	-	"	(2.5)	3.0	(1.3)		
	11	"	169	"	(7.2)	4.3	(1.7)		
	12	"	165	"	(4.8)	3.2	1.6		
	13	"	-	"	(2.7)	3.0	(1.6)		
16 - 6	53 - 2	D区	-	打製石斧	(5.4)	5.3	1.5	砂岩	6号住居址外、東より出土、暗褐色土層
	5	"	-	"	20.7	8.5	2.5		
16 - 6	6	B区表様	-	"	(5.3)	4.1	1.5	#	



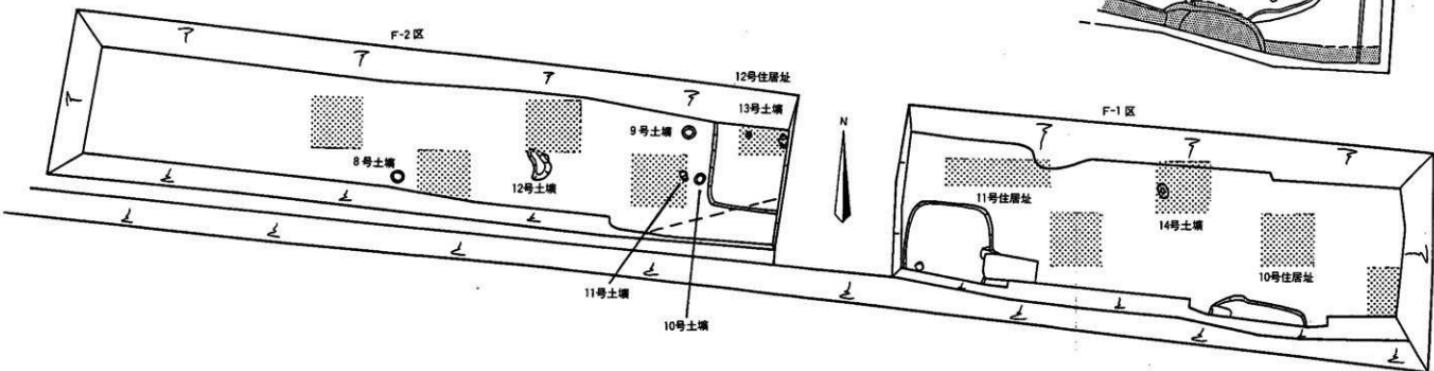
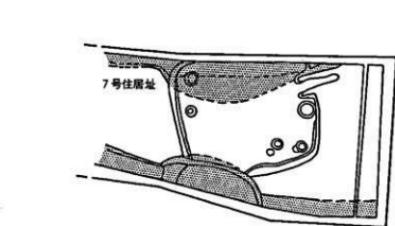
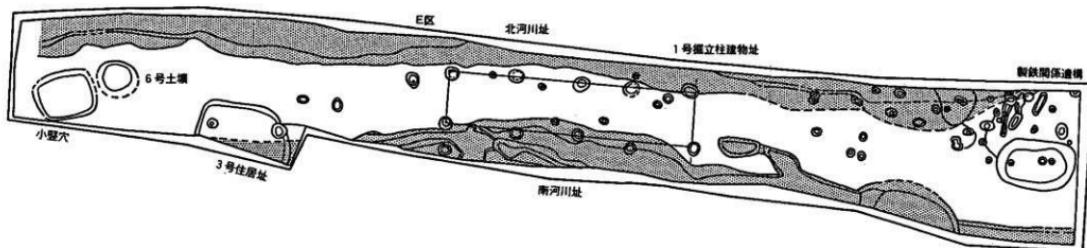
第4図 A・B区遺構全体図

0 10m



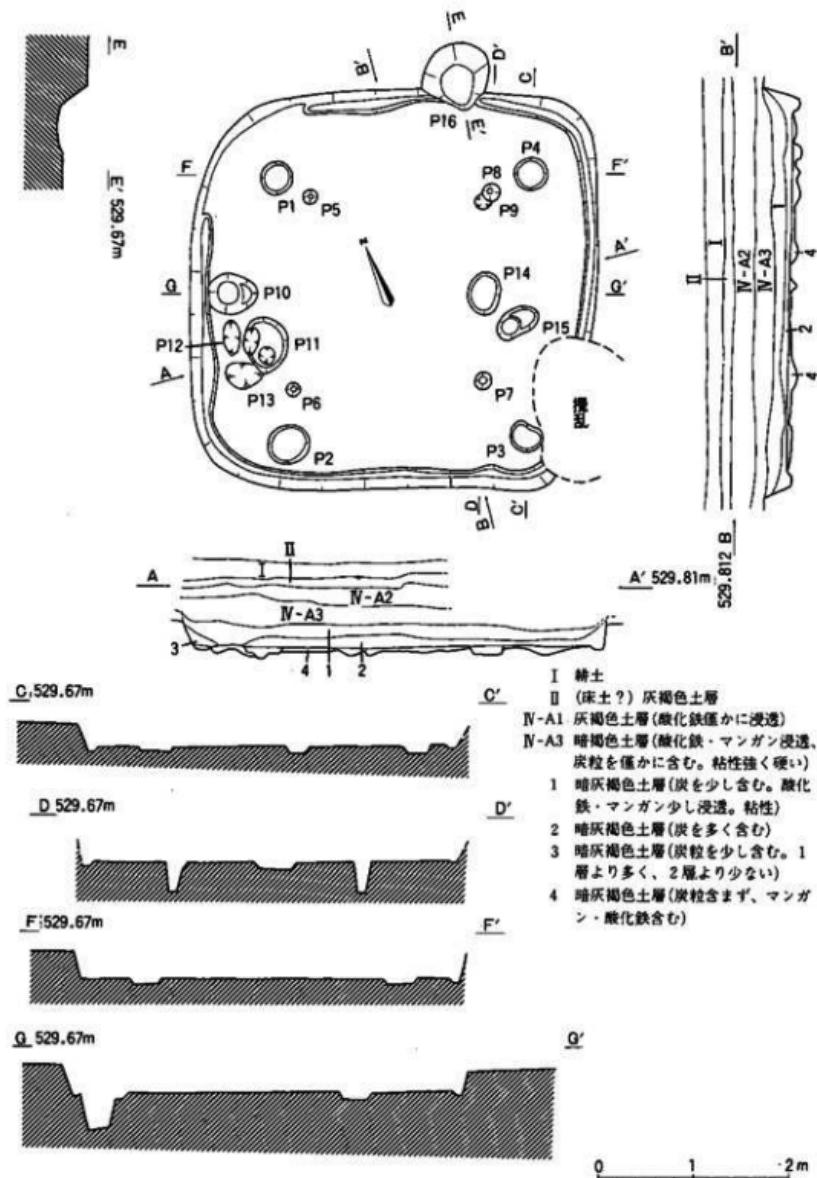
第5図 C・D区遺構全体図

0 10m

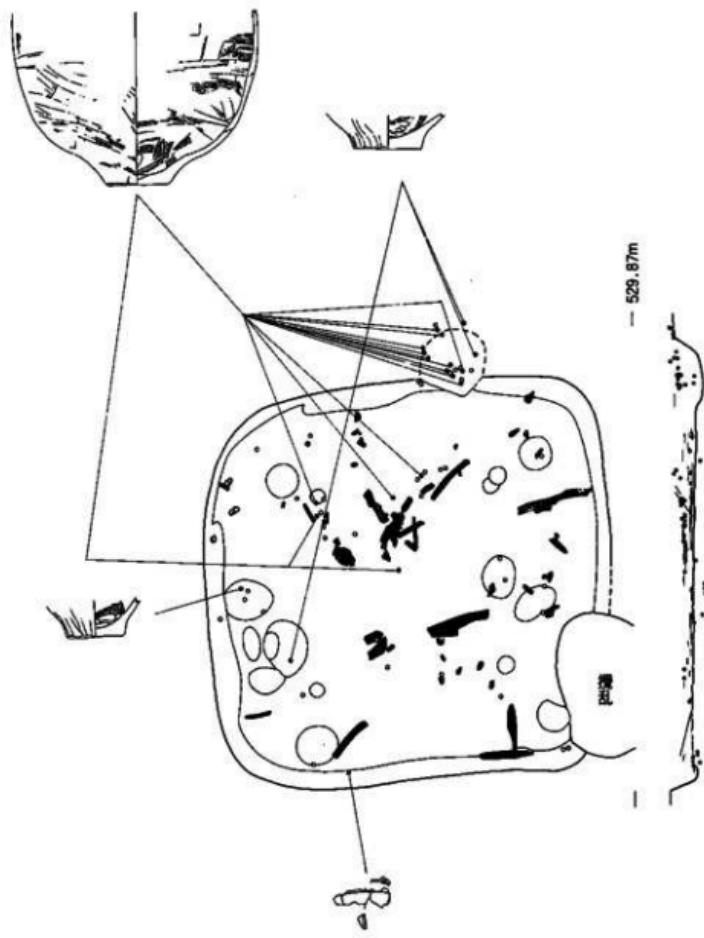


第6図 E・F区遺構全体図

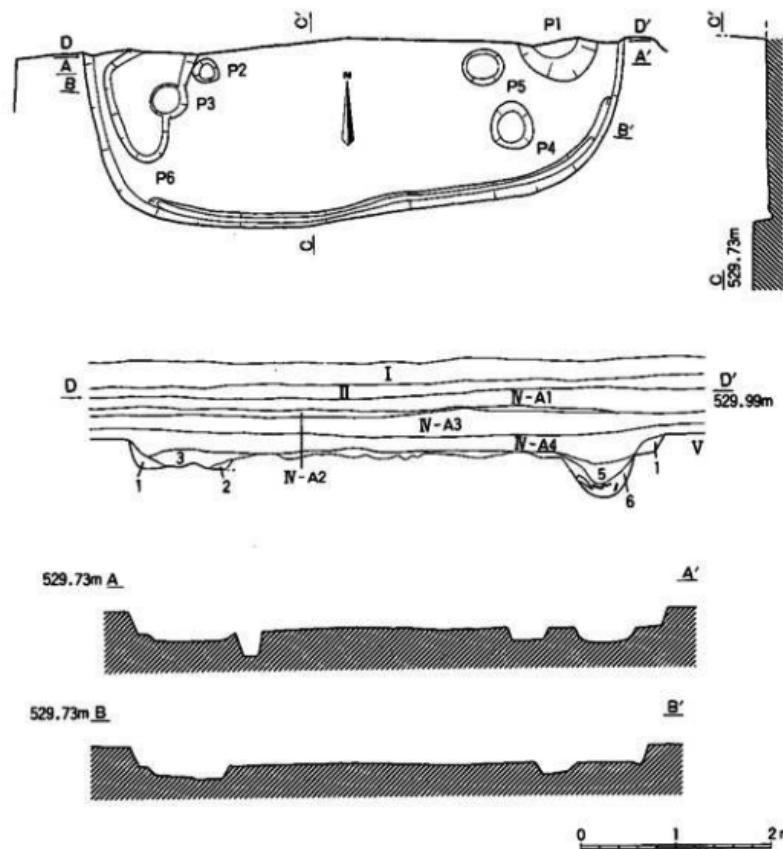
0 10m



第7図 1号住居址

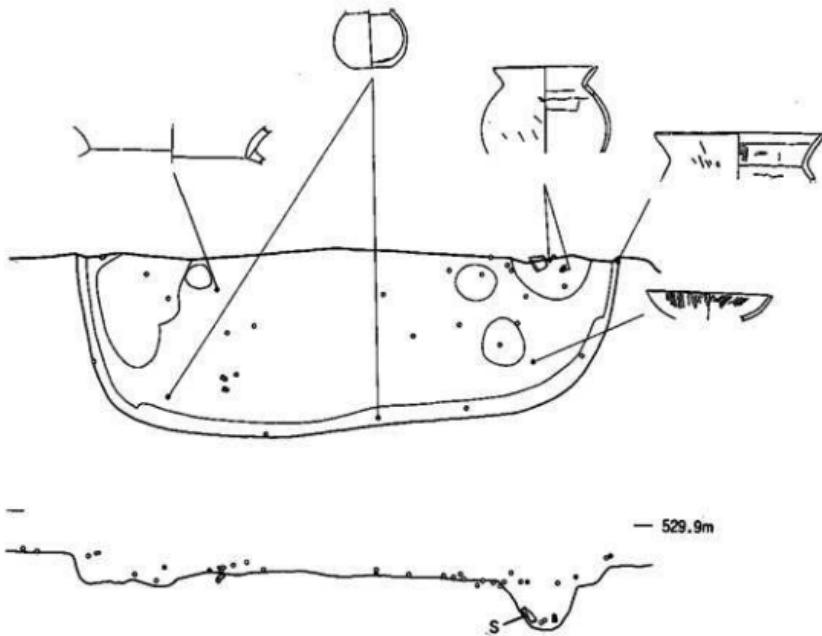


第8图 1号住居址遺物出土位置図

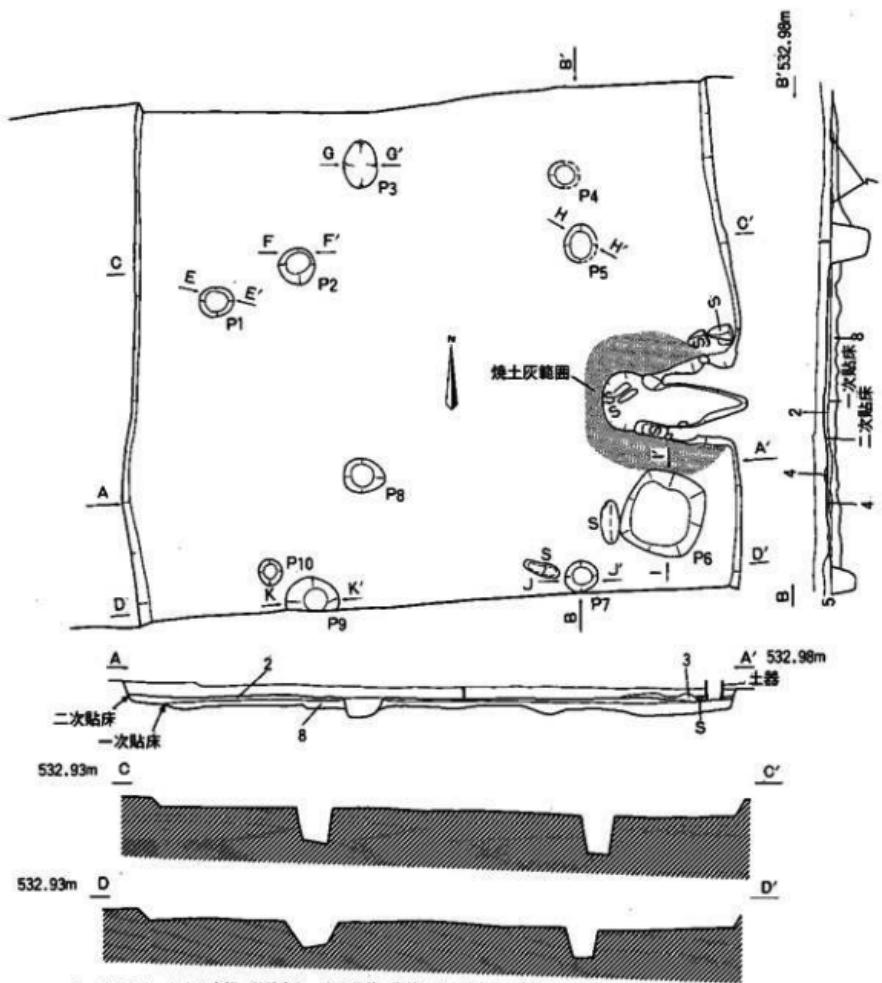


- I 耕土
 II 青灰色土
 IV-A1 黄褐色土(炭化鉄浸透)しまり良好、指頭大の小石を少し含む 砂粒を多く含む。
 IV-A2 暗褐色土、しまり良好、粘性やや強し、砂粒を多く含む。
 IV-A3 暗灰褐色土、しまり良好、粘性やや強し、砂粒を多く含む。
 IV-A4 灰褐色土 IV-A3より灰色、砂粒は多いがIV-A3層ほどはない。
 1 暗褐色土 色は2に近い、粘性が強く、焼土粒・炭化物を僅かに含む。
 2 灰褐色土 下層の灰褐色砂質土の小ブロックを含む。
 3 暗褐色土 烧土粒、土器少片、炭化物を少し含む。粘性が強く、砂粒は少し含まれて
 いるだけである。
 4 暗褐色土 粘性強し、しまり良好
 5 灰褐色土 砂粒はあまり含まず、粘性が強い、焼土粒、土器小片、炭化物を少し含む。
 6 灰褐色土 粘性があり、砂質土。

第9図 2号住居址

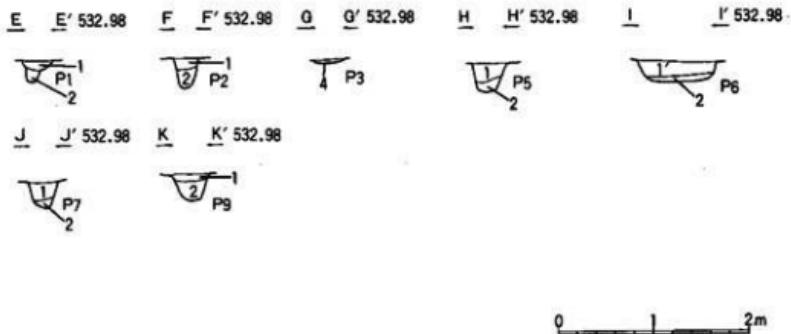


第10図 .2号住居址遺物出土位置図

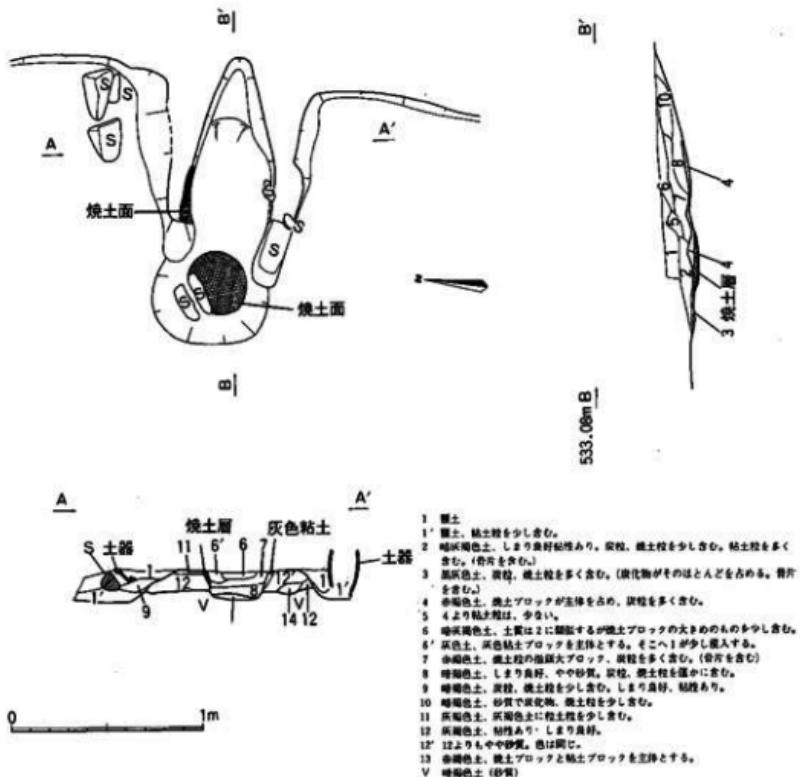


- 1 喀褐色土、しまり良好、粘性あり、やや砂質で炭粒、焼土粒を少し含む。
- 2 喀褐色土、しまり良好、粘性あり、炭粒を僅かに含む。(上面がE) 灰色
粘土ブロックを多く含む。
- 3 喀褐色土、しまり良好、粘性あり、焼土粒、炭粒を多く含む。
- 4 黑褐色土、炭粒を少し含む。しまり良好、粘性あり。
- 5 喀褐色土、喀褐色土に黑褐色土小ブロックを含む。
- 6 灰色粘土ブロック
- 7 喀褐色土 しまり良好、粘性あり、炭粒含まず。
- 8 喀褐色土 やや酸味を帯びる。

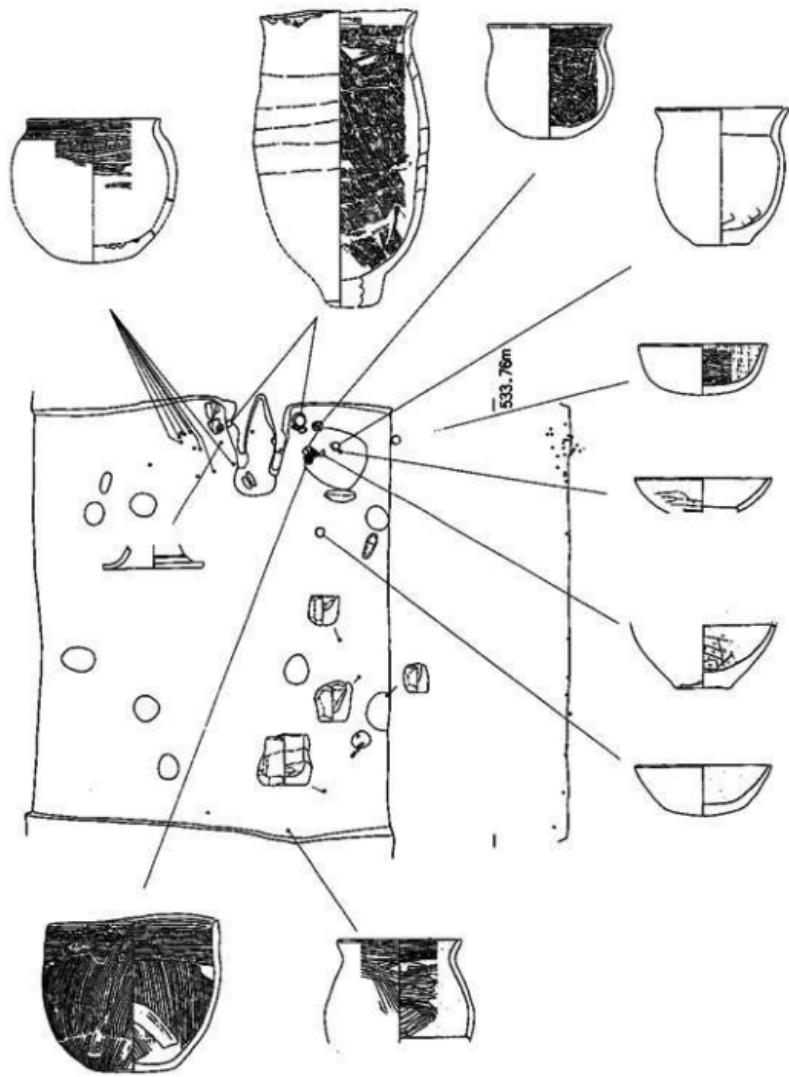
第11図 6号住居址



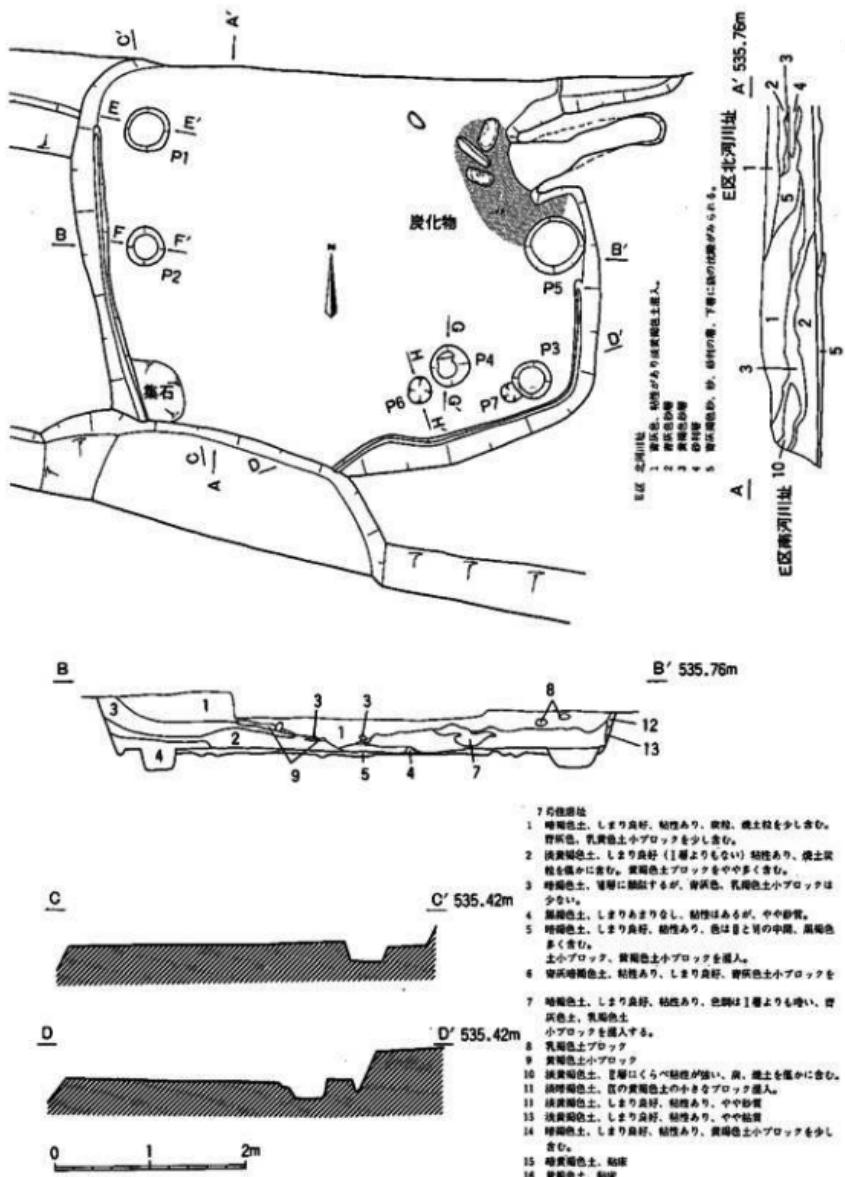
第12図 6号住居址ピット土層図



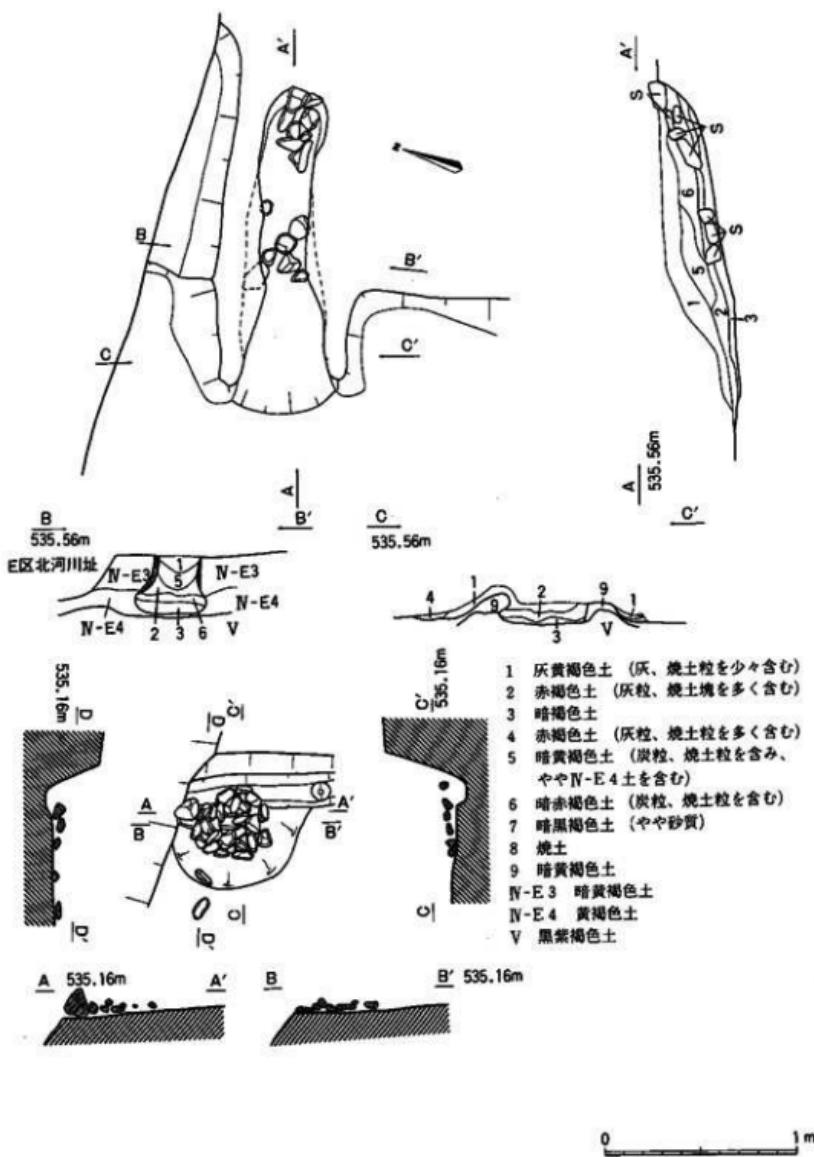
第13図 6号住居址カマド



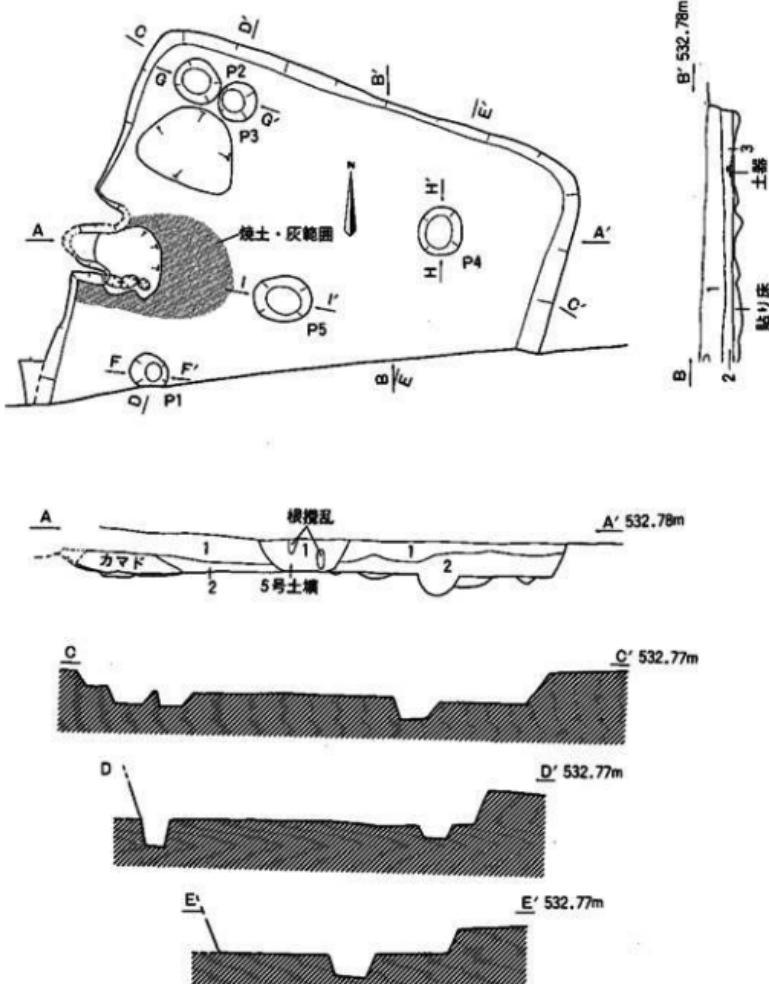
第14図 6号住居址遺物出土位置図



第15図 第7号住居址



第16図 7号住居址カマド・コモ石出土状態図

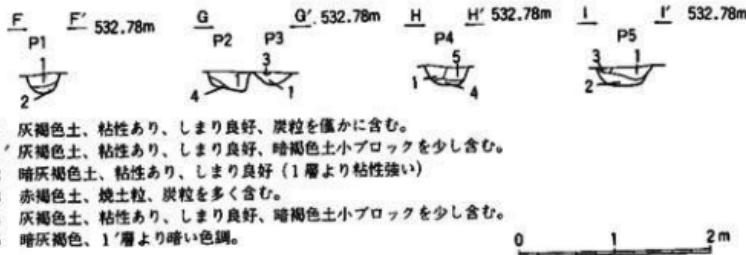


8号住居址

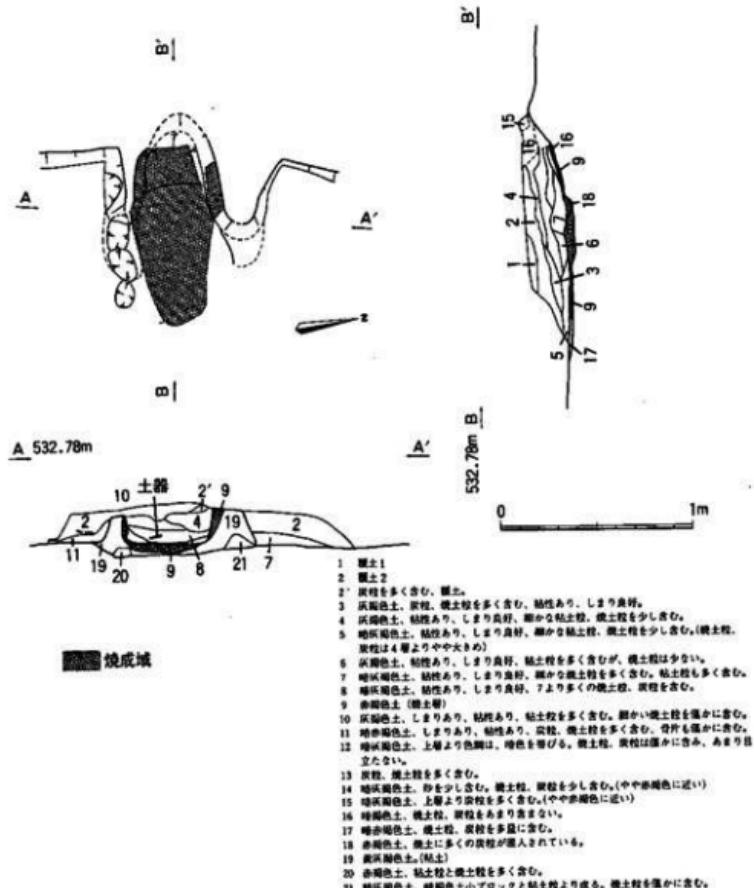
- 1 暗灰褐色土、しまり良好、粘性あり、マンガン浸透著し。小石、炭化物、焼土粒を少し含む。5mm以下の砂粒（小石）を少し含む。
 - 2 灰褐色土、しまり良好、粘性あり。やや砂質（細砂質）で少石を少し含む、焼土粒、炭粒を少し含む。（5mm以下の砂質粒を含む）
 - 3 灰褐色土
- 5号土壤
- 1 炭化物、焼土粒を多量に含む。灰褐色土。

0 1 2m

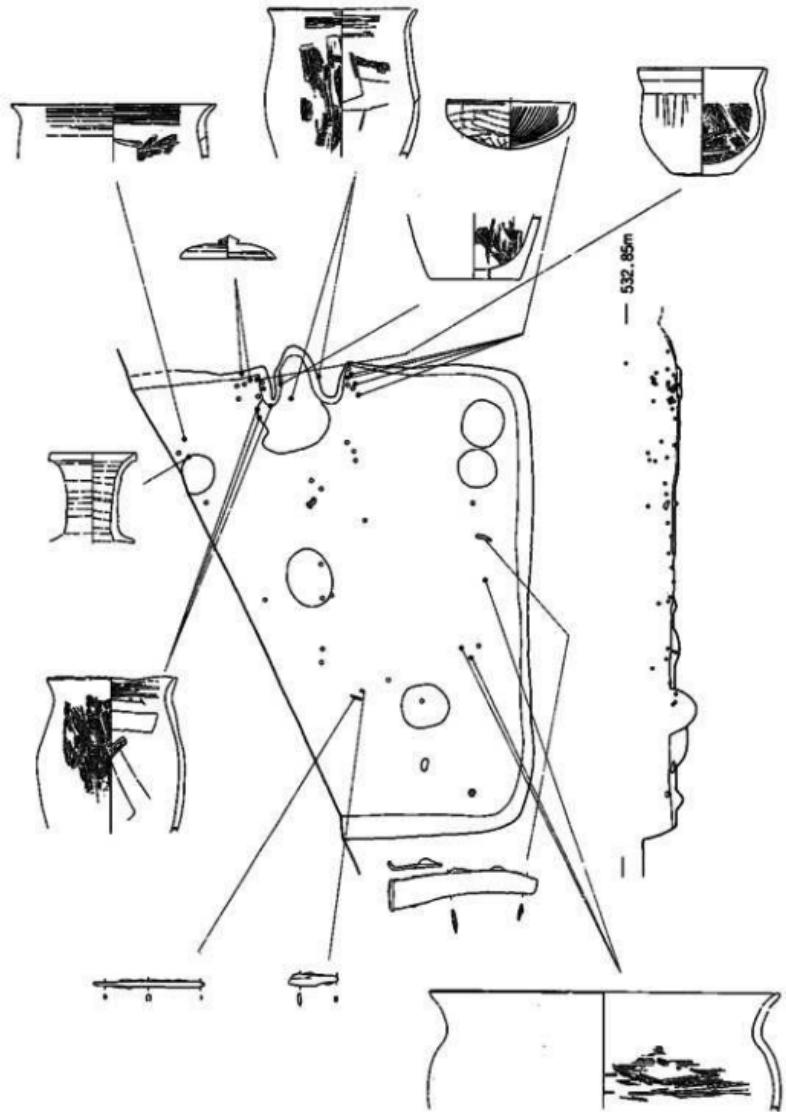
第17図 8号住居址



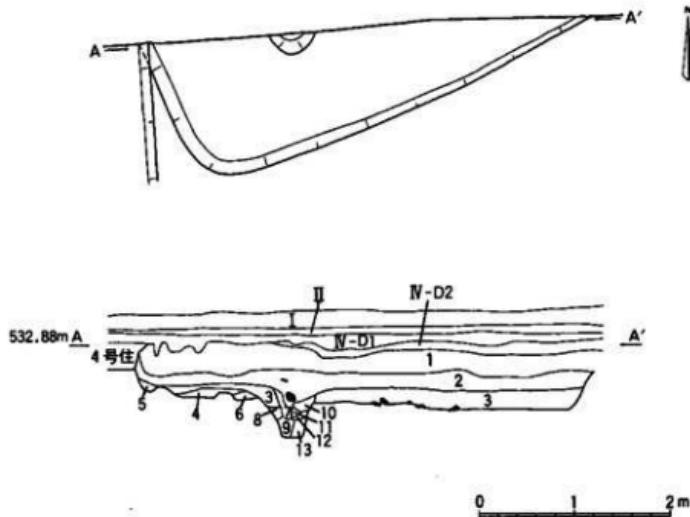
第18図 8号住居址ピット土層図



第19図 8号住居址カマド



第20図 8号住居址遺物出土位置図



I 表土

II 灰色土(床土) しまり良好、粘性あり。

IV-D1 明灰褐色土 しまり良好。粘性あり、指頭大の小石を少し含む。酸化鉄浸透。

IV-D2 灰褐色土 しまり良好。粘性あり、指頭大の小石を少し含む。マンガン浸透。

1 灰褐色土 しまり良好。粘性あり、マンガン浸透著しい。

2 灰褐色土 黏土、粘性あり、しまり良好(1よりしまりなく少し砂質)炭粒を僅かに含む。

3 灰褐色土 黏土、粘性あり、しまり良好、暗褐色土、黄褐色土小ブロックを多く含む。

4 灰褐色土 粘性あり、しまり良好、指頭大前後の小石を多く含む。

5 暗灰褐色土 粘性あり、しまり良好、黄褐色土小ブロックを含み、やや砂を含む。

6 暗灰褐色土 粘性あり、しまり良好。

7 灰褐色土 粘性あり、しまり良好、黄褐色、暗褐色土小ブロックを少し含む。

8 暗灰褐色土 粘性あり、しまり良好、黄褐色土小ブロックを少し含む。

(15, 17層に類似するが色は浅い、灰褐色に近い)

9 灰褐色土 粘性あり、しまり良好、黄褐色土小ブロックを僅かに含む。

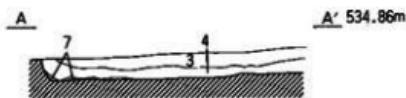
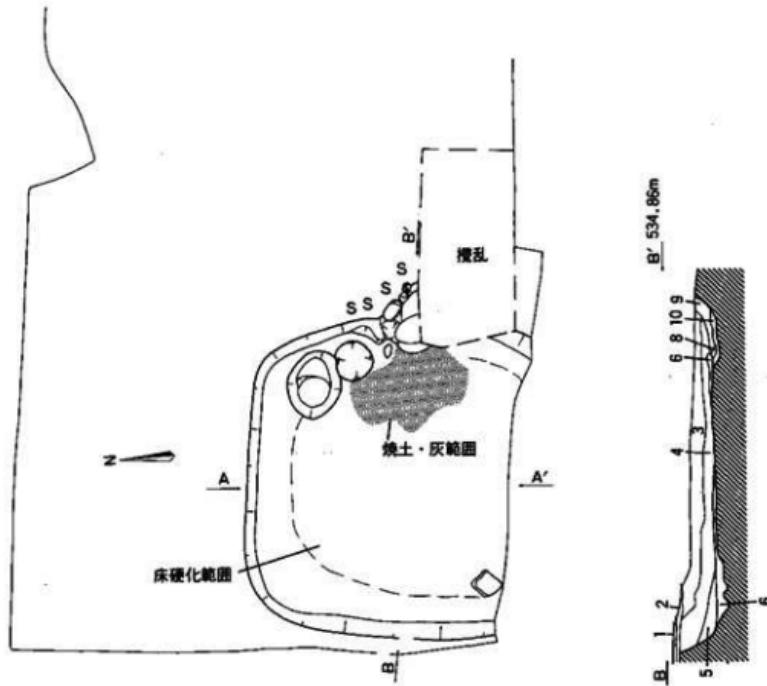
10 黄褐色土 粘性あり、しまり良好。

11 暗褐色土 粘性あり、しまり良好、黄褐色土小ブロックを少し含む。

12 黄褐色土 粘性あり、しまり良好。

13 暗褐色土 粘性あり、しまり良好、黄褐色土小ブロックを少し含む。

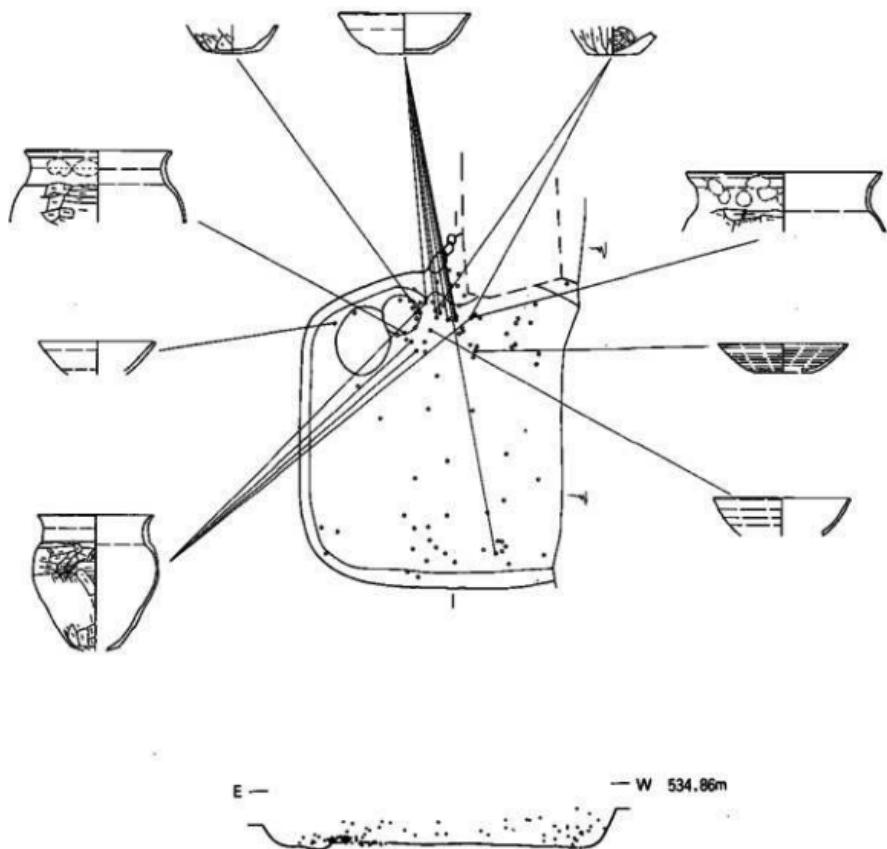
第21図 9号住居社



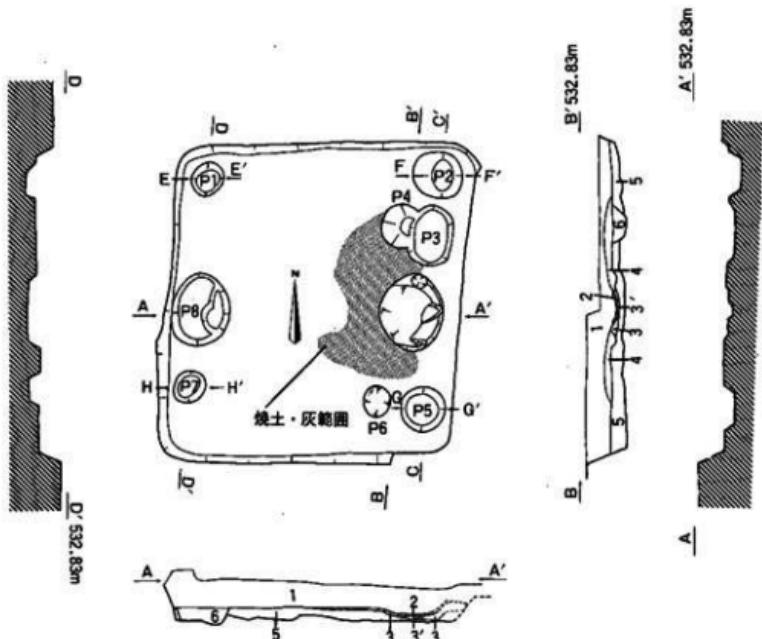
0 2m

- 1 青灰色砂礫（河川堆砂礫）
- 2 薄茶褐色土（灰色の小粒土混入、炭をわずかに含む）
- 3 淡茶灰褐色土（灰色の小粒土混入、炭・小礫を含む）
- 4 淡茶灰褐色土（小礫を3より多く含む。土器・炭を含む）
- 5 暗茶灰褐色土（砂質ぎみで土器・炭を含む）
- 6 暗茶灰褐色土（5層に類似。小礫を含む）
- 7 黒褐色土（炭粒・焼土粒より成る）
- 8 暗灰褐色土（砂質で焼土を僅かに含む）
- 9 暗茶褐色土（砂質で粘性あり。10より多く炭粒を含む）
- 10 暗褐色土（黄褐色土の小ブロックをわずかに含む、炭・焼土粒をわずかに含む）

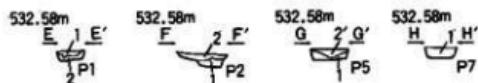
第22図 11号住居址



第23図 11号住居址土器出土状態図



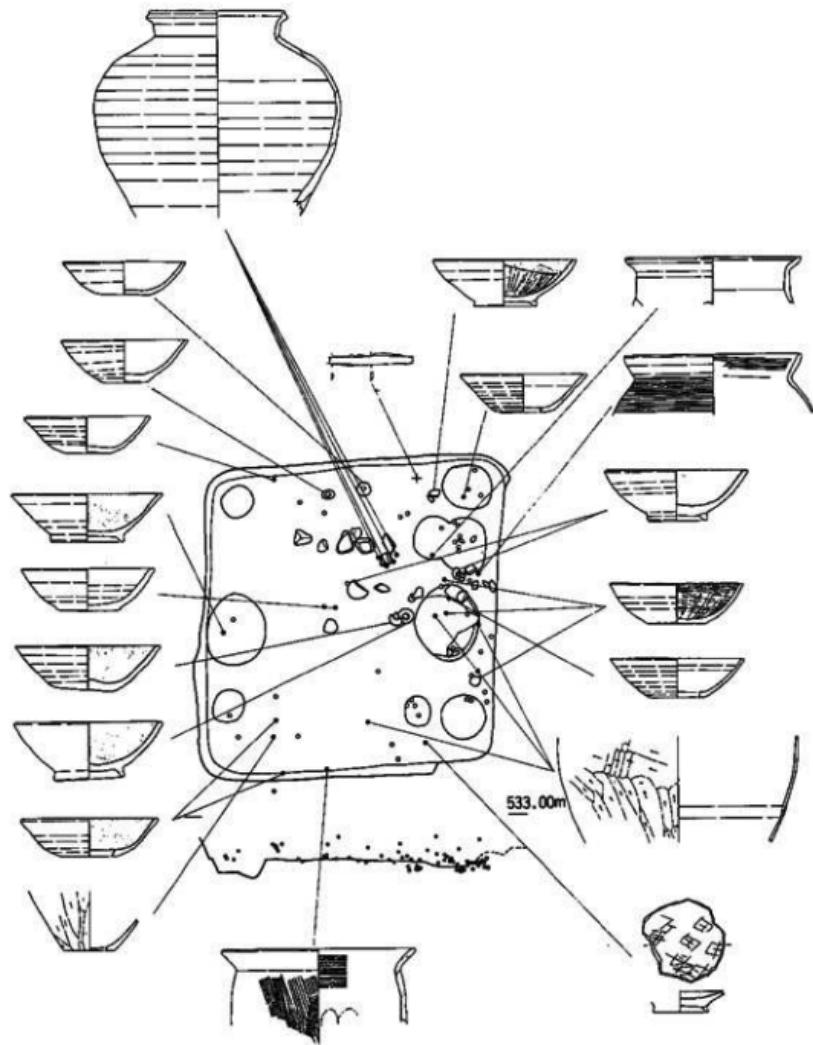
- 1 灰褐色土（炭粒わずかに含む）
- 2 暗赤褐色土（炭・焼土層）
- 3 黏土
- 3' 焼けた粘土
- 4 暗灰褐色土（炭を多く含む）
- 5 灰褐色土（しまりがあり、堅い・暗褐色土、黄褐色土塊粒を含む）（貼床）
- 6 灰褐色土、炭粒を多く含む。



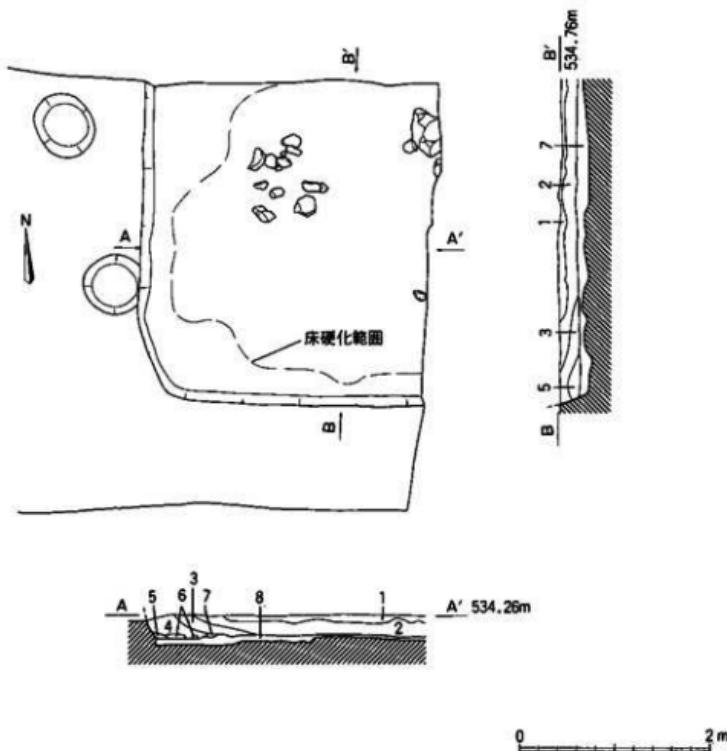
- 1 広褐色土（炭粒をわずかに含む）
- 2 暗灰褐色土（炭、焼土を含む）
- 2' 暗褐色土（2に比べて明るい）

0 1 2 m

第24図 5号住居址

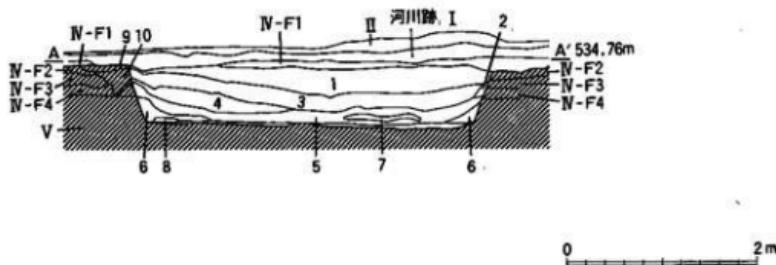


第25图 5号居住址遺物出土位置圖



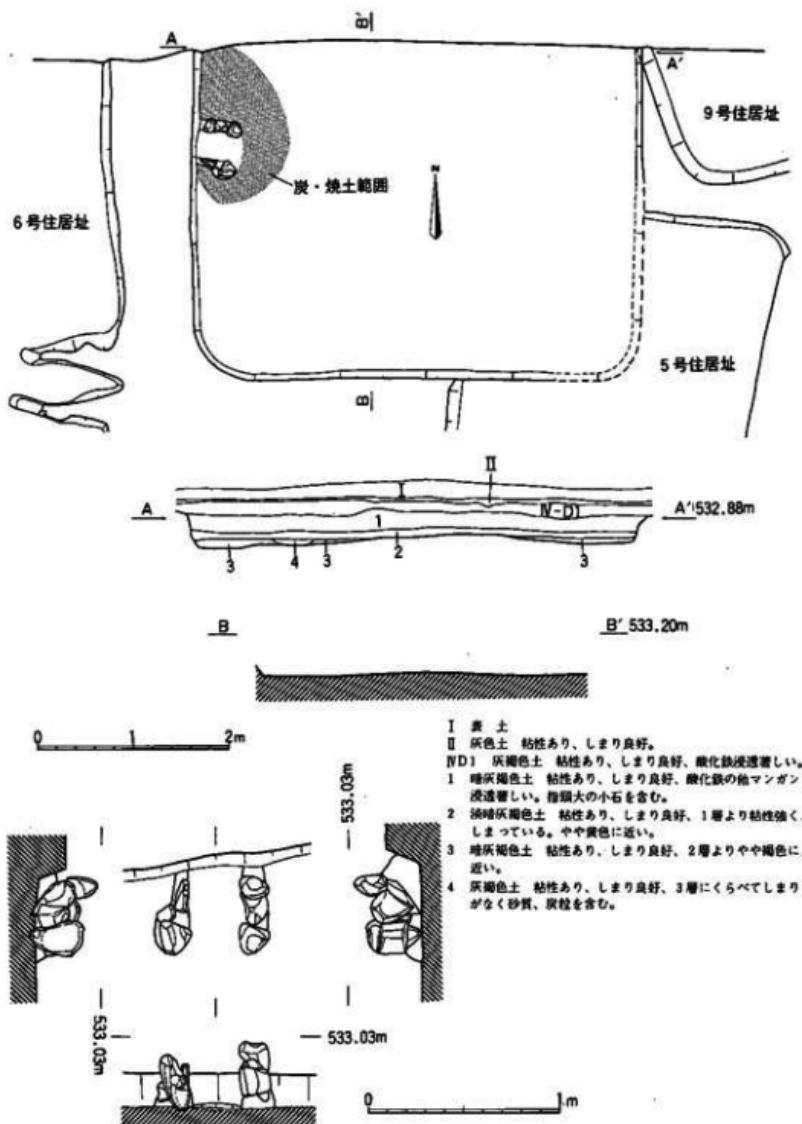
- 1 淡茶灰褐色土 鉄又マンガンの集積がみられ、灰色の小土粒及び流入土)
- 2 淡茶灰褐色土 鉄又マンガンの集積がみられ、土器・炭粒・焼土粒を含む。1に対し、しまりがなく又暗い)
- 3 淡灰茶褐色土 (鉄又マンガンの集積。土器・炭粒・焼土を含む)
- 4 淡灰茶褐色土 (3に類似。2に対し、やや灰色ぎみ、土器・炭・焼土を含む)
- 5 暗茶灰褐色土 (砂質ぎみ、暗褐色土・黄褐色土の混入土)
- 6 暗褐色土 (暗褐色土と黄褐色土のブロックから構成された土)
- 7 灰色砂 (しまりなし。)
- 8 暗褐色土 (貼り床、砂質でしまりなく、表面より1~2cmは硬化している)

第26図 12号住居址

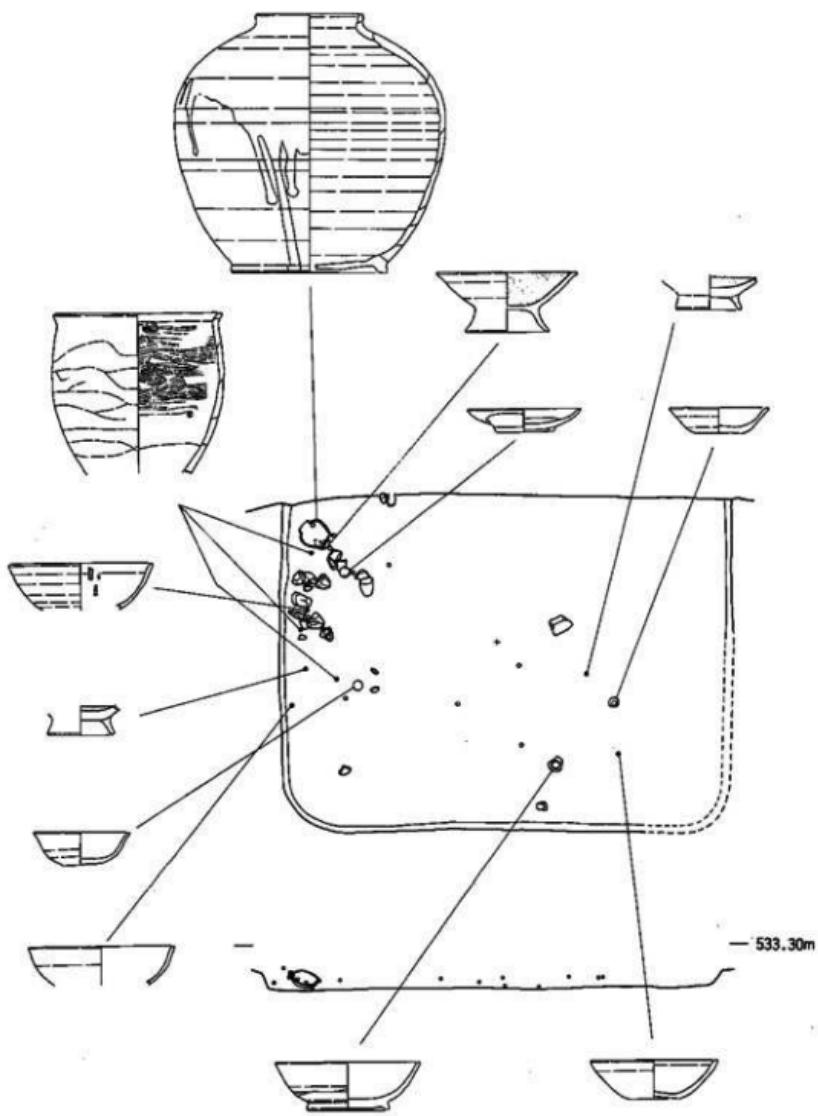


- I 現水田耕土
 II 暗灰褐色土（集積層）
 N-F1 薄黄灰褐色土
 1 淡黄灰褐色土（灰粒、土器片をわずかに含む）
 粘性なく、7層より黄味が強い。
 2 淡茶灰褐色土（1・2に類似、粘性をもつ）
 3 淡黄灰褐色土（砂質ぎみで粘性をわずかにもつ。炭粒、土器をわずかに含む）
 4 淡黄灰褐色土（微粒砂で5より粘性が強く、炭・土器を含む）
 5 薄茶灰色土（砂質ぎみで粘性をもつ。炭・焼土・土器を含む）
 6 薄茶灰色土（微粒で粘性をもつ）
 7 薄茶灰色土（暗褐色土のブロックを含む5より暗い）
 8 薄茶灰褐色土（粘土質で、カマドの袖に使用されたものと思われる）
 N-F2 淡茶灰褐色土（砂質ぎみでわずかに粘性をもつ）
 N-F3 淡茶灰褐色土（粘性があり、しまりがよわい）
 N-F4 黄灰褐色土（シルトぎみで、粘性強く、しまりがない）
 V 暗褐色土
 9 暗茶褐色土（しまりなく粘性をもつ。わずかに炭を含む）
 10 暗黄茶灰褐色土（砂質ぎみ、しまりあり）

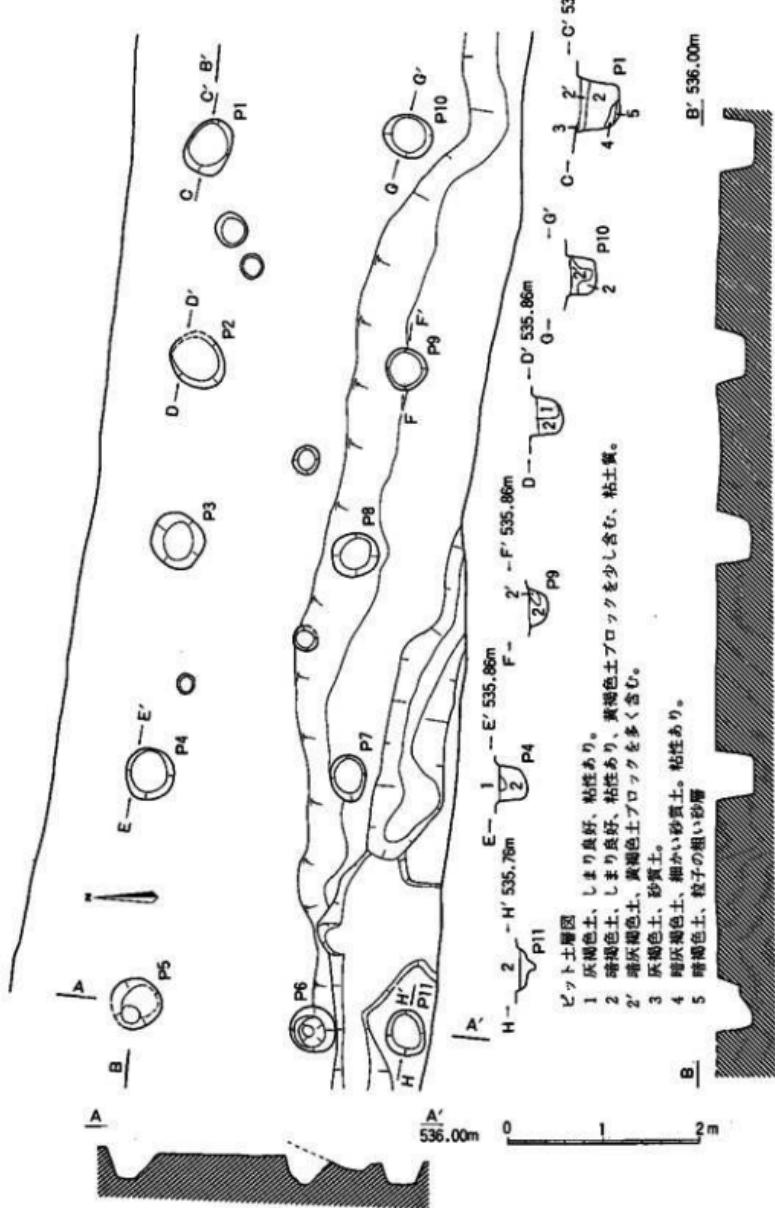
第27図 10号住居址平面図



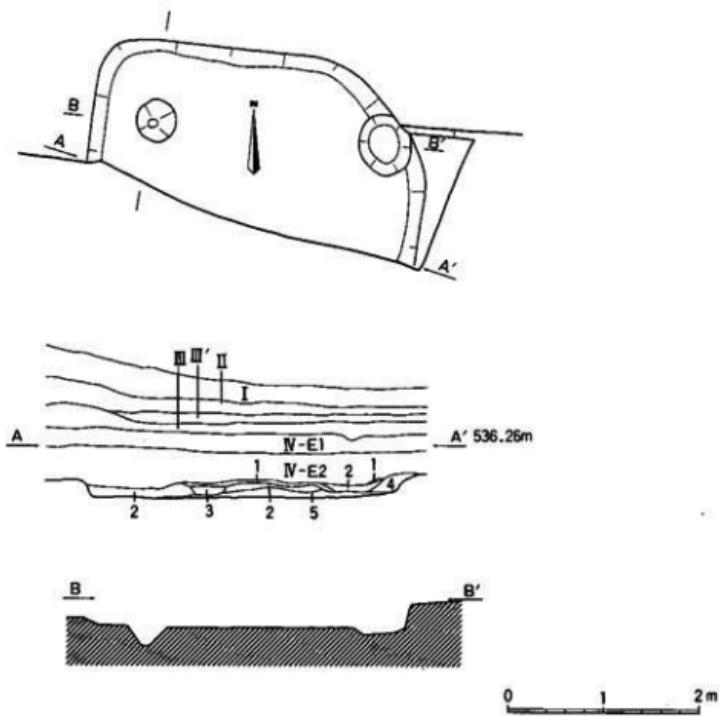
第28図 4号住居址・カマド



第29図 4号居住址遺物出土位置図

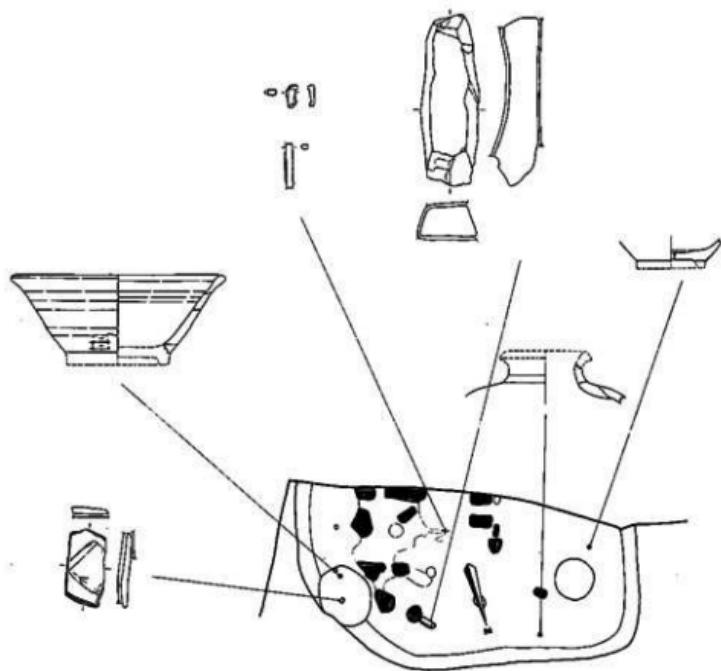


第30図 1号掘立柱建物址

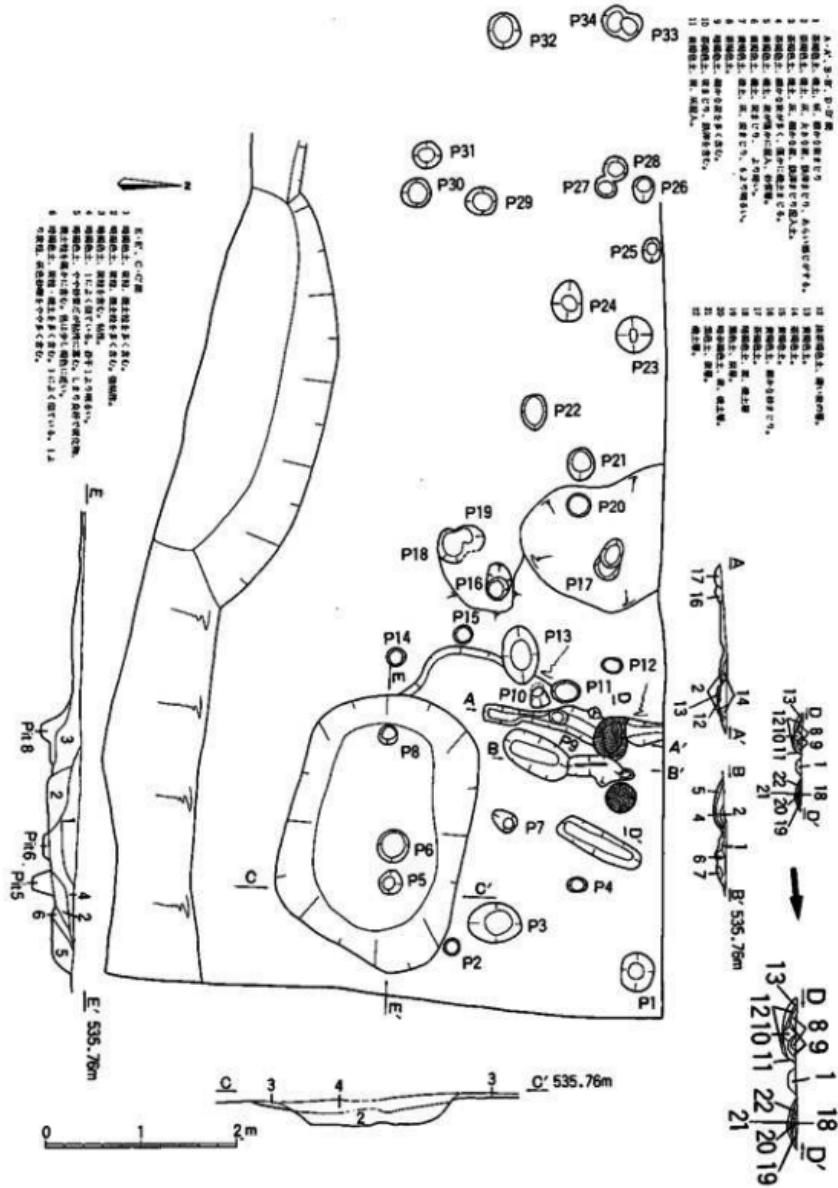


- I 表土（暗褐色土）
 II 青灰色土（床土）
 III' 暗褐色土（粘性が強く、しまり良好、指頭大の小石をわずかに含む。酸化鉄浸透）
 III 暗褐色土（粘性が強く、しまり良好、砂、指頭大の小石をわずかに含み、炭粒を多く含む）
 IV-E1 灰色土（粘性が強く、しまり良好。指頭大の小石をわずかに含む。酸化鉄浸透）
 IV-E2 暗褐色土（粘性が強く、しまり良好。指頭大～拳大の礫を多く含む。炭粒をわずかに含む）
 1 黒色土（炭化物を多く含む。炭化材層）
 2 灰褐色土（粘性が強く、しまり良好。炭粒をわずかに含む。指頭大の小石をわずかに含む）
 3 燃土層
 4 喀灰褐色土（粘性が強いが、わずかに砂粒を含む。礫（指頭大～拳大）を多く含む。）
 5 暗灰褐色土（粘性が強く、指頭大の礫をわずかに含む）

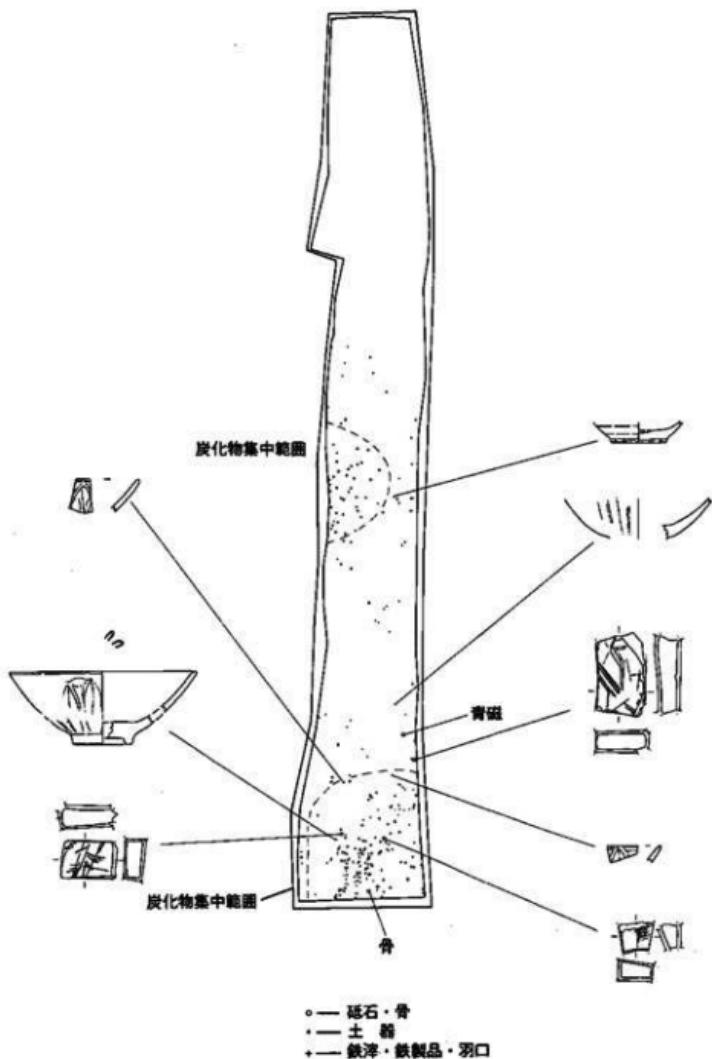
第31図 3号住居址



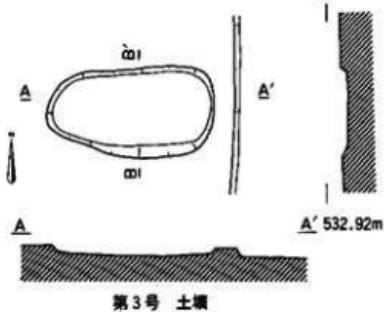
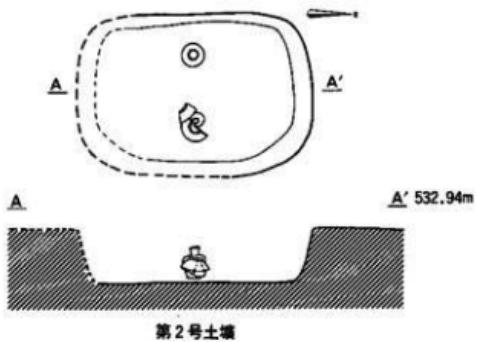
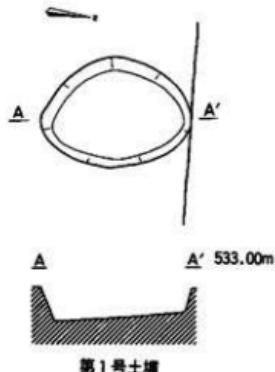
第32図 3号住居址遺物出土位置



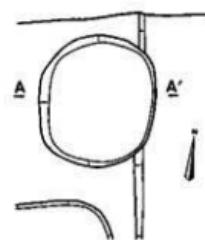
第33図 製鐵関係造構



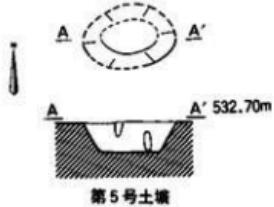
第34圖 E區遺物分布圖



0 1 m

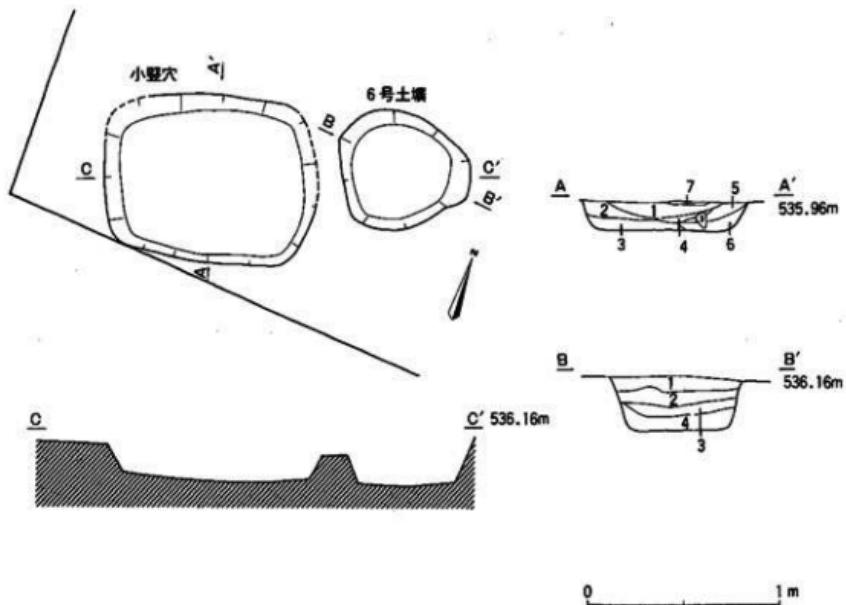


- 1 灰褐色土。しまり良好、粘性あり、炭粒、焼土粒を少し含む。
- 2 略灰褐色土。しまり良好、粘性あり、炭粒、焼土粒を少し含む。
(1より少い) やや砂質。



0 1 m

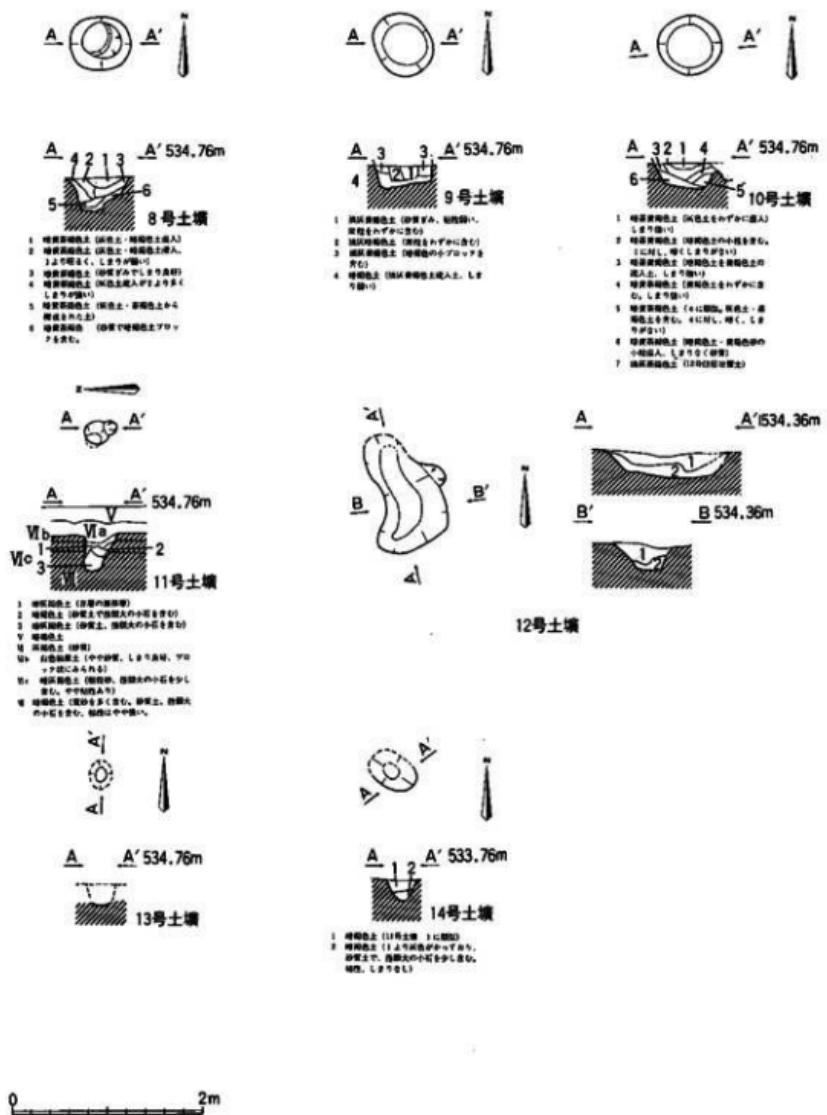
第35図 1～5・7号土壤図



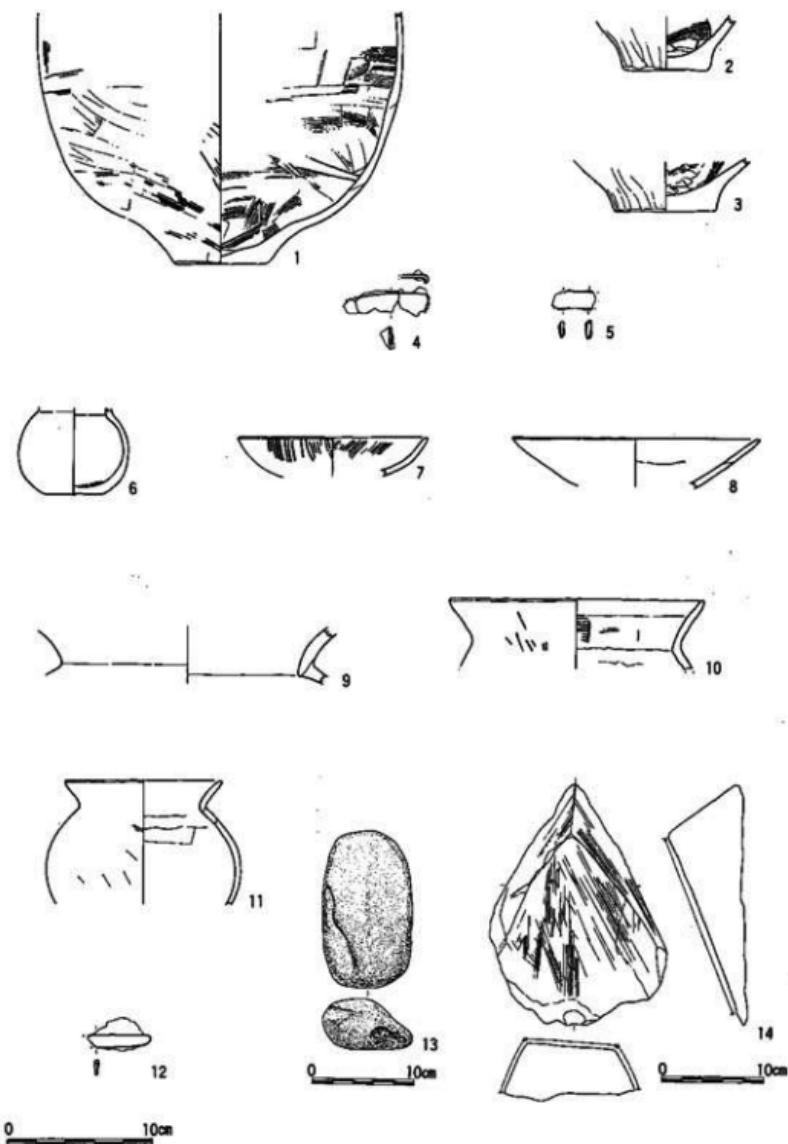
小豈穴

- 1 暗灰褐色土、粘性強く、しまり良好、5~10mm前後の小石を少し含む。
灰褐色土小ブロックを含む。
 - 2 灰褐色砂質土、粘性のある砂質土。
 - 3 暗褐色土、粘性が強く、しまり良好、やや砂質。
 - 4 炭化物、焼土層。
 - 5 灰褐色土、粘性があり、しまり良好、炭粒を少し含む。灰褐色土小ブロックを少し含む。やや砂質。
 - 6 暗褐色土、粘性が強く、しまり良好、粘土質。
 - 7 暗灰褐色土、粘性が強く、しまり良好、灰褐色土小ブロックは含まず。
6号土壤
- 1 暗褐色土、明褐色土粒を僅かに含む。炭粒を僅かに含む。
 - 2 暗褐色土、粘質、褐色土粘質灰色土塊粒を多く含む。炭粒僅かに含む。
 - 3 暗灰褐色土、砂質、灰色土粒を僅かに含む。炭粒僅かに含む。
 - 4 暗灰褐色土、砂質、粘質褐色土、粘质灰色土塊、粒を含む。2層より少ない。炭粒僅かに含む。

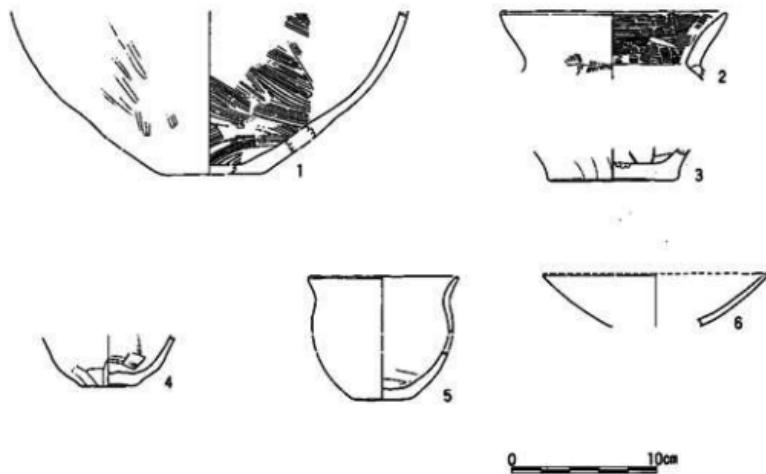
第36図 小豈穴・6号土壤



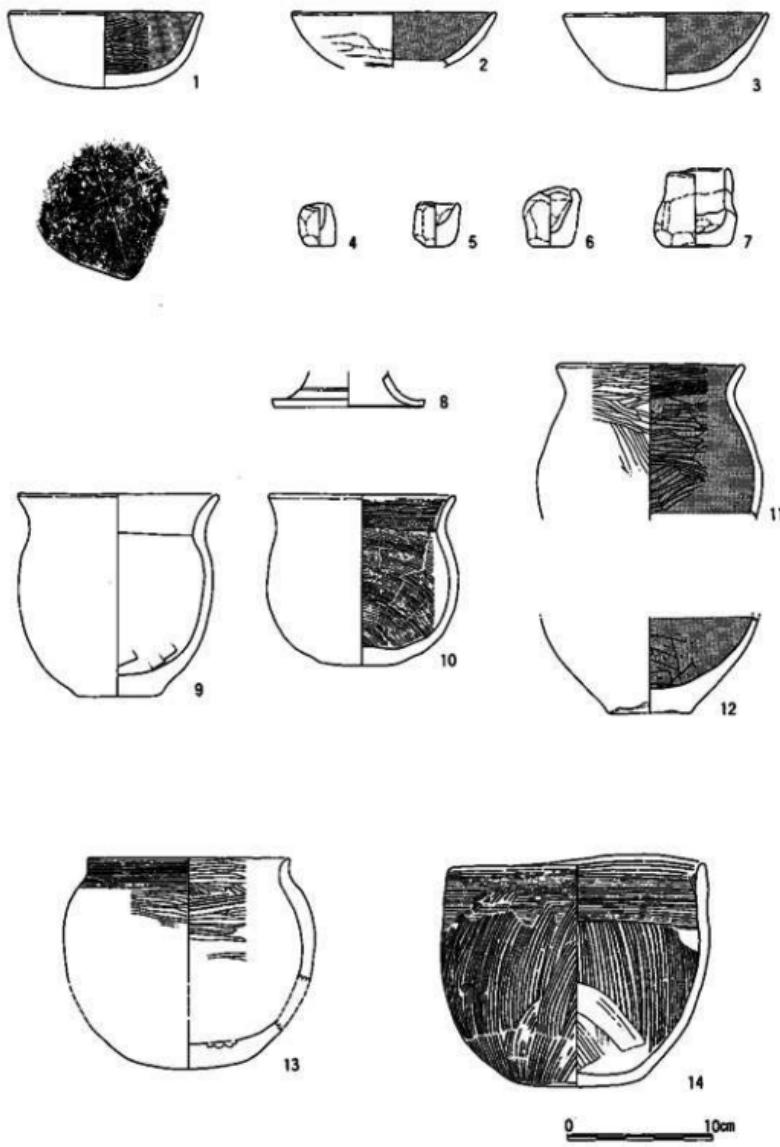
第37図 8~14号土壤平面図・断面図



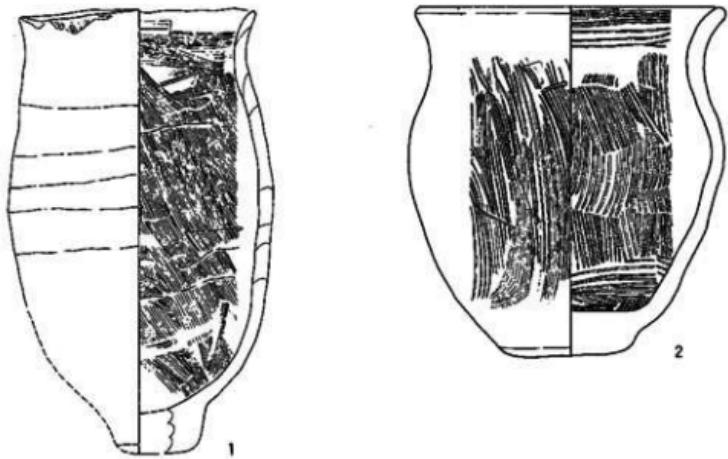
第38図 1～5 1号住居址、6～14 2号住居址出土遺物



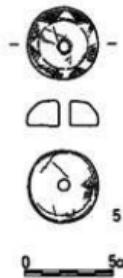
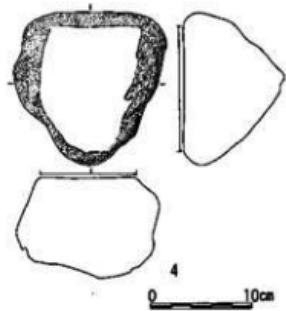
第39図 1～3：土器集中、4：炭化物集中出土、5：2号住居址出土、6：B区西河川址出土



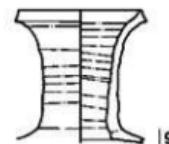
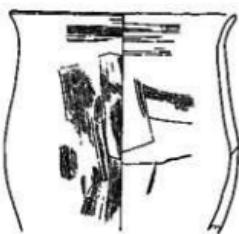
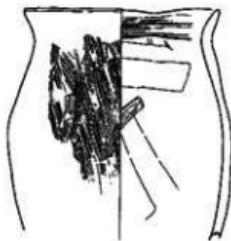
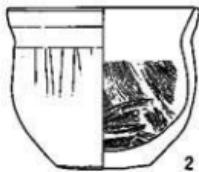
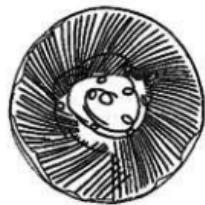
第40図 6号住居址出土土器



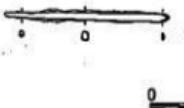
0 10cm



第41圖 1：6號住居址、2～6：7號住居址



10

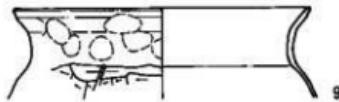
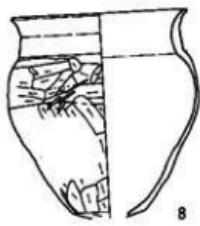
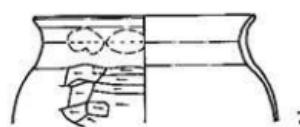
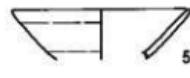
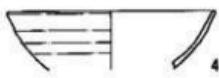
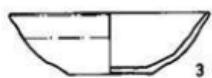


0 10cm



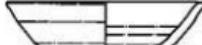
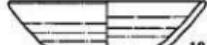
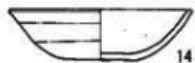
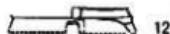
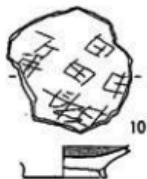
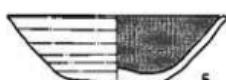
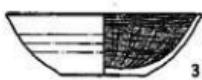
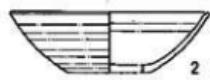
0 10cm

第42図 8号住居址出土土器・鉄器



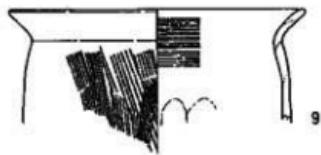
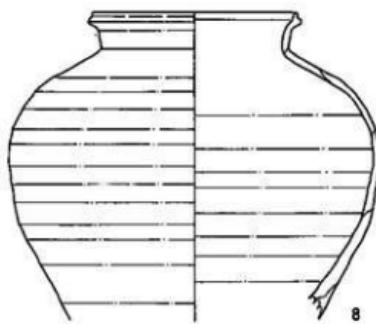
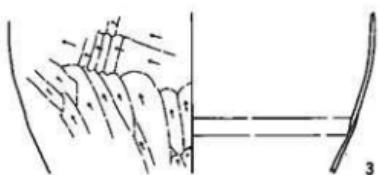
0 10cm

第43図 1. 2 : 9号住居址、3~11: 11号住居址



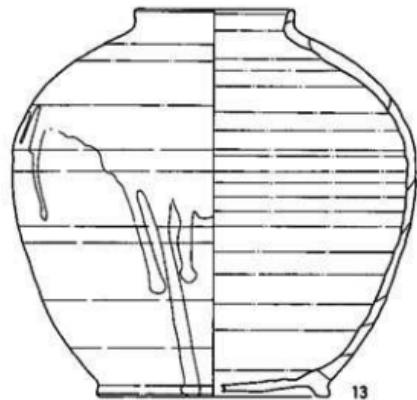
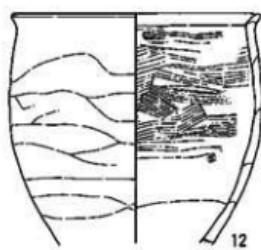
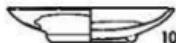
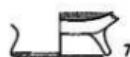
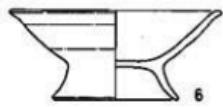
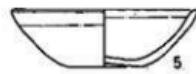
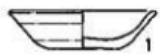
0 10cm

第44図 5号住居址出土土器



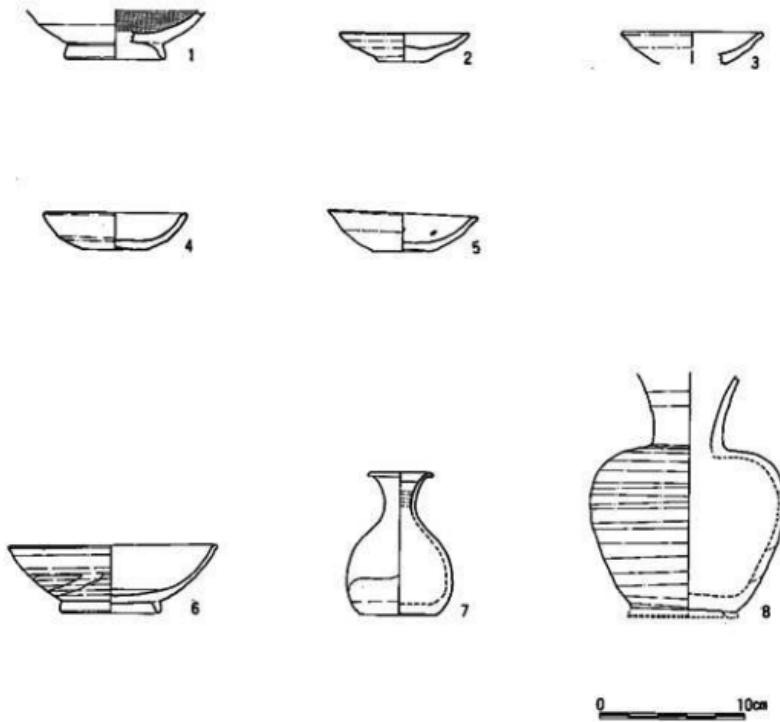
0 10cm

第45図 5号住居址出土土器

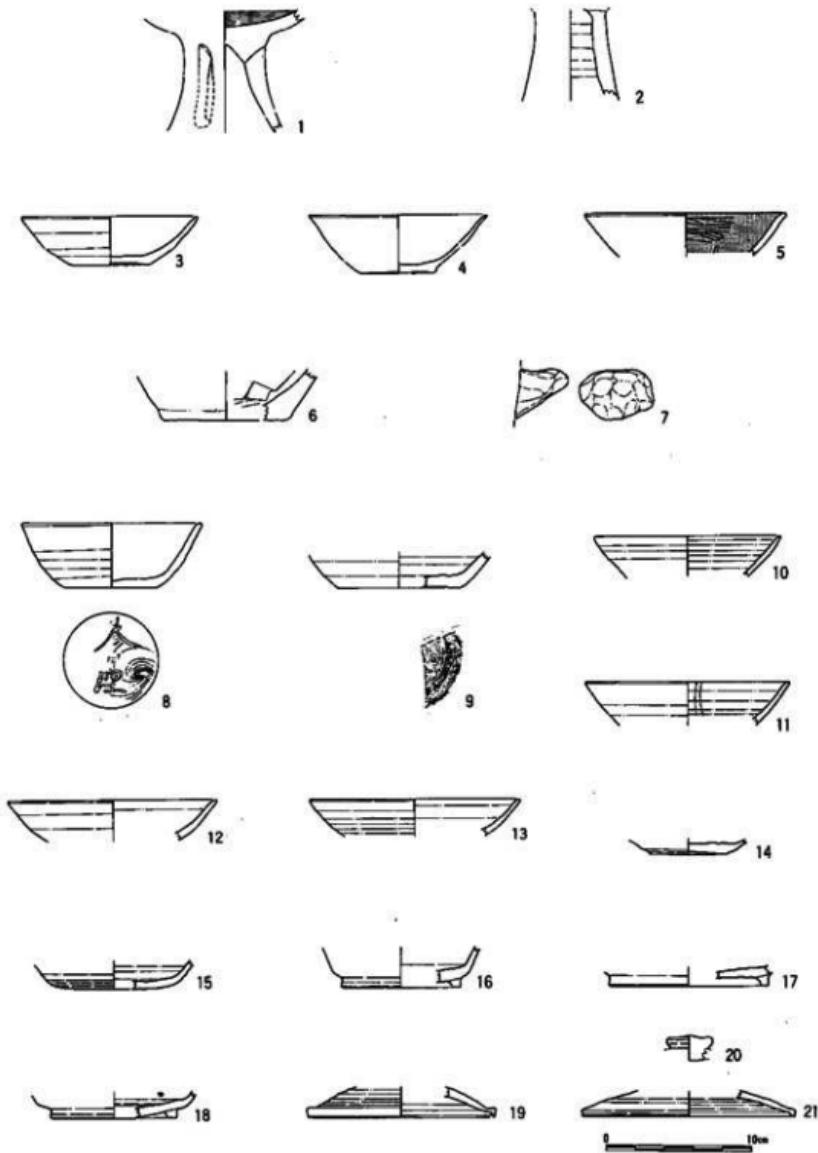


0 10cm

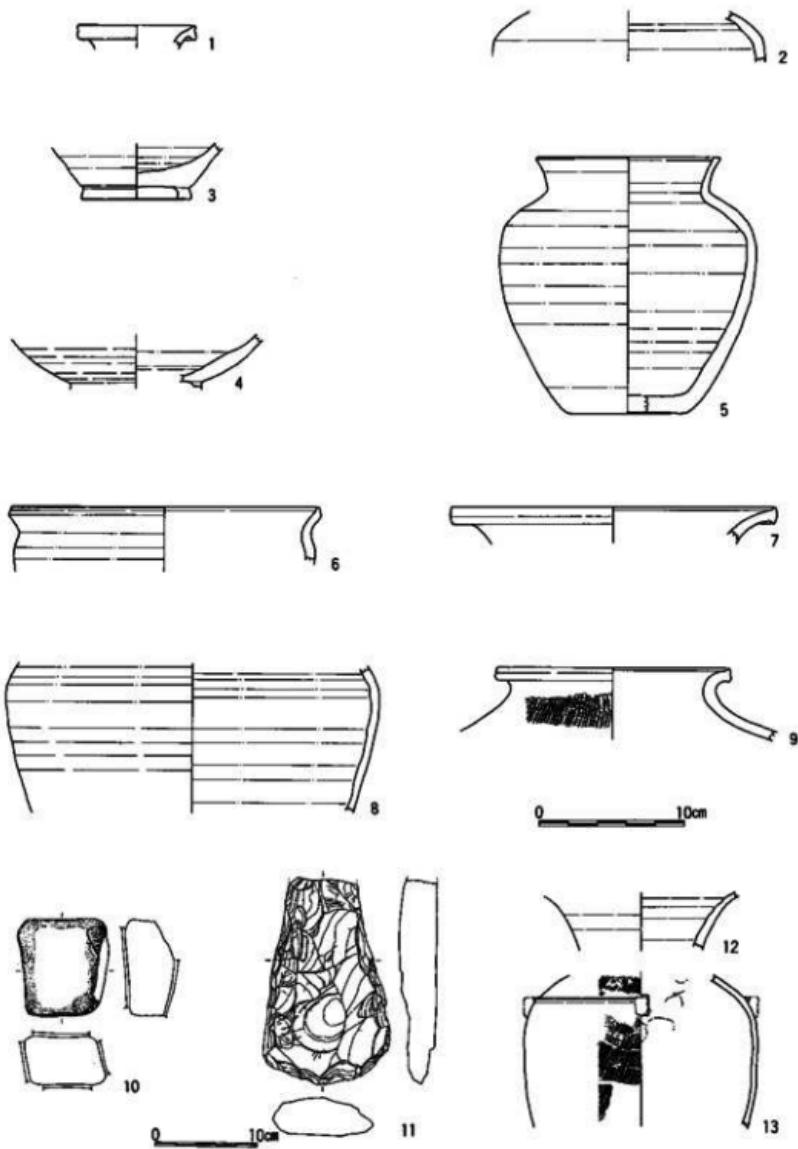
第46図 4号住居址出土土器



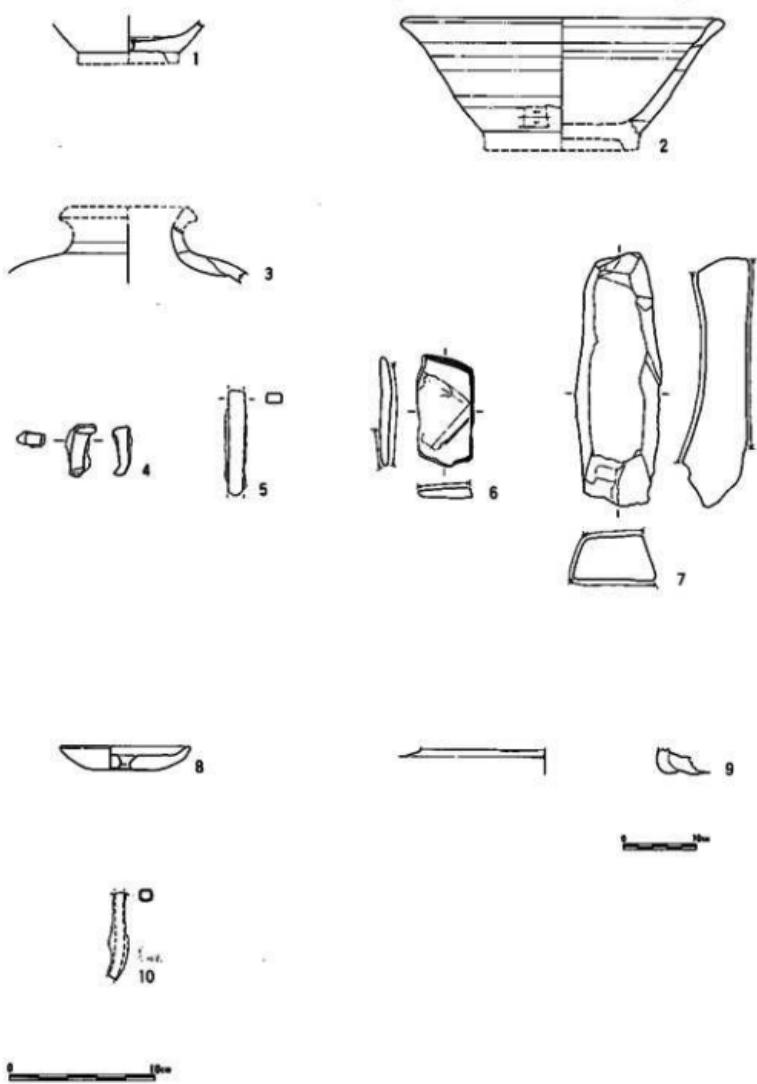
第47図 1～5：10号住居址、6～8：2号土壤



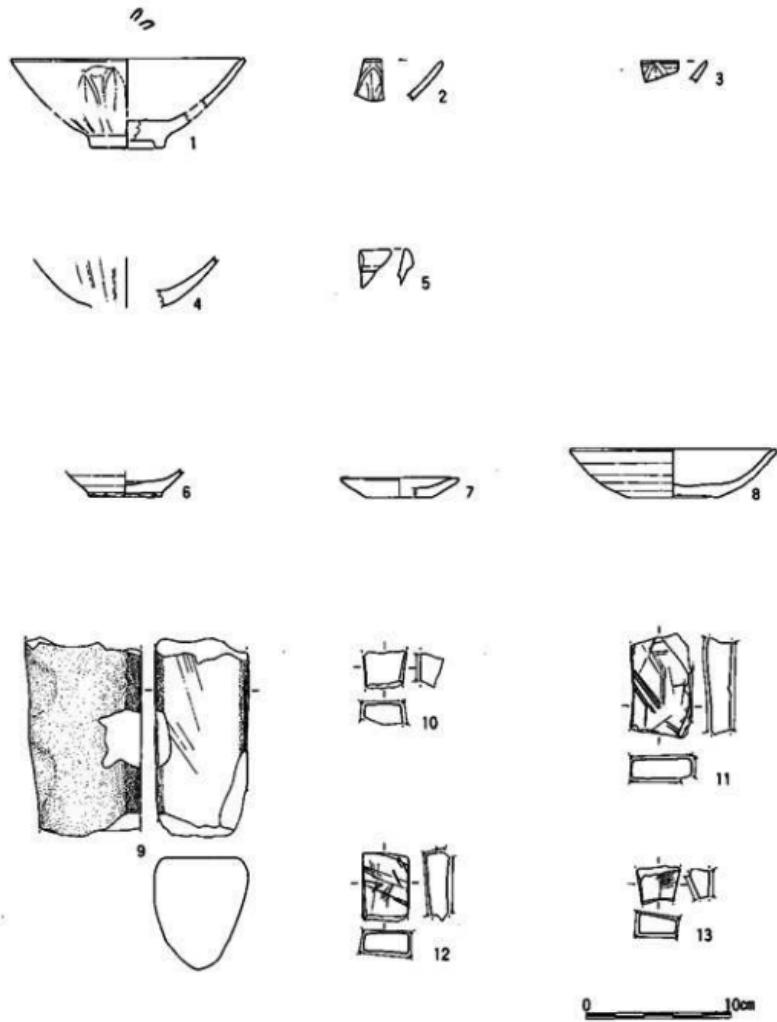
第48图 E区北河川址出土土器



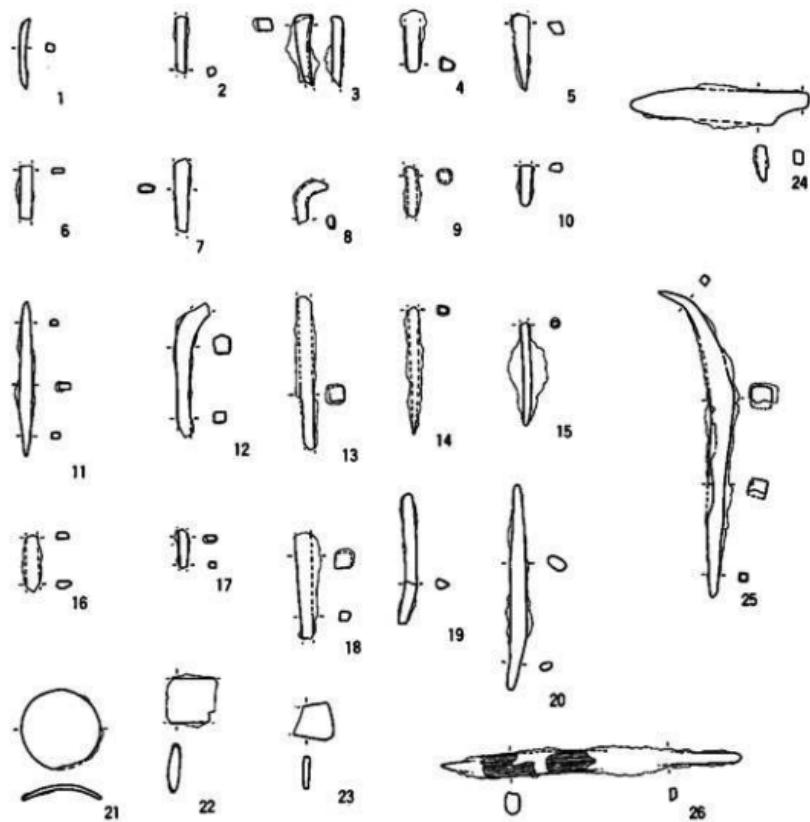
第49图 E区北河川址出土土器·石器



第50圖 1~7：3號住居址、8~10：E區南河川址



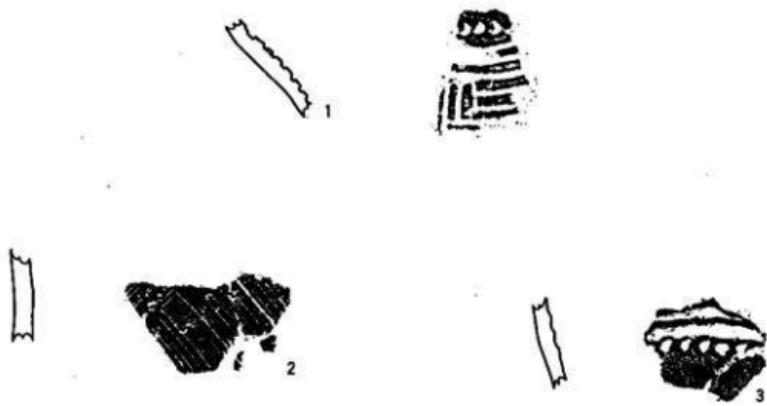
第51図 製鉄関係遺構及び、炭化物集中出土土器：砥石



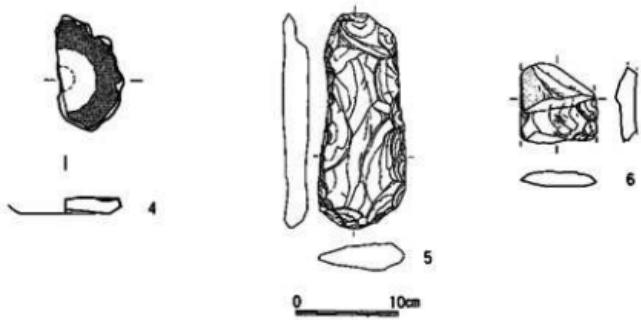
0 10cm

0 5cm

第52図 製鉄関係遺構及び炭化物集中、出土鐵製品



0 5cm



0 10cm



0 10cm

第53圖 造構外表探



1. 矢原地区 南より



2. A区 西より



3. B区 東より

図版1 矢原地区全景・調査各区



1. C区 西より



2. D-2区 東より



3. E区 東より

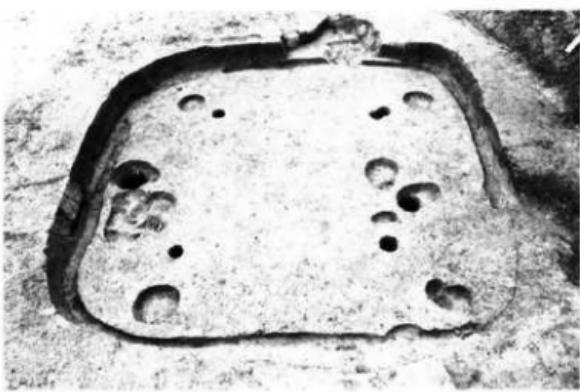
図版2 調査各区



1. F-1区 東より

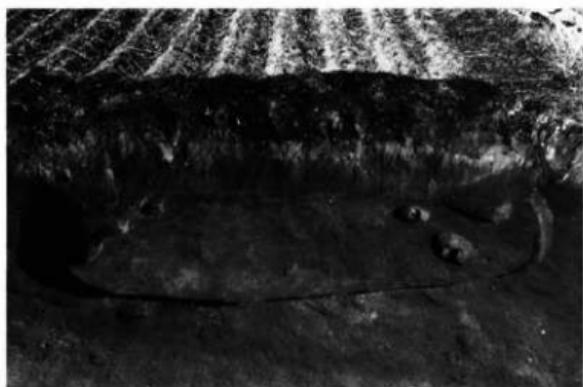


2. F-2区 東より



3. 1号住居址

図版3 調査各区・各遺構



1. 2号住居址 南より



2. 6号住居址 西より



3. 7号住居址 西より

図版4 遺構



1. 8号住居址 東より



2. 9号住居址 東より



3. 11号住居址 北より

図版5 各遺構



1. 5号住居址 西より

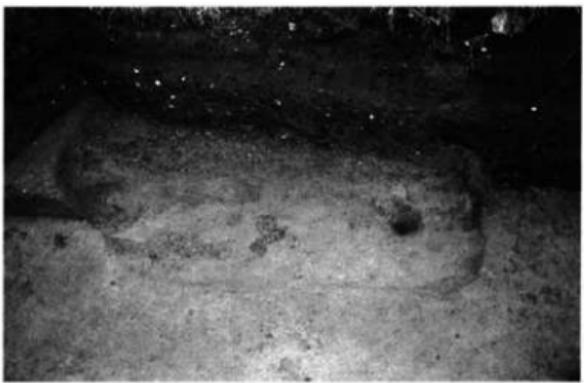
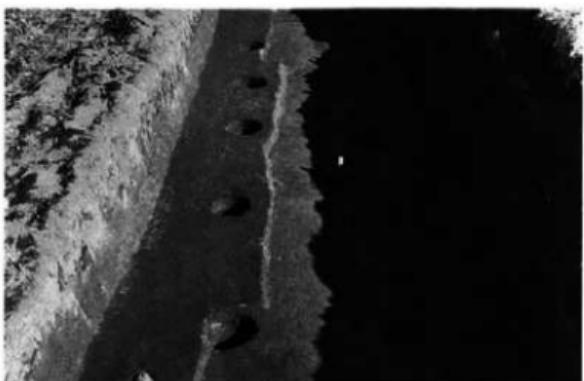


2. 12号住居址 南より



3. 10号住居址 北より

図版6 各遺構



図版7 各遺構



1. 製鉄関係遺構 東より

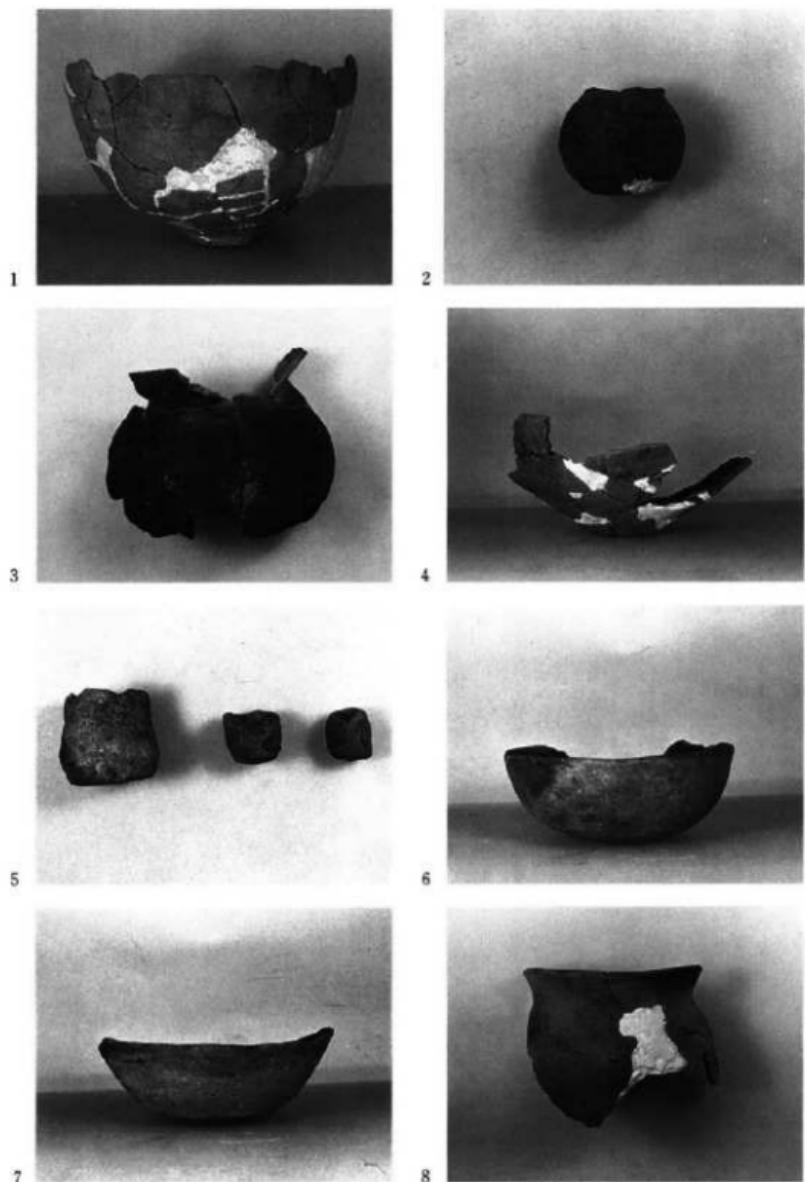


2. 記念撮影



3. 調査後の状況
B・C区間

図版8 各遺構・記念撮影・調査後の状況



図版9 出土遺物 (1 1号住居址、2・3 2号住居址、4 土器集中
5~8 6号住居址)



1



2



3



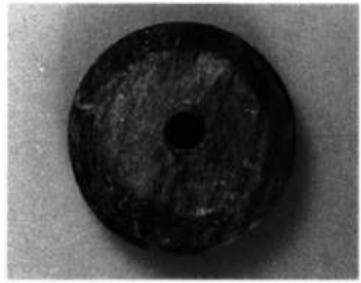
4



5



6



6



7

図版10 出土遺物（1～4 6号住居址、5～7 7号住居址）



1



2



3



4



5



6

図版11 出土遺物 (1 ~ 6 8号住居址)



1



2



3



4



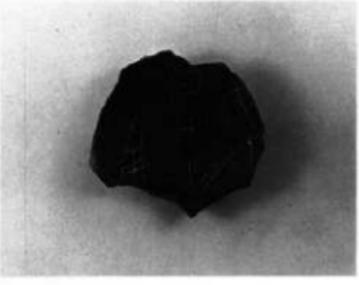
5



6

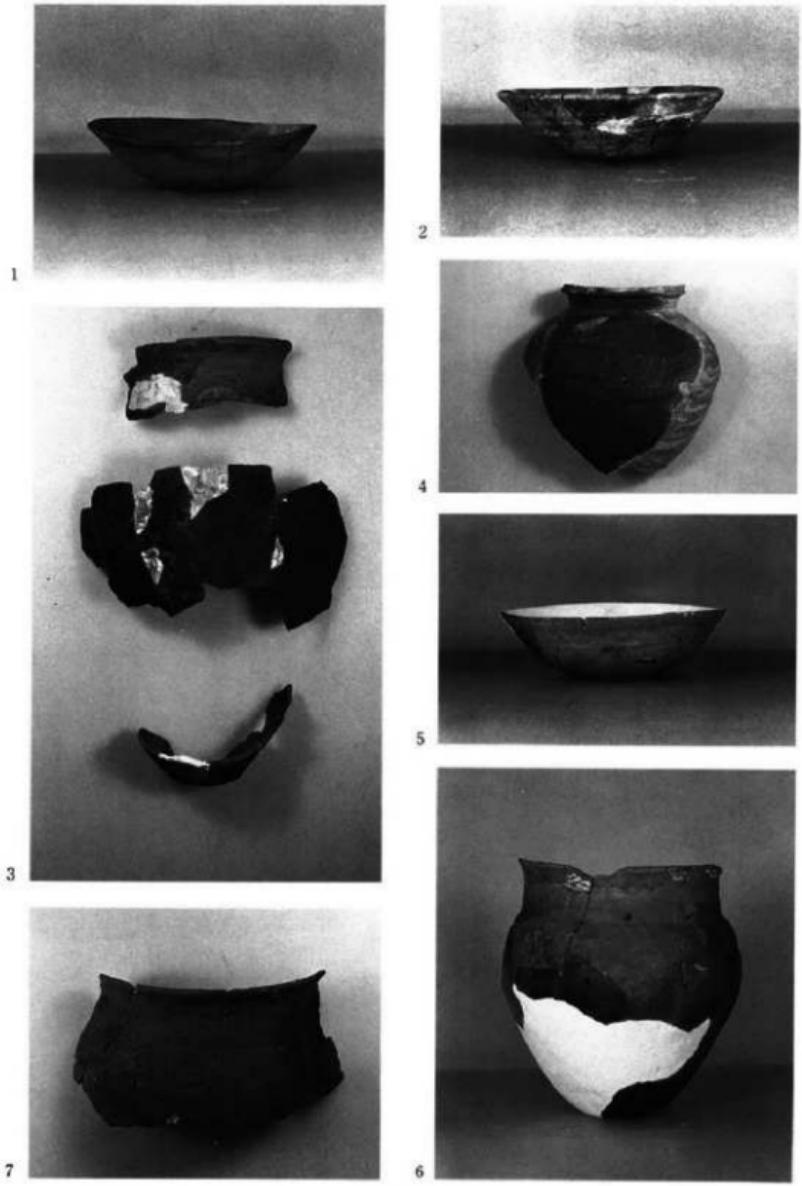


7

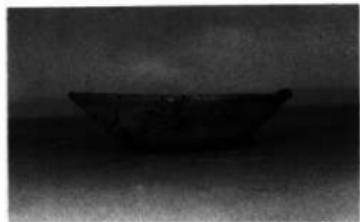


8

図版12 出土遺物（1～8 5号住居址）



図版13 出土遺物（1～4 5号住居址、5～7 11号住居址）



1



2



3



4



5

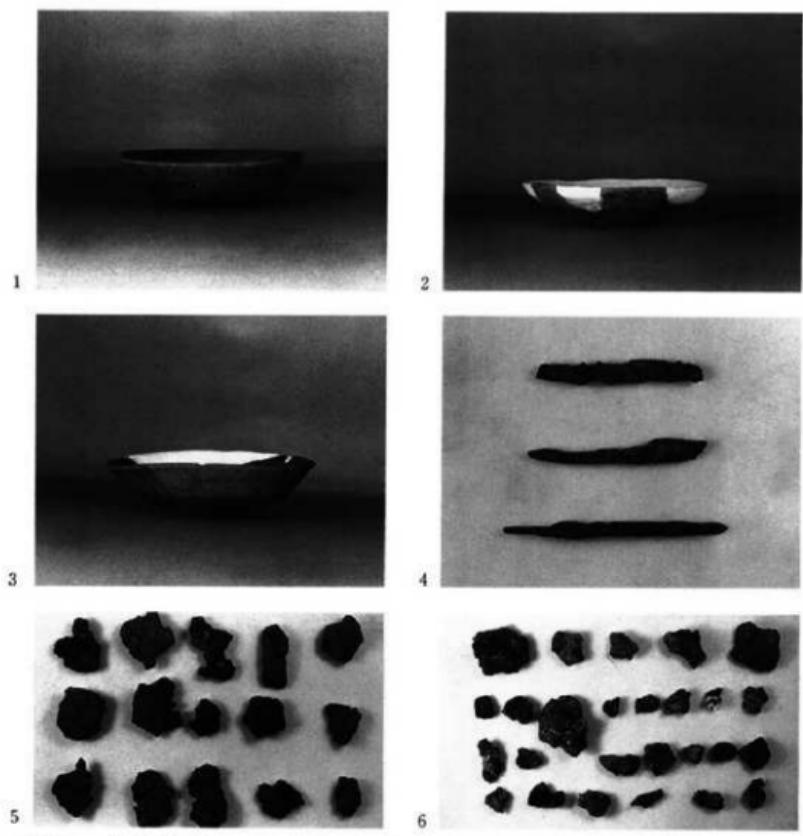


6



7

図版14 出土遺物（1～7 4号住居址）



図版15 出土遺物（1～3 10号住居址、4（上から5号、9号、8号住居址）、
5・6 製鉄関係遺構）



1



2



4



3



5



6

図版16 出土遺物（1～3 2号土壤、4 E区北河川址、5 出土土器（左より
7号住居址床下、D—2区、E区北河川址）、6 出土石器（左より2号住
居址、3号住居址、E区、7号住居址）

古墳時代～中世を主とした複合遺跡
矢原遺跡群
(馬場街道遺跡)

—県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う
緊急発掘調査報告(第3次調査) —

例　　言

1. 本書は昭和61年6月13日より7月7日にかけて行われた、穂高町大字穂高矢原に所在する矢原遺跡群馬場街道遺跡の第3次緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は、豊科建設事務所より委託を受け、穂高町教育委員会が調査を行ったものである。
3. 発掘現場での遺構の測量・実測は、寺島俊郎・市川謙之・杉村有子・山田行雄・林真基・上條芳敬・山下泰永が行った。
4. 写真撮影は、現場作業については山下泰永が行い、遺物については、林真基が行った。
5. 本書の執筆は山下泰永が中心となって行い、その分担は次の通りである。
第I章 事務局　　第II章 山下泰永　　第III章 山下泰永

6. 本書作成に関する作業の分担は次の通りである。
7. 遺構図トレース：山田行雄・林真基　　遺物実測・トレース：山下泰永
拓影：山下泰永　　土器復元：中村芳治・矢口秀雄・河名八郎・・福田伝・平川一男・杉村有子
8. 遺跡の立地・環境(歴史的環境・自然環境・周辺遺跡)については、第1次・第2次報告の箇所で述べてあるのでここでは改めて記していない。
9. 調査地区範囲については、第1次・第2次報告の箇所で示してある。
10. 本書で用いる方位は磁北である。
11. 本書の編集は事務局が行い、山下泰永が中心となった。
12. 出土遺物及び図類は穂高町教育委員会が保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査経過

第1節 調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査体制.....	1
第3節 調査日誌.....	2

第Ⅱ章 調査結果

第1節 遺跡の概要.....	4
第2節 遺構と遺物	
○第13号住居址.....	4
○第15号住居址.....	5
○土壤.....	6
第III章 調査のまとめ.....	12

挿 図 目 次

第1図 発掘調査遺構全体図.....	3
第3図 第14・15号住居址.....	8
第5図 土器実測図.....	10
第2図 第13号住居址・土壤.....	7
第4図 第16号住居址.....	9

表 目 次

第1表 土器観察表.....	11
----------------	----

図 版 目 次

第1図版 調査地近景.....	13
第3図版 第16号住居址.....	15
第5図版 出土土器2.....	17
第2図版 遺物出土状態.....	14
第4図版 出土土器1.....	16

第Ⅰ章 調査経過

第1節 調査に至るまでの経過

昭和61年4月15日、埋蔵文化財保護協議を実施。出席者、豊科建設事務所米山課長、同池田課長補佐、同中沢主任、町教委員会より丸山課長、山田主事、山下泰永（発掘調査担当者）豊科建設事務所において協議する。

5月16日 埋蔵文化財包蔵地馬場街道遺跡第3次発掘調査について（通知）

5月31日 埋蔵文化財包蔵地馬場街道遺跡第3次発掘調査委託契約を結ぶ。その概要は、現場における発掘調査は9月30日までに完了するものとする。発掘調査計画書には、発掘調査の目的及び概要で、開発事業高速道関連事業県道拡幅工事に先立ち195.0m²を発掘調査して記録保存をはかる。調査の作業日数としては、発掘作業15日、整理作業15日、合計30日。発掘調査委託費は、1,574,000円である。

第2節 調査体制

調査団長 内川清士（教育長）

調査担当者 山下泰永（町教委、長野県考古学会員）

調査員 寺島俊郎（長野県考古学会員）

市川隆之（ “ ” ）

森 義直（大町高校教諭、長野県考古学会員）

事務局 丸山繁芳（社会教育課長）

山田 上（社会教育係長）

宇留賀剛（事務局職員）

山田行雄（ “ ” ）

林 真基（ “ ” ）

小川里恵子（ “ ” ）

上条芳敬（ “ ” ）

寺島政吉（ “ ” ）

作業員 中村芳治 矢口秀雄 河名八郎 福田伝 平川一男 杉村有子

第3節 作業日誌

昭和61年6月13日 (金) 晴 機材準備搬入

6月14日 (土) 晴 D地区重機による堆土。

6月16日 (月) 曇後雨 D地区西側より遺構検出作業。午後雨天中止。作業員：福田他2名。

6月18日 (水) 晴 D地区遺構検出作業。13住検出。作業員：中村他4名。

6月19日 (木) 晴 D地区13住プラン確認。14・15住検出。土壤検出。作業員：平川他2名。

6月20日 (金) 晴 D地区13住掘り下げ。14・15住プラン確認。土壤掘り下げ。作業員：河名他5名。

6月21日 (土) 晴 D地区14・15住プラン確認、掘り下げ。作業員：矢口他4名。

6月22日 (日) 晴 D地区13・14・15住セクション引き

6月23日 (月) 曇 D地区13住セクション図、平面図作成。14・15住セクション図作成。

6月24日 (火) 曙後雨 D地区14・15住床面精査、平面図作成。遺物とりあげ。午後土器洗い。
杉村他3名。

6月25日 (水) 曙後雨 D地区14・15住清掃、写真撮影。午後雨天中止。作業員：中村他2名。

6月26日 (木) 晴 F地区重機による堆土。

6月27日 (金) 晴 F地区遺構検出作業。作業員：河名他2名。

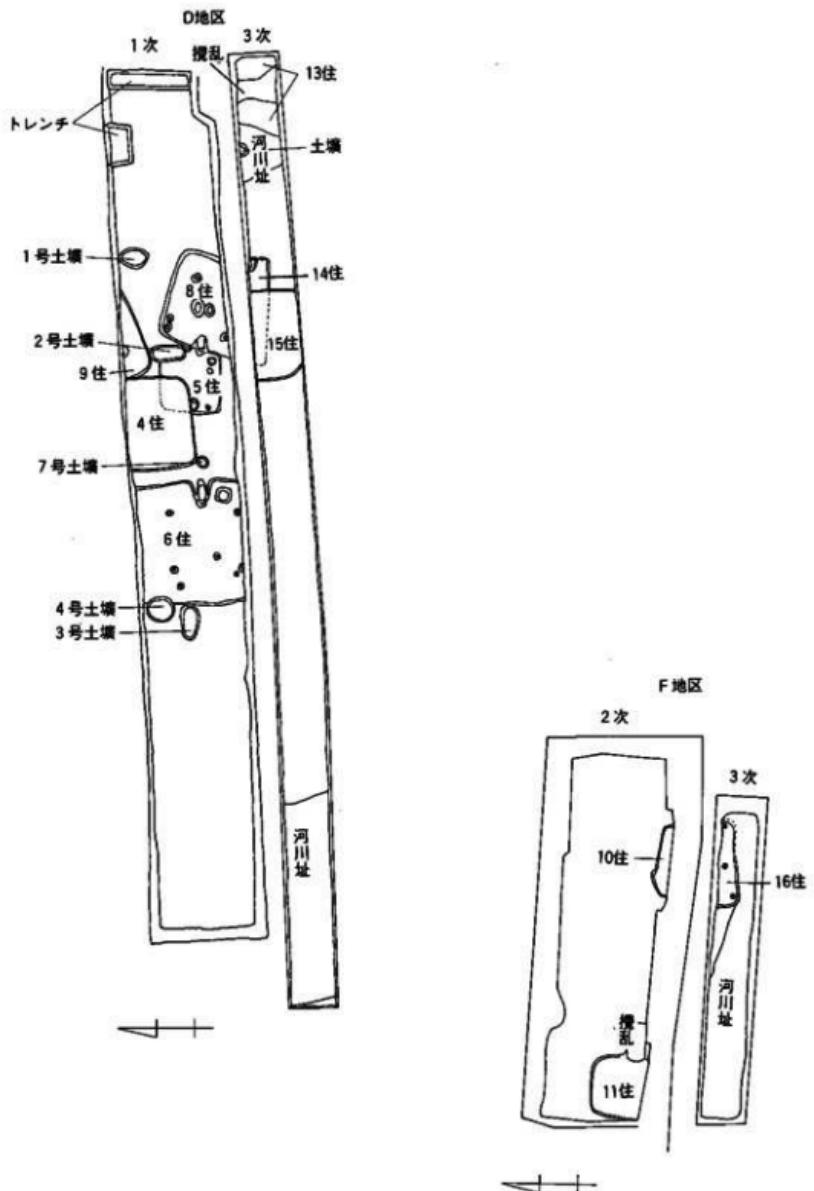
6月28日 (土) 晴 F地区遺構検出作業。16住検出。作業員：平川他3名。

7月1日 (日) 晴 F地区16住プラン確認、掘り下げ開始、平面図作成(上面)。作業員：福田他4名。

7月3日 (火) 晴 F地区16住掘り下げ。作業員：矢口他4名。

7月4日 (水) 晴 F地区16住床面精査、ピット掘り上げ、セクション図、平面図作成、写真撮影。作業員：杉村他4名。

7月7日 (土) 晴 機材撤収。



第1図 発掘調査構造全体図

0 5 10m

第II章 調査結果

第1節 調査の概要

今回の矢原遺跡群馬場街道遺跡第3次発掘調査は、県道柏矢町・田沢停線の拡幅工事（元道部分の再舗装等）に伴うものである。

発掘区域の設定は、馬場街道遺跡第1次・第2次発掘調査の結果を考慮し、D区（第1次）・F区（第2次）の南側元道部分「穂高町大字穂高804-9番地から大字穂高881-3番地」を、第1次・第2次発掘調査にならい、D区・F区とし行った。

その結果、D区において、奈良時代の住居址2軒、平安時代の住居址1軒、時代不明の土壙1基、F地区において、平安時代の住居址1軒を検出した。しかし、前述のごとく元道ということで、道路舗装に伴いバラスが深い所で50センチメートル程はいり、その為遺構上面が削られていたり、水道管敷設で擾乱を受けていたりと、遺構の遺存状態はきわめて悪かった。又、人為的な面以外にも、河川の氾濫と見られる砂利層がいたる所で遺構を切断しており、プラン不明瞭な箇所が多くみられた。

出土した遺物には、土器・鉄製品があるが量は少なく、全体でテンバコ1つ程度であった。土器には、土師器・須恵器・灰釉陶器がみられる。

第2節 遺構と遺物

第13住居址（第2図）

本址は、D地区の東端に位置する。カマドの大部分を含む住居址東端、北側及び南側は、発掘調査区域外にあり、西側は河川址に切られ、住居址は擾乱を受けている。その結果、カマド付近の焼土検出により初めて住居址であることが判るといった状況であった。したがって、本址の規模・平面形・壁の状態は不明である。覆土は道路舗装の際削られている為判然としないが、厚さ40cm程度と思われる。又、土色は基本的には淡黄褐色を呈す。床面東側は、河川址の上に粘性の強い茶褐色～黄褐色の土がわずかに貼られている。全体的に平坦であり堅さはそれほど感じられない。

カマドは東壁に設けられており、袖等の施設はもたないと思われる。

遺物は少なく、カマド周辺より内外面ハケ目を施す土師器甕片が出土したのみである。又、カマド内の焼土中より骨片が検出された。

本址の時代は、奈良時代と思われる。

第14号住居址（第3図）

本址は、D地区の東側に位置する。第15号住居址に切られ、調査区北壁にかかり検出された。カマドの一部を含む住居址大半は発掘調査区域外にある。規模は東西5.8mを測る。住居址南東隅はややかどばる。平面形は方形を呈すと思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は住居址上面が道路舗装の際削られている為はっきりとは判らないが、現存部分で40cm程である。覆土は暗褐色土で、床面は全体的に軟質であり暗黄褐色を呈し平坦である。

カマドは東壁やや南よりに設けられ、長さ約40cmの石を袖としていることから石芯カマドと思われる。焼土はカマド周辺より検出され、厚い所で34cmを測り、かなり長期にわたりカマドを使用していたことがうかがえた。カマド北半分が発掘調査区域外にあるためはっきりとしたことは言えないが煙道はないと思われる。

遺物は少なく、カマド付近より土師器甕片、底部にヘラ切り痕を残す須恵器杯片が出土している。

本址の時代は奈良時代と思われる。尚、当初本址を馬場街道遺跡第1次発掘調査における第8号住居址の一部と考えたが、第8号住居址のカマドは西側に位置することなどから、同一住居址か否かは判断できなかった。

第15号住居址（第3図）

本址は、D地区の東側に位置する。第14号住居址を切り、調査区北壁・南壁に住居址両端がかり検出された。規模は東西約4.8mを測る。住居址南西隅はまるく、平面形は不整形を呈すと思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は第14号住居址同様、住居址上面が削られている為はっきりとは判らないが現存部分で20cm程である。覆土は茶褐色土粒混入淡褐色土である。床面は暗褐色土を呈し軟質で平坦である。又、住居址中央覆土上層から下層にかけて炭化物が多く検出された。

カマドは調査区域内は存在しなかった。

遺物はさほど多くはなく、覆土上層から下層にかけてみられ、特に炭化物出土地点及びその南西より、土師器・須恵器・鉄製品が出土した。器種は土師器では甕・小形甕・内面黒色処理を施した杯、須恵器では無台の杯・有台の杯・甕・四耳甕がある。いずれも破片であり完形品はない。尚、土師器甕には器壁をヘラ削りをし薄く仕上げたものがある。又、須恵器杯に墨書き土器が1点みられた。鉄製品は小片の為なんであるかは不明である。

本址の時期は10世紀前後と思われる。

第16号住居址（第4図）

本址は、F地区の東端に位置し調査区北壁にかかり検出された。住居址の北側大部分は調査区域外にある。又、住居址南壁の一部・東壁は河川址に削られている。規模は東西約4.3mで隅九方

形を呈すと思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は検出面上層が河川址であったため削られている可能性も考えられるが現存部で30cm程度である。覆土は基本的には粘質灰色土である。床面は茶褐色を呈し、西側半分がやや高く堅くしまっていた。ピットは、P₁ (28×27×29cm)、P₂ (32×28×26cm)、P₃ (23×21×38cm) と3箇検出され、いずれも主柱穴と考える。

カマドは調査区域内には存在しなかった。

遺物は少なく、覆土上層より土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。器種は土師器では甕・内面黒色処理を施した壺、須恵器では無台の壺、灰釉陶器では皿・瓶がある。すべて破片で完形品はなかった。

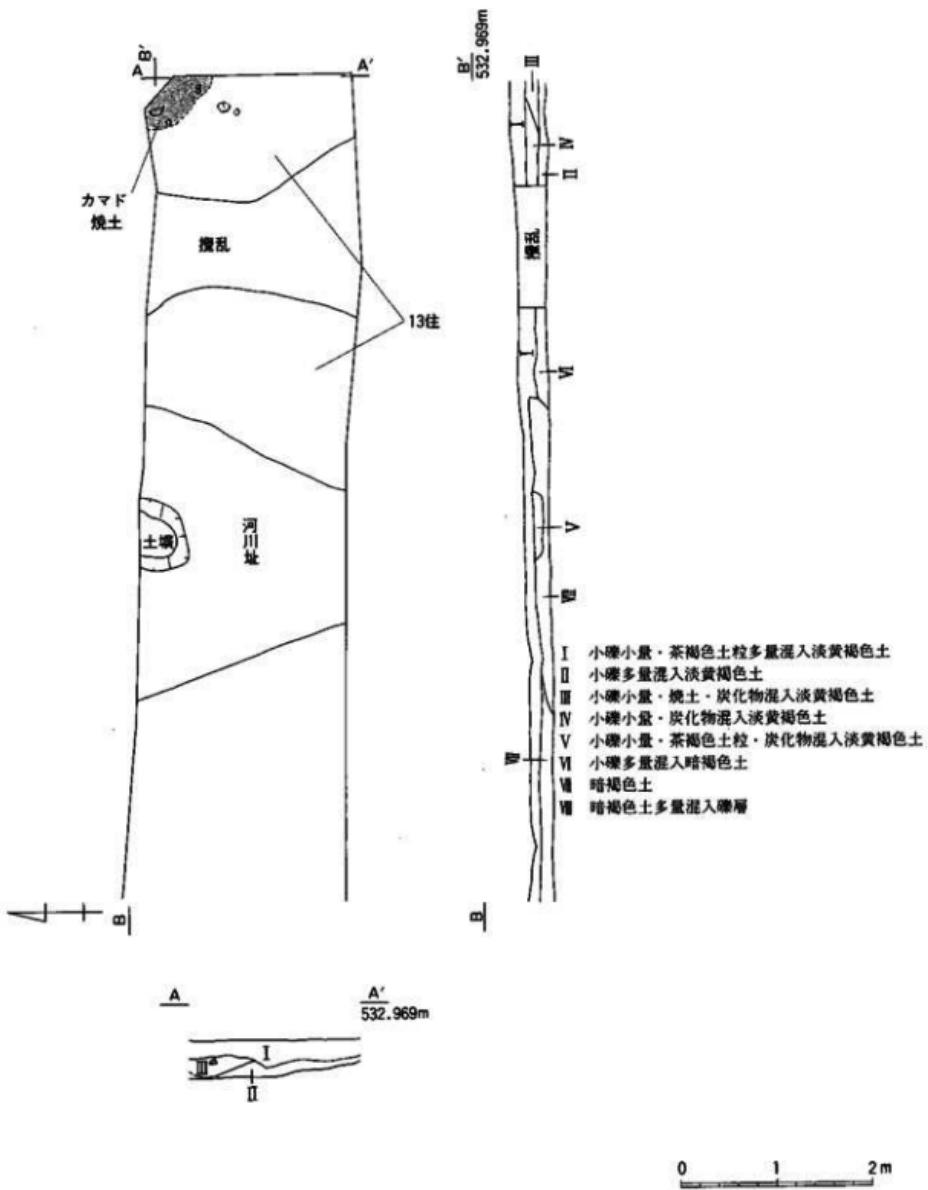
本址は、馬場街道遺跡第2次発掘調査における第10号住居址の一部である可能性が強いが、第10号住居址よりわずかに大きい点、河川の氾濫等の関係で土層が異なる点より、便宜上第16号住居址とした。

本址の時期は10世紀後半と思われる。

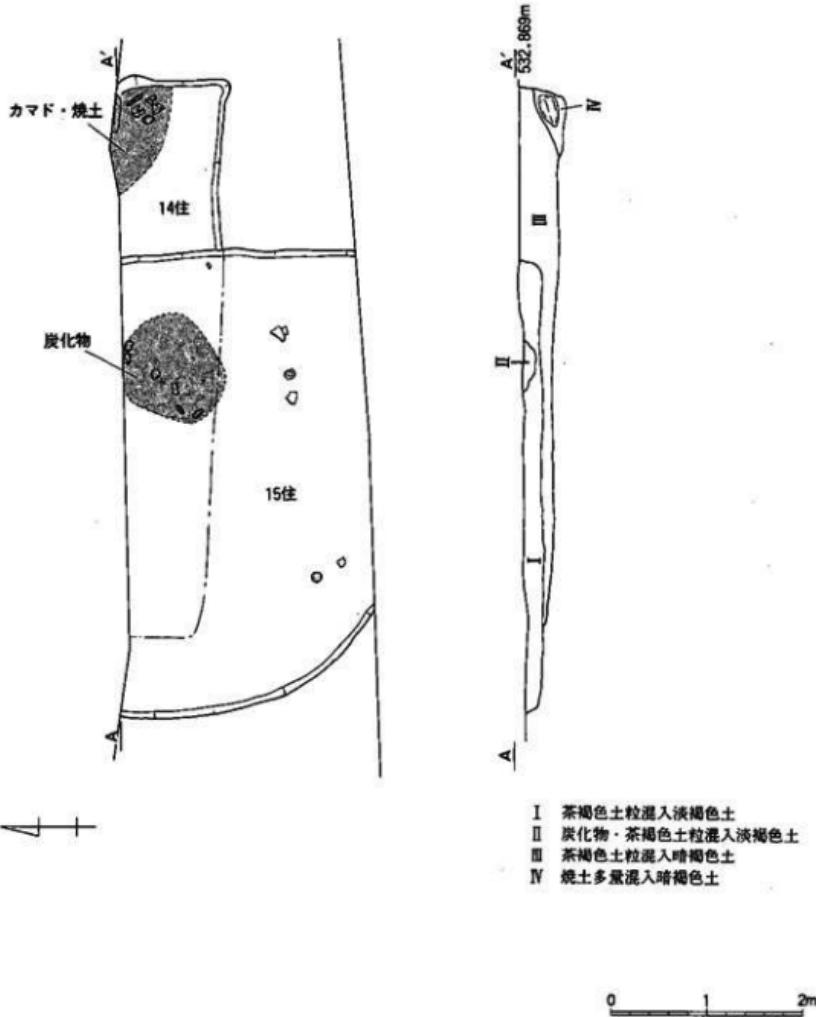
土壤（第2図）

本址は、D地区東側に位置し、第13号住居址西側河川址を切る。土壤北側半分は調査区域外にある。暗褐色土多量混入疊層（河川址）に掘り込まれており、小砾少量・茶褐色土粒・炭化物混入淡黄褐色土の覆土をもつ。規模は東西約75cmで深さは約10cmと浅い。平面形は不整円形を呈す。

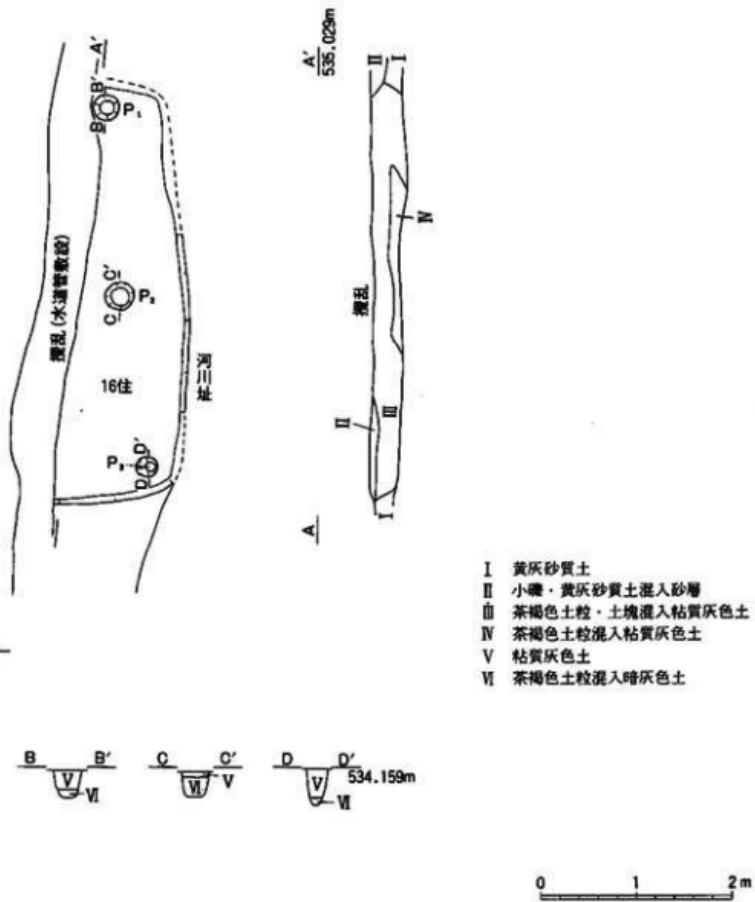
遺物がまったく検出されなかっただ為、本址の時期は反断できないが、河川址を掘り込んでいることから、奈良時代以降のものと思われる。



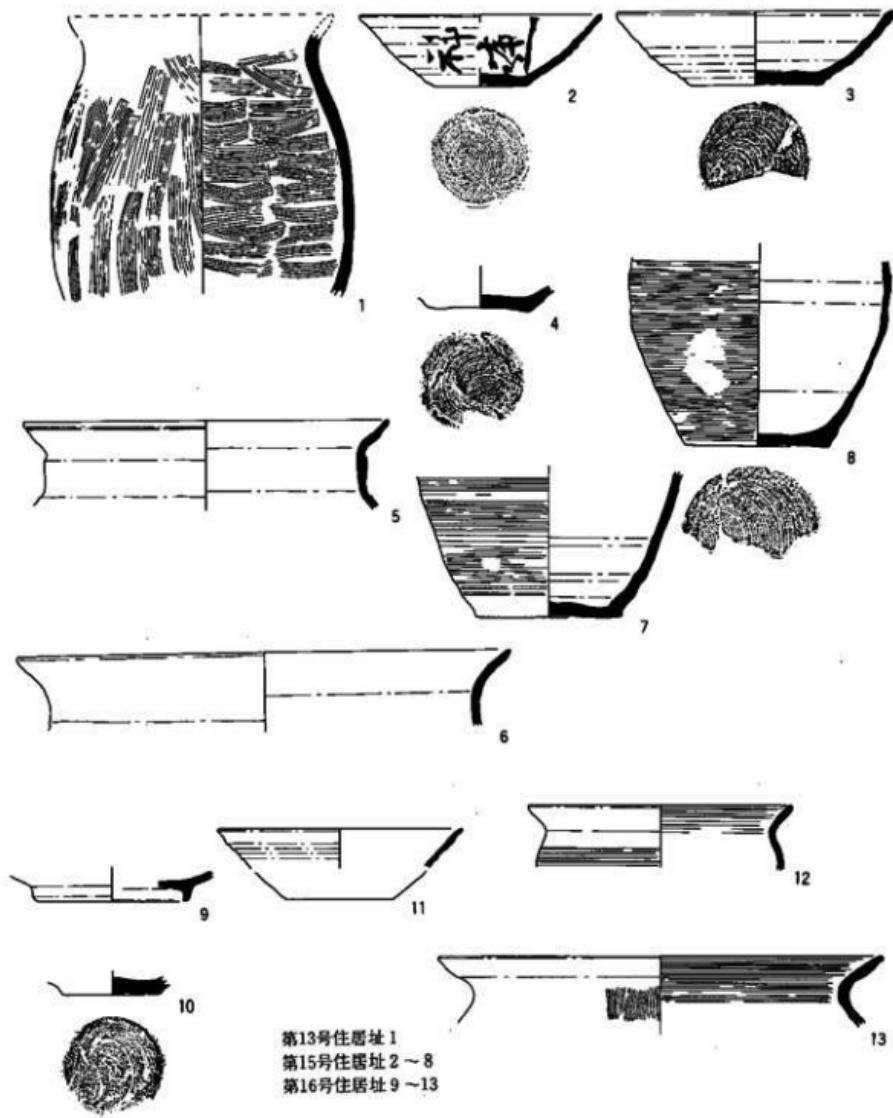
第2図 第13号住居址・土壤



第3図 第14・15号住居址



第4図 第16号住居址



0 5 10cm

第5図 土器実測図

表 土器觀察表

No.	出土点	種別	器種	寸法				色調		成形・調整・特徴・その他				備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外	内	面	外	内	
1	13住	土師器	壺	12.8	5.0	3.7	褐	内ハケ状工具による縫位ナデ・外ハケ状工具による縫位ナデ	n	n	n	n	n	墨書き有り
2	15住	須恵器	壺	n	14.5	7.0	3.8	灰	ロクロナデ・底部回転糸切り痕	n	n	n	n	所謂武藏型整
3	n	n	n	n	n	6.0	n	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所謂武藏型整
4	n	n	n	n	n	n	褐	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所調武藏型整
5	n	土師器	壺	n	19.2	n	茶褐	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所調武藏型整
6	n	n	n	n	26.0	n	茶褐	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所調武藏型整
7	n	n	小形壺	n	n	7.6	黒褐	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所調武藏型整
8	n	n	n	n	n	7.5	黄褐	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所調武藏型整
9	16住	灰陶器	皿	n	n	7.8	灰	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所調武藏型整
10	n	土師器	壺	n	n	5.1	青灰	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所調武藏型整
11	n	須恵器	n	n	n	12.8	青灰~ 黒褐~ 茶褐	茶褐	茶褐	n	n	n	n	所調武藏型整
12	n	土師器	小形壺	n	n	13.4	n	n	n	n	n	n	n	所調武藏型整
13	n	n	壺	n	n	23.4	n	n	n	n	n	n	n	所調武藏型整

第三章 調査のまとめ

県道柏矢町～田沢停線の拡幅工事に伴う矢原遺跡群馬場街道遺跡発掘調査は今回で3回目となる。又、昨年の9月から10月にかけては矢原遺跡群五輪畠遺跡（馬場街道遺跡に隣接）でも発掘調査が行われ、除々に矢原地区の歴史が解明されつつある。さてここでは第15号住居址より出土した墨書き土器と河川址について少しふれ、まとめとしたい。

この墨書き土器は住居址中央やや南西、覆土中層より正位の状態で出土している。第15号住居址からはその他、特異な遺構、遺物等は見られず全体的に遺物も少なかった。文字は体部に横位で2文字書きされており、西川久寿男氏教示によると、前半が「神」後半が「庭」の俗字で、「みにわ」と読み、「神城」という意味を有し、又、「神庭」を「かんば」と読むとするならば人名を示すものだそうである。墨書き土器は多くの研究者が分類を行っているが、坂詰秀一氏は文字の内容を、遺跡及び遺構の性格、身分、人名、地名、方位、数量、年紀、吉祥句、呪語、所有、習書等にわけている。「みにわ」はこの分類の遺跡の性格に、「かんば」は人名及至は所有に属するものと思われる矢原地区は古代の八原郷の中心地であるとの見解は先学諸氏の一一致するところであり、「みにわ」の存在は非常に興味深い点といえる。尚その他墨書き土器は馬場街道遺跡E区北河川址、五輪畠遺跡第1号住居址よりそれぞれ1点、刻書き土器は馬場街道遺跡第5号住居址より、「?田田長?」が五輪畠遺跡第1号住居址からは「大フ」が出土している。

次に河川址についてふれてみたい。矢原地区は鳥川系の水害に常に悩まされていた地域である。このことは「矢原神明宮に鳥居がないのは鳥居をたてるとすぐ水害で流されてしまうから」という伝承にもあらわれている。実際今回の調査においても、いたる所に河川の氾濫がみられ、住居址の一部が流失していたり、わずかに貼床らしきものと焼土が残るだけで住居址か否か判断できないものもあった。これは矢原地区がけっして住み易い土地ではなかったことをものがたつている。しかし今回の調査結果より矢原遺跡群は古墳時代前半から中世にかけてと長期にわたり生活が営まれ、特に平安時代後半に隆盛期をむかえていることを判明した。今後の課題としてはこの河川址と居住域、畠・水田域との関係がクローズアップされてこよう。又このことは社会的規制とも関連があったと考えられ興味深い。

最後にこの調査に御協力下さった先生方、地元の皆様、調査に参加され御協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

参考文献 小穴芳美「郷里制」「南安曇郡誌」第二卷上～第二編第三章第二節 S43.3

青木 治「平安時代の矢原」「鈴高町郷土資料館第8号」 S61.3

坂詰秀一「墨書き土器」「図録歴史考古学の基礎地識」 S55.7



D地区
検出作業



D地区
近景



F地区
近景

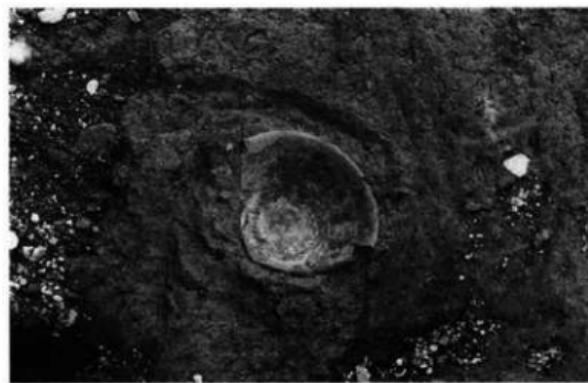
第1図版 調査地区近景



第14号住居址
カマド
遺物出土状態



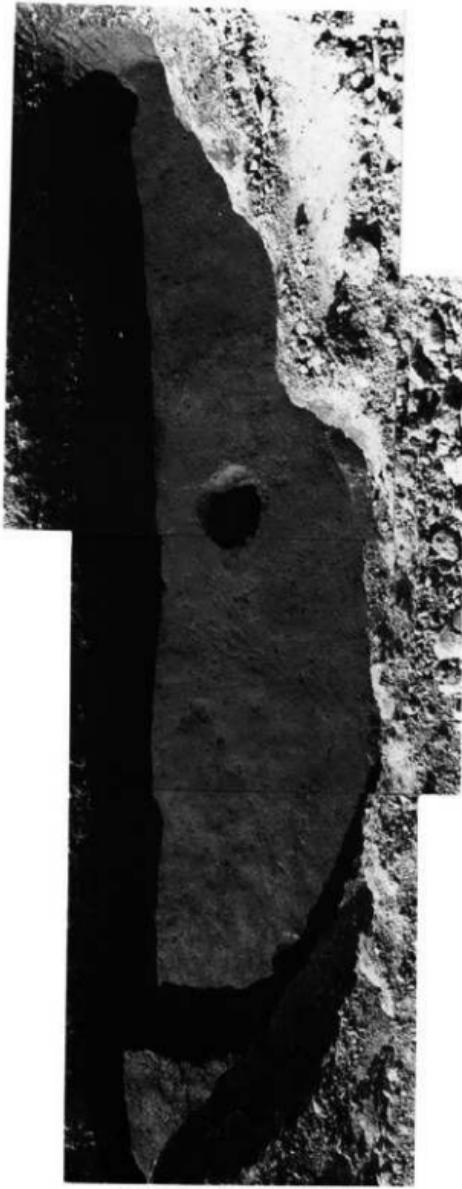
第15号住居址
遺物出土状態



第15号住居址
遺物出土状態

第2図版 遺物出土状態

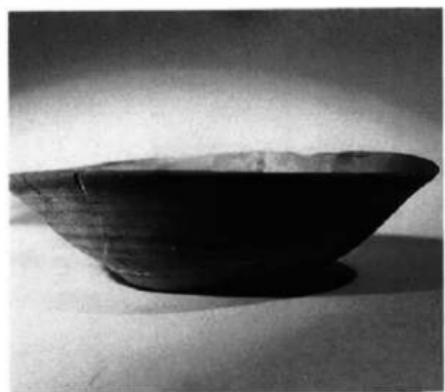
第16号住居址



第3図版 第16号住居址



1



2



3

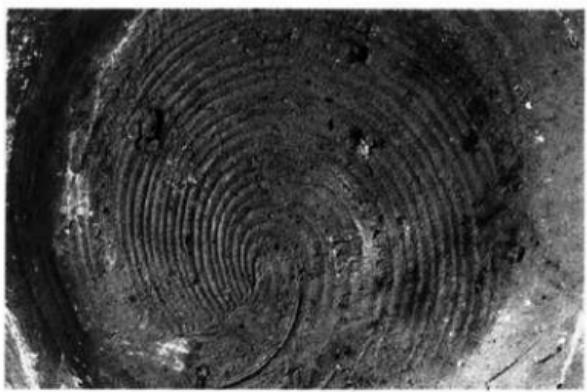


4

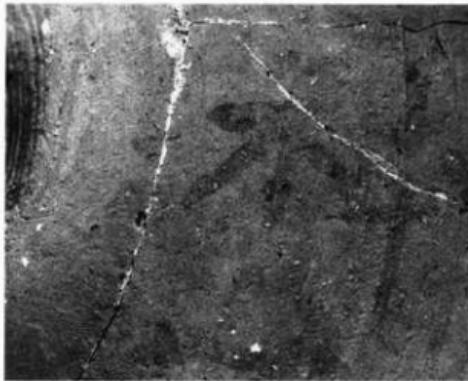


5

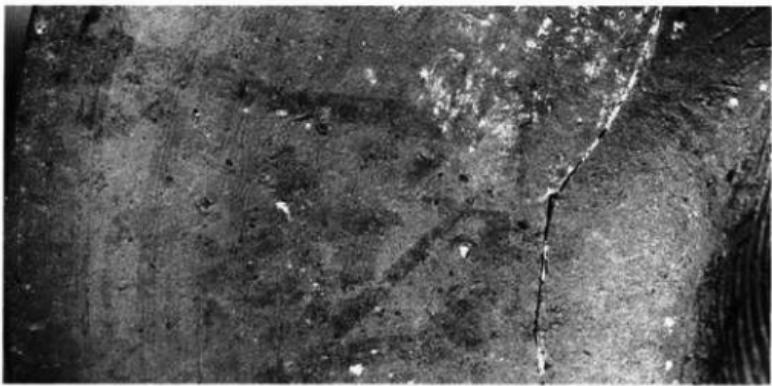
第4図版 出土土器 1



2



2



2

第5図版 出土土器 2

穗高町矢原遺跡群

(馬場街道遺跡)

——県道柏矢町～田沢停線拉幅工事に伴う緊急発掘調査報告——

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行 長野県豊科建設事務所
穗高町教育委員会

印刷 電算印刷株式会社
